Love Mode

昂透月弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｌｏｖｅ　Ｍｏｄｅ

【Ｎコード】
Ｎ５３３３Ｗ

【作者名】
昂透月弥

【あらすじ】
俺様御曹司×勝気庶民娘。
そこそこ美人で成績優秀なのに、何故か就職が決まらない苦学女子大生、藤野咲弥子。ひょんなことで知り合った俺様御曹司に気に入られてしまうが、彼女は反発してばかり。そんな彼女の将来やいかに！？
バイトで学費と生活費を稼ぎながら普通のＯＬ生活を夢見る女の子と、才覚者で融通の利かない俺様男の、波乱万丈……かもしれない物語。

章ごとに男女で視点が入れ替わりますが、お互い視点の補完ではありません。

※オリジナル小説サイト「ａｚｕｒｅ－ｍｏｏｎ　ｆｌｏｗｅｒ」にて連載しています。
サイト掲載分（Ａｃｔ．３－５まで）は、投稿し終えました。以後は週一くらいのペースで更新していきます。

また、Ｒ－１８サイトでは、えっちありの小説も公開中。詳細は昂透のトップページにて…。

登場人物紹介

藤野咲弥子（２２歳）　ふじの　さやこ
そこそこ美人で成績もいいのに、就職先が決まらない苦学女子大生。生活費と学費を夜のバイトで稼ぐ。お酒はめっぽう強い。

東海林隆広（３０歳）　しょうじ　たかひろ
日本有数の巨大企業グループの御曹司で実権もあり。俺様で口が悪いイケメン。テキーラを一本空けても酔わない酒豪。

佐藤春樹（３６歳）　さとう　はるき
隆広の第一秘書、頭の切れもよく読みの早い、優秀だが秘書の中では一番口が悪い。

吉永里久（２５歳）　よしなが　りく
運転手と護衛も務める隆広の秘書。無愛想なイケメン。

野添洋行（２９歳）　のぞえ　ようこう
隆広の秘書の一人で、身辺の世話（食事や清掃、洗濯など）も担う。

佐藤冬樹（３０歳）　さとう　ふゆき
世界に数台もないスパコンを使ってあらゆる情報を収集・分析し、隆広をサポートする。

高木直人（３４歳）　たかぎ　なおと
東海林グループの中核企業である「海東物産」の社長。物腰は柔らかいが性格は悪い。

赤星詩織（３３歳）　あかぼし　しおり
海東物産の社長秘書室長。直人の恋人。

東海林香緒里（３６歳）　しょうじ　かおり
隆広の姉。派手な顔立ちで目立つ存在。服飾デザイナーで自分のブランドも持っている。既婚者。

東海林由香里（３２歳）　しょうじ　ゆかり
隆広の姉。物静かで穏やかな女性。現在は結婚して家を出ている。

東海林多香子（２５歳）　しょうじ　たかこ
隆広の妹。ファッションモデル。ブランド大好きで浪費癖が抜けない我が儘娘。

東海林康三郎（７２歳）　しょうじ　こうざぶろう
隆広の祖父で東海林グループ前会長。

1（前書き）

咲弥子視点

1

う……ん……なんかアラームの音が聞こえる。
うるさいなぁ、なによこの音……あっ！　携帯のアラームだ！！
もう起きる時間なのか。まだ寝たりないあたしは、目を閉じたまま携帯電話を探した。肌触りのいいシーツの上を手探りしていく。おかしいな、いつも枕元に置いてあるのに。あ、あった！
目を開けたくても瞼が重い。今日は確か何も予定はなかったはず。あたしは適当なボタンを押して、アラームの音を止めた。
そのまま寝返りを打ってまどろもうとすると、顔の前に何かあるのを感じた。壁かな、と思ったけど何だか生々しい気配。なに、これ？
パチッと目を開けると、目の前にあったのは……
「ぎゃあっ！！」
なにこれ、なにこれ、人の顔ぉ！？
ベッドの上を這いずりながら後退していくと、だんだんとそれの全体が見えてきた。
お、お、男！？　なんであたしのベッドで寝てるの！？
眠っていたらしいその男は、あたしの悲鳴で顔をしかめた。そりゃ、あたしでも耳が痛くなるくらいの悲鳴だったもんね。
「なんだ、煩ぇぞ」
髪の毛をかきあげながら、欠伸を隠さず、むっくり起き上がったその男の上半身は……裸！
ええええ！？
仰天した瞬間、後退していた手が空を切った。
「あだっ！！」
思いっ切り背中から床に落っこちました。なんかフカフカしているから、痛くはなかった。しかも、勢いあまって足があたしの顔の横に。膝に挟まれる格好になって、動けないぃ！！

視界には天井が見える。でも、あたしの部屋ってこんな天井だったっけ？　それに、なにか黒々とした変なものが目の前にあって、天井がよく見えない。
いやあぁ！！　これってこれって！　あ、あたし、スッポンポンなの！？　なんでぇ！？
自分の体勢がよく分からなくてジタバタしていると、視界の隅にうっすらと脛毛の生えた足が見えた。あの男が起きてきたの！？　やだぁ、こんな体勢、もしかして全部丸見え！？
なんとか起き上がりたいのに普段しない体勢だから、どうやったら力を入れられるのか分からない。いやだぁ、こんな姿を見られるなんて。泣きそうになっていると、足首が掴まれて体が浮き上がった。それから背中を支えられて、床の上にペタンを座らされる。
「あ、ありがとう」
裸であたしのベッドに無断で寝てる奴にお礼を言うなんて嫌だったけど、助けられたのは事実だ。
その男は素っ裸でベッドに腰掛けた。う……ちょうどあたしの目線に股間が。そこが見えないように視線を上げると、意地悪く笑う男と目が合った。
「くっくっくっ、スゲェ格好だったな」
「あんたがあたしのベッドで寝ているからでしょ！　しかも裸なんて、非常識よ！」
「お前のベッド？　はははははっ！」
男は唖然としてから、腹を抱えて大笑いした。ムカつく！！
「ちょっと、なにがおかしいのよ！！」
「お前、部屋をよく見てみろよ」
まだ笑ってる。なによ、あたしが寝てたのに、あたしのベッドでないわけないじゃない！！
でも、確かにさっき見えた天井は、あたしの部屋のじゃなかった。床もそう。あたしの部屋はフローリングだし、カーペットはまだ敷いてないし、敷いていてもこんなにフカフカじゃない。

まさかここ、こいつの部屋だったりするの？　恐る恐る室内を見回した。
ベージュの温かみのある壁紙に、アンティークっぽいエレガントなランプの灯り。ベッドはキングサイズのダブルベッドで、ヘッドボードには何やら豪華な彫刻が。サイドボードには、骨董品のような置時計があって、朝の7時を少し過ぎていた。
ベッドの右側には大きな窓があって、カーテンは閉まった形跡がなかった。ぎゃっと思ったけど、見えるのは空ばかり。
なにここ！　知らない部屋だ！
「どうやら、納得したようだな」
笑い声はとっくに止んでいて、膝の上で頬杖をついた男がニヤニヤしながらあたしを見ていた。
「ここ、どこよ？　まさか、あんたの部屋？」
「はっ、まさか！　ゆきずりの女を易々と俺の部屋に入れるかよ。つか、これが男の部屋に見えるのか」
「ゆ、ゆきずり！？」
「覚えてねぇのか？」
お、お、覚えてって……あっ！　思い出した！！　思い出して、頭を抱えたくなった。
昨日、何社目になるか分からない面接を受けに行った帰り、どこかのバーに入って、凄いイケメンとお酒が強いとかで意気投合して飲みまくって飲みまくって……それから？
お、思い出せない！！
自分の顔から血の気が引いていくのが分かった。あたしが一緒に寝てたこの男が、あのイケメン？　二人とも裸ってことは、つまり、セックスしちゃった！？
うそぉっ！！
頭を抱えたまま、ベッドに座る男を見た。髪はボッサボサだし、うっすらと髭が生えているけど、昨夜のイケメンの面影は確かにある。

スッポンポンなのを全然気にしてないってことは、自分の体に自信があるってことよね。確かにそこらの男と比べたら、筋肉は程よく付いてるし、腹筋だって割れてるし、腕や足もマッチョじゃないけどガッシリしてる。だからってさぁ、アソコまで晒すってどうなの？

知らない間にタバコなんか吸って。こっちはテンパってるのに、なに涼しい顔してんのよ！

「あの、つかぬことをお伺いしますが」

「なんだ、急にしおらしくなりやがって、気色悪ぃな」

「話の腰を折らないで！　まさか、あたしたち、その」

ズバリ言うのが怖くてゴニョゴニョ言い淀んでいたら、男はタバコを灰皿でもみ消しながら、ニヤッと笑った。

「セックスならしたぜ」

やっぱりぃぃ！！

「途中までだがな」

「は？　どういうこと？」

「ふん、ちょうどいい。昨夜の続きをやるか」

訳分からないでいるあたしに向かって、そいつの腕が伸びてきた。慌てて逃げようと、立ち上がったところで腕を掴まれてしまい、思いっきり引っ張られた。体に感じた軽い衝撃の後、ベッドに押し倒される。

「きゃっ！　なにすっんぅ！」

抗議する声は男の唇で塞がれた。それからあっという間に気持ちよくされて、抵抗も出来なかった。

男は驚くほどに上手くて、こんなに激しく抱かれたのは初めてだよ。

顔にヒンヤリとした何かがあてがわれて、ハッと目を開けた。

白いタオルのようなもので視界が覆われている。それがとても冷たくて、火照った顔に気持ちよかった。
「起きたか」
溜め息をついたような声がして、顔のタオルを自分で避けると、あの男が見下ろしていた。
「あたし？」
「ヤッてる最中に、気絶しちまったんだよ。叩いても起きねぇから、しばらく放っておいた」
髪の毛が濡れていて、うっすら生えていた髭もなくなっていた。この顔は確かに、昨夜のイケメンだわ。さっきは全裸だったのに、今はバスローブを着ている。
「それで、シャワーを浴びてたの」
「散々煽られて気を失ったんだ。起こすより休ませた方が、親切ってもんだろうが」
非難のつもりで言ってやったら、肩をすくめてシレッと返された。そりゃまぁそうだけどさ。
ゆっくり体を起こすと少し眩暈がして、でもすぐに治った。布団を引っ張って、大事なところを隠すのも忘れなかった。今更って目をされたけど、女の子にとっちゃ今更でも大事なことよ。
「もっと優しくしてくれればよかったのに。そうしたら、気絶なんてしなかった！」
「そりゃお前、昨夜の仕返しはしてやらねぇとな」
「仕返し？」
意地悪く言われても、あたしにはバーで飲んだ後の記憶がないから、オウム返しに訊くしかなかった。男は呆れた顔でベッドに腰を降ろす。
「バーで呑み比べした後」
「呑み比べ！？」
「お前が言ったんだぜ。『あたしのお酒の強さを証明してあげる』っつって」

「うそ！？」
「俺はテキーラを一本空けても酔わねぇって言ってんのに、構わずマスターにそのテキーラをボトルで注文して、勝手に注いで勝手に飲み始めたんだ」
「そ、そんなことっ」
思わず反論しちゃったけど、話を聞いていて何となくそんな記憶が蘇ってきた。
「あの、さ、その時、マスターは止めてた？　よね？」
恐る恐る訊いてみると、男はニヤッと笑ってタバコに手を伸ばした。
「思い出してきたな。俺は面白ぇと思って見てたが、マスターは青褪めてたぜ」
う、そうだよね。それであたしが急性アルコール中毒なんかになっちゃったら、お店の責任問題にもなり兼ねないもの。
「えと……それから？」
「なんだ、いちいち言わねぇと思い出さねぇのか」
「悪かったわね！　しょうがないじゃない、覚えてないんだから！」
この男こそ、いちいち言い方が嫌味っぽいのよ！　顔も体も声もいいくせに、なんて意地の悪い奴なんだ！
男はタバコの煙りと一緒に溜め息をついた。呆れたような視線がムカつく。でも、知らない方が嫌だから、大人しく聞くことにした。
「最初は快調だったが、3杯目辺りから言動が怪しくなってきた。5杯目を空けたところで、おしゃべりが止まって目が据わってきたから、マスターに支払いして迎えに来た車に乗って帰った」
「いくら払ったの？　あたし、半分出すわよ」
こういうお金の絡んだことは、しっかり清算しておかないとね。後でなにが起こるか分からないもん。
男は、咥えタバコであたしに視線を繰れた。なによ、その呆れた目は！
「お前、その前にウィスキーをダブルで6杯飲んで、ウォッカをシ

ョットグラスで８杯飲んでたんだぞ」
「そ、そんなに！？」
アルコール摂取の最高記録更新だわ。そりゃ、記憶もなくなるはずよ。
「いったいいくら」
「二人で三万七千円」
「さ、さんまんななせんえん！？　出すわよ、返すわよ、絶対返すわよ！！」
折半したとして、一人壱万八千五百円か、しょうがないよね。社会勉強と思って手痛い出費を覚悟したのに、更に追い討ちを掛けられた。
「言っとくが、俺が飲んだのは精々一万円分だ」
「うぐっ、わ、分かった。ちゃんと二万七千円払うわよ！」
今は持ってないけど、そのくらいのお金なら銀行で降ろせばいいし。頭の中で残高の計算をしていたら、くっくっと笑い声が聞こえた。
「な、なによ！？」
「俺が女に飲み代を払わせるような男に見えるかよ？」
「見えるから言ってんじゃない。自分が飲んだ分の金額なんか言っちゃってさ」
「お前が折半なんか考えるからだ」
ギョッとした。なんであたしの考えてたことが分かるのよ！？
「金の計算してる奴ってのは、顔に出るんだよ。大体、自分の分を払うっつったら、ここの宿泊費をどうするつもりだ？」
「は？　宿泊費？」
「気付いてねぇのか。部屋ん中見りゃ、ここがどこか分かるだろうが」
呆れて言われても、あたしの部屋じゃないことは分かるけどさ。そういえば、こいつも自分の部屋じゃないって言ってたっけ。
きょとんとしていたら、「まぁいい、後で分かる」なんてボソッ

と言った。どういう意味よ！？
　不審満々な視線をくれてやったら、今度は辟易した顔で信じられないことを言った。
「車ん中で家を聞いても答えねぇし、挙句にスカートまくって膝に乗っかってきたから」
「ぎゃああ！　嘘でしょ！？」
「キスでなだめてたら俺もその気になって、ここに来た」
　マジで！？　もういい、もう聞きたくない！　どうせそれで、酔っ払った勢いでセックスして、目が覚めるまで一緒に寝てたんでしょ！？
　耳を塞いでそう訴えたら、男はやけに真剣な顔をして、耳を押さえた手を引き剥がした。
「なに言ってる。ここからが重要なんだよ」
「な、なんでよ？」
「部屋に着いてから服脱いで素っ裸になってベッドに上がり、お前から誘ってきた」
　ひえええええ！！　なにやってんの、昨日のあたし！？
「まぁ、そのまま言う通りにするのも面白くねぇんで、お前が晒したそこをいじり倒してやったら、お前は悲鳴を上げて悦んでたぜ」
「う、う、うっ」
「嘘じゃねぇよ。で、俺が愉しむ段階になったら、お前は勝手に寝ちまったんだ。お陰で俺は自分で処理しなきゃならなかった」
「ぎゃーっ、すみませんんんっ！！」
　さっき言ってた仕返しってそれ！？　そりゃ怒るはずだよ。誘っておいて寝ちゃうなんて、あたしってば、なんてことしちゃってたのさ！！　っていうか、なんで自分から誘っちゃうのよ！！
「ふん、まぁいい。さっき散々泣かしてやったしな」
「うう、ごめんなさい」
　恥ずかしさの余り、布団を引っ張って顔を隠していたら、ポンポンと頭を撫でられた。それがやけに優しい感触で、思わず顔を上げ

て男をマジマジと見た。すぐにとんでもない奴だって、思い知ったけど。
「だが、まだ許したわけじゃねぇ。裸の女を前にして、俺に自分で処理させた報いは、きっちり晴らさねぇと気が済まねぇからな」
「ちょっ！　なにやらせるつもりよ！？」
まさか、さっきみたいなのをまたやる気！？
警戒心をアピールしながら睨みつけてやったら、意地悪そうに笑っただけで、なにをさせるのかは教えてくれなかった。
くそう、謝って損した。
「とりあえず風呂に入って来い。３つドアを隔てた向こうにある」
なによ、その命令口調は！　ムッとしてベッドの上から動かないでいたら、「そのまんまで外に出る気か」って呆れられた。
くううっ！　尤もなことを言われて、反論が出来ない。しょうがないから、引っぺがしたシーツをずるずる引きずって、ベッドを降りた。
男はまたタバコを吸い始めている。分煙禁煙って煩いこのご時世で、ヘビースモーカーかい！
「あんた、名前、なんていうの？」
「隆広」
口にするまでに少し間があった。名字を教える気はないってことか。ま、当然だよね。
「あたしは咲弥子。一つ訊かせて」
「なんだ？」
「あたしが寝ちゃったって、そっちには関係ないじゃない。なんでしなかったの？」
「俺を見くびるなよ。そんなレイプみてぇなことが出来るか。大体、意識のねぇ体を抱いたって、面白くもねぇだろ」
もしかしてこの男は、これでも紳士なのかも？　なんて思ったあたしがバカだった。
「女は泣かせてナンボだぜ」

前言撤回。やっぱりムカつく奴だ！

シーツを体に巻いて、あたしは言われたドアを開けて部屋を出た。

2

ドアを閉めて、室内を見て、あたしは思わず声を上げた。
「なに、ここ！？」
見るからに高級なソファーセットに、プラズマテレビ、壁に掛かってる鏡には豪華な装飾が施されているし、家具や棚はアンティークな匂いがプンプンしている。この部屋の半分もあれば、あたしのアパートがすっぽり入るよ！？
さっき隆広は、男の部屋に見えるかって言ってた。つか、これって普通の家じゃないっしょ！？
ホテルのスウィートルームじゃないの。しかもこの豪華さ、ただのホテルじゃないよね、リゾートホテルだ！
「宿泊費……」
バーのお金を払うなら、ここの宿泊費も払わなきゃいけなかったわけ！？　二万三万どころの金額じゃないよ！　ひええ、あの話がなくなってよかった！！
ホッとしながら大きな窓に近付いて、カーテンが開いたままの外を見てみた。
「たっか！！」
眼下に埠頭が見える。その奥にあるのはベイブリッジ！？　赤レンガ倉庫も見えるってことは、ここは横浜みなとみらいか！
そんな場所のリゾートホテルって、しかもスウィートルームなんて、どんだけ高いのよ。しかも夜中に来て泊まれるもんなの？　隆広って何者よ。
もう一度部屋を見回して、ソファーの前にあるテーブルに、あたしの鞄が置いてあるのを見付けた。中身を確認してみると、お財布も携帯も化粧ポーチも入ってる。予備の履歴書もちゃんとあって、あいつに見られていないことに安堵した。
ん？　携帯！？

さっき携帯のアラームで目が覚めたよ。あれ、あたしのじゃなかったの！？　うわぁ、変なとこ触ってないよね！？　思い返してみても、あの時は瞼が重くてろくに見ちゃいなかったんだ。……ま、いっか。

「お風呂入ろ」

考えてもしょうがない、とりあえず体を綺麗にしよう。寝ちゃったあたしにしないくらいだから、ちゃんとスキンを付けてくれたんだな。妙なところで紳士な奴だ。

３つドアを抜けるとバスルームって言ってたっけ。

言われた通り、目に付いたドアを２回抜けると、広ぉいバスルームに入った。タオルは使い放題、アメニティも充実してる。

シーツを脱衣所に丸めておいて、奥にあるお風呂を見に行った。大きな窓があって、眺めは最高。これだけ高さがあると、裸でいても見られる心配はないから、開放感があるわね。

お風呂にはお湯がたっぷり入っていた。もしかして、あいつが準備してくれてた？　変に優しいところがあるんだな。

備え付けの洗面台に置いてあった、髪ゴムを使って髪をくくってお風呂に入った。

「うーん、気持ちいい！」

手足を伸ばしても、まだまだ余裕があるよ。広いお風呂っていいねぇ。はぁ、極楽極楽。……なんて手放しで悦に浸ってる場合じゃないよ！　さっき言ってた報復ってなにさ！？　めっちゃ気になる！

今のあたしは大学４回生。秋も深まる１０月になっても、未だにどこからも就職内定もらえないでいる。友達はみんな内定をもらっていて、あたしだけなんで？　って思いが、いつも付いて回ってる。

学校の成績は悪くない。ほとんどの科目で「優」を取れてるし、

単位を落としたこともない。資格だって、就職のために色々取った。バイトのことは心象が悪そうだから内緒にしてるけど、自活してるって履歴書に書いてあるのになぁ。

一次面接は通って、結構いいところまで進めるのに、いつも最後で落とされる。あたしのどこが落ちる原因なのかも分からない。もう何十社受けたか、数えるのも億劫だよ。

「もう、何でもいいから、どっかに就職したい！」

暴れたところで、どうにかなるもんでもないけどさ。

「このままどこにも決まらなかったら、バイトを続けることになるのかなぁ」

学費と生活費を稼ぐために、大学に入ってからホステスのバイトを始めた。ちゃんと勉強したかったから、実入りのいいバイトで選んでいったら、自然とそうなってたんだよね。

で、最初に門を叩いたのが、銀座の高級クラブだった。今考えると身の程知らずだったけど、美人のママと変わった社長さんで、ちゃんと大学に通いたいから週４日のバイトでって頼んだら、雇ってくれた。大学のスケジュール中心にシフトを組んでくれたし、ホント感謝したよぉ。

お客さんとの会話で、自然に時事問題とか経済のこととか覚えられて勉強にも役立った。正に一石二鳥だったね。

自分で言うのもなんだけど、みてくれも結構いいから、いい稼ぎになったし。これは、この顔で産んでくれたお母さんに感謝かな。まぁ、クラブ内のゴタゴタに巻き込まれることはあったけど、大したことはなかったし。

お陰で、節約生活しながらも、バイトには必要な美顔を保つ化粧品も買い揃えられて、今でも綺麗なままでいられてる。ママの美しさには、一生敵わないけどね。

就活に入った時も、ちゃんと就職したいからってママと社長に相談したら、面接の前日にはシフトを入れないように手配してくれた。本当は、卒業しても続けてほしいって言われてる。あたし、お客さ

んたちに評判がいいんだって。
そう言われて悪い気はしないけど、やっぱりちゃんとしたＯＬになりたいから。
「高望みなんてしないからさぁ、どっかに入れてよぉ！」
就活の神様とかがいるなら、あたしの願いを聞いてくれないかなぁ。

あんまり長く入っているとのぼせちゃうから、ほどほどのところでお湯から上がって、シャワールームで頭から足先まで全身を綺麗に洗った。フローラルのいい匂いが、体から香ってる。香水も必要なさそうなのは、さすがに有名な海外ブランドのシャンプーとボディソープだね。
タオルで水気を拭き取ってから、脱衣所にあったバスローブを着て、洗面台の椅子に座った。スキンケア用のアメニティグッズが、これまた有名海外ブランドのシリーズで、いくつか揃えられている。こんなにたくさんあると、どれを使うか迷っちゃうな。もしかして、お持ち帰りしてもいいのか？
いつも使ってるブランドの物を見付けたけど、せっかくだから違うのを使ってみた。うーん、感動するほど使い心地がいいって訳でもなかった。やっぱり、値段が同じくらいものなら、効力はそれほど変わらないのかも。
流行りのマイナスイオンドライヤーで髪も乾かし、ちょっと迷って寝室から持って来たシーツを抱えてバスルームを出た。
「んなもん、律儀に持ってくるなよ」
リビングに入ると、ソファーに座っていた隆広が呆れた声を掛けてきた。
仕立ての良さそうな黒っぽいスーツに身を包んで、長い足をこれ

見よがしに組んでる。へぇーすごいの着てるね、バレーヌのスーツなんてさ。すんごいお高くて有名なフランスのメンズブランドだよ。
降ろしていた前髪が上がっていて、キリッとした眉毛と切れ長の目が、イケメンに拍車を掛けていた。ネクタイは結んでいても緩んでいるし、襟のボタンも外しているのに、だらしない印象が全くなくて思わず見惚れちゃうほどカッコイイ。
こいつに目を奪われるなんて、なんだか口惜しくて目を逸らした。
テーブルの上に、さっきはなかった紙袋が3つ、あたしの鞄の傍に並んでいる。これまた有名ブランドのロゴが入った袋だ。
「それに服が入ってる。着替えて来い」
「は！？　なに言ってんの？」
「服は必要だろうが」
なんでそんな不思議そうに言うのよ。着替えって、二日くらい同じ服だって問題ないでしょ。
「昨日着てたので十分よ。これは返しておいて。お金だってバカにならないじゃない。こんな高いところの、あたし払えないよ」
「お前に払わせるわけねぇだろ。いいから着ろ」
この命令口調。まさか、これもさっきの報復の一つなわけ？　あたしの嫌がることを、とことんやってく気かい！
「それに、お前が着ていた服は、さっきホテルのクリーニングに出したしな」
「なっ！」
勝手になにやってんのよ、この男！
「昨夜の移動中に、俺の膝の上で散々暴れまわってくれたからな。スゲェ皺くちゃになってたぜ。あれで就活する気かよ」
「な、なんで知ってんのよ！？」
「あんなあからさまなだっせぇリクルートスーツ、分からねぇ方がおかしいぜ」
くっくっくっと笑われて、ムカついた。こっちは内定もらえなくて、落ち込んでるっていうのに！

「しっかしお前、あれ似合わねぇな」
ソファーの肘掛に頬杖ついて、偉そうな態度で笑われた。しょうがないじゃない。ああいう紺色の没個性なリクルートスーツを着ていけって、大学の就職課から言われたんだから。あたしだって、似合わないって分かってる！
酷く惨めな気分になって、涙が出そうになった。バイト先でやっかまれて意地悪されても、こんなに惨めにはならなかったのに。
泣きそうになったのが口惜しくて、あたしは隆広が示した紙袋と鞄をひっ掴んで寝室に入った。
後ろ手にドアを閉めた途端、ボロッと涙が零れた。口惜しい！絶対に就職して、あいつを見返してやるんだ！
でも服は着ないと。バスローブのままでなんて、帰れないよ。クリーニングが終わるのを待つわけにもいかないし。あいつが用意したものでも、服に罪はないと言い聞かせて、紙袋の中を確認してみた。
大きい紙袋には、シルクで作られたワンピースが入っていた。ワインレッドにちょっとピンク掛かった色合いで、女の子受けする色だ。膝上丈のフレアーな裾が可愛い。ノースリーブのボートネックで、肩から短めの同系色のケープカラーがついているのも、キュートな感じでいい。
女の子の服を、こうセンス良く選べるなんて、随分手馴れているのね。ま、あんだけイケメンだもん、女の方が放っておかないか。
更に小さめの袋には、パンプスと下着が入っていた。ブラジャーはまぁいいとして、お揃いのショーツまであるよ。太腿でとまるようにシリコンストッパーのついたストッキングは、ストッパー部分にゴージャスな柄が入っている。網目のストッキングじゃないのは、よかった。あたし、あれ好きじゃないから。
それにしても、着てみてビックリだよ。なんでこんなにもサイズがピッタリなの！？　ブラジャーもショーツもあたしの体型に合ってる。まさかあいつ、触ればサイズが分かる、なんて特技を持って

いるわけ！？　どんだけ女馴れしてんのよ！！
まぁいいや。言及するのは後にして、鏡を探した。一応どんな格好になっているか、見てみないとね。お？
さっきは分からなかったけど、収納型のクローゼットを見付けた。壁に同化していた扉を開くと、等身大の鏡がある。そこに映る着替えたあたしは、信じらんないけど、この服がとてもよく似合ってた。このワンピース、まるでオーダーメイドしたみたいだ。男の癖に、昨夜会ったばっかりでこういうのを選べるセンスが、逆に怖いわ。
バイト先でこれを着たら目立ちそう。物もいいしね。お値段高くて有名なブランドだもん。パンプスだって、みんなが欲しがるブランドだし。……もう考えるのはよそう。目立ち過ぎて叩かれるってのは、よく耳にしてきたことだから。
変な考えは頭の隅に追いやって、いつも持ち歩いている化粧ポーチで、薄くメイクをした。お店に出る時はもっと塗るけど、昼間ならこれくらいがちょうどいい。ていうか、これだけ服が映えると、メイクは薄い方が逆に綺麗に見えるのよね。
最後に髪を軽くブラッシングして、着替え終了。元々軽いパーマが掛かってる髪だから、何もしなくてもブローしたように見えるのは、いつも楽だと思う。
寝室を出ると、隆広がソファーに座って窓の方を見ていた。タバコはもう吸ってなくて、何か考え事をしてるような顔だ。憂いを帯びた表情って、こいつには似合わないと思うけど、やたらとカッコよく見えて狼狽えてしまった。
なんでこんな奴が、カッコよく見えるのよ！　まぁイケメンじゃあるけどさ！
「お待たせ」
目を逸らしつつ声を掛けると、あいつの視線がこっちに向いたのを感じた。
「ふん、似合うじゃねぇか」
「下着のサイズがピッタリなのが、不思議だったけどね」

「そりゃあ、実物が目の前にあったからな」
「は？」
実物ってあたしの裸！？　こいつ、やっぱりとんでもない奴だ。
「腹が減ったな。メシ食いに行こうぜ。この時間なら、専用のラウンジがまだ開いてるはずだ」
「専用？」
「上層階客室専用。要するに、ここの部屋だな」
そう言ってソファーから腰を上げた。立ち姿はモデルのように様になっていて、いちいちカッコイイのがムカつくわ。こいつの言葉を聞いてお腹の虫が鳴ったのも、なんか腹立つし。
部屋に置いてあるアンティークの時計を見たら、もう9時を回っていた。昨夜あれだけ飲んでも、二日酔いしないって便利な体よね。自分で言うのも何だけどさ。
隆広がこっちに歩いてくる。くそぉ、無視したいのに目で追っちゃう自分が嫌だった。こんなに存在感のある男、お客さんでもそうそういないよ。
「なに見てんだよ」
ニヤニヤ笑いながら、目の前で見下ろされた。
「別に！」
ぷいっと横を向いたら、またくつくつ笑われた。くそう、こいつを見返してやるチャンスはないのか！　あるわけないよね。こいつ抜け目なさそうだし、絶対に人に弱味を見せないタイプだろうから。
ムカムカしながらあらぬ方向を見ていると、突然肩を抱かれて驚いた。
「ちょっ、なにすんのよ！？」
「メシ食いに行くんだろ」
「だからって、なんで肩なんか抱くのよ！？」
「エスコート」
どこが！？　こんな小バカにしたような顔で見下ろしながら言われても、嬉しくない！

体を突き飛ばして離れようとしたら、逆に力強く引き寄せられてキスされた。歯を割って舌が入ってくる。必死に胸を押してもビクともしない。男との体力の差を思い知らされて、屈辱的だ。
それがまた欲情させるような舌遣いで悔しい。体の奥がしびれるような感覚に、自然と甘い呻き声が出た。
だんだん気持ちよくなってきたところで、唇が解放された。自分の顔が赤くなっているのが分かる。
火照った顔で睨み付けたら、勝ち誇ったような顔で見下ろされた。くそぉ。
「じゃ、メシ食いに行くか」
「こんな時間でも開いてるの？」
「問題ねぇ」
そう言って、またあたしの肩に手を回してきた。一瞬ゾクッときたけど、意識をすれば感じることもない。
大人しく隆広について歩いて、部屋を出た。

3

隆広に肩を抱かれながら、上層階客室専用ラウンジにやってきた。

こいつ、背が高いな。かなり高めのヒールがあるパンプスを履いたあたしの頭頂部が、やっと顎先に届くくらい。こいつにとってあたしの肩の位置って、手を置くのにちょうどいい高さなんじゃないの？

ラウンジは低い敷居に囲まれた、開放感溢れるフロアだった。壁が全面ガラス張りで天井が高く、陽の光りだけで十分に明るい。入口で待機していたコンシェルジュが、隆広を見てちょっと姿勢を正した。

それがあたしに、何だか違和感を与えた。

お客が来ただけで、普通あんな反応を見せる？　しかも、やけに緊張したような面持ちで。それにあたしに向けられた視線も、どことなく変だし。宿泊客のカップルが食事に来ただけで、こんな目はしないでしょ。

もしかして隆広って、ここの経営者の息子とか？　それなら、深夜にスウィートルームに泊まれたのも、こんなブランド服をフルコーディネートで揃えられたのも、あたしに向けられる視線の意味も頷ける。あり得ない話じゃないよね。

ラウンジにはチラホラとお客の姿が見えた。そんなに多くないのは、この時間のせいだよね。でも、あたしらみたいな若いカップルってのはいない。みんなお金持ちそうな中高年カップルばかりだ。

げっ！

お客の中に知ってる顔を見付けてしまった。バイト先によく来るお得意様だ。あたしは指名されたことはないけど、ヘルプでついたことがある。店の中で顔を見られてもいるだろうし。

あたしに気付かれたらヤバイ！　就活中にホステスやってるなんてこいつに知られたら、絶対に何かされる！！　あのお客からは、

なるべく遠くの席にしてもらうしかない。でも、どうやって？
ぐるぐる考えを巡らせながら、隆広にくっついていた。いいアイデアは浮かばなかったけど、悩む必要なかったみたい。コンシェルジュの方が隆広に気を利かせたのか、かなり奥の方の席に案内してくれたから。
椅子に座ると、お得意様がいる席は、まったく見えなくなった。
ホッとしていると、ニヤニヤ笑ってる隆広と目が合った。もしかしてバレた！？
「なによ？」
「ふん、ここに着くまでの間、様子が変だったな。どうしたよ？」
あ、知ってる顔があったとは気付いてないみたい。よかった。となると、ここはチャンスかも。
「あんたこそ、ここの経営者の息子かなんかでしょ。あたしみたいなの連れ込んでいいわけ？」
ズバリ言ってやったら、ちょっと驚いた顔をした。やったね！
心の中でほくそ笑んでいると、隆広はニヤッと笑って案内したコンシェルジュを呼んだ。若いそこそこイケメンの男は、何故か青ざめた表情で足早にやってきた。不思議に思って見ていると、予想外の言葉が出てきた。
「如何しましたか？　オーナー」
「オーナー！？」
信じられない単語を聞いて、つい腰を浮かせて大声出しちゃった。それまで所々で談笑していた声がピタッと止まる。
ヤバッ！　慌てて口を押さえて席に着いた。み、見られなかったよね？　メイクだってお店とは違うし、遠目だったら分からないかも。そのように祈った。
隆広は、肩を揺らして笑ってる。こいつ、わざとコンシェルジュを呼んだんだ。嫌な奴！
怪訝な顔のコンシェルジュに、何でもないことを告げて下がらせた。隆広はニヤニヤ笑いながらあたしを見ている。

「お前、面白ぇな。どうして経営者の息子なんて思ったんだ？」
「だって、入口にいたさっきの男が、あんたを見て緊張して姿勢を正してたし、あたしを見る目も何か意味深だったから。それにあんたの歳を考えたら、オーナーとは思わないわよ」
「ふうん」
なによ、感心したような顔しちゃって。笑いたいなら素直に笑いなさいよ！
惨めな思いはこれ以上したくなくて、嫌味たっぷりに言ってやったら、目を丸くされた。
「お前、なんだよそれ。俺は率直に感心したんだぜ。大抵の女は俺を見てボケッとしてるから、従業員の仕草や顔なんか見もしねぇ」
「そりゃ、あんたに惚れてればそうでしょ」
なによ、自慢話のつもり？
「ふん、だからお前はそうじゃねぇってところが、面白ぇんだよ」
「誰があんたに惚れるのよ！　あんなことしといて惚れる女がいたら、会ってみたいわ！」
なるべく大声にならないように注意して、言ってやった。すると、右手の指を折り始めた。まさか、今までの女の数を数えているわけ？
「ここに連れてきたのは何人もいたが、お前みてぇなのは初めてだぜ」
「あ、そう。変わってて悪かったわね」
右手の指が折り返して立ってることは、ちゃんと見てたわよ。どんだけ女を連れ込んだのさ！
いちいち心の中で突っ込むのも疲れたから、窓の外を眺めることにした。みなとみらいの観覧車が見える。この辺りって、普通の都市とは景観がちょっと違って、近未来って感じがする。名前そのものだわね。
ボーイがメニューを持ってきた。いつの間にか、グラスにお水が注がれている。ワイングラスみたいなでっかいグラス。あたしは気持ちを落ち着けようと思って、一気に半分くらい飲んだ。美味しい

お水だ。
　メニューを眺めていると、名前を呼ばれた。睨み付けるように隆広を見ると、溜め息をつかれた。
「お前、もちっと愛想よくしろよ。美人が勿体ねぇ」
「大きなお世話！　なによ？」
「ったく、可愛くねぇな。注文は俺に任せろ。美味いの食わせてやるよ」
　あたしはもう一度メニューに目を落とした。いくつか種類があって、色々チョイス出来るみたい。この中に嫌いな物はないし、アレルギーもないから、任せてみることにした。こいつのホテル自慢を見てやろうじゃないの！

　5分ほど待って出されてきたのは、温かいコーンスープに焼きたてのフランスパン、トロトロのプレーンオムレツにカリカリに焼かれたベーコン、そしてクリームチーズ・ドレッシングのサラダだった。
　ちょっと呆れたよ。あたしは強いからいいけどさ、記憶なくすほどお酒飲んだ人間に、翌朝こんなご飯を出すのか、こいつは。
「どうした？　食えよ」
　そう言いつつ、隆広はさっさとパンに手を出している。
「あのさ、あんた酒飲んだ人間に、いつもこんな料理食べさせるわけ？」
「あ？　んな訳ねぇだろ。あれだけ飲んで二日酔いにならないお前に、遠慮なんかいるか？」
　くそぉ、またしても反論出来ない。あたしだって、自分のザル加減に呆れているわい！　バイト先でも、これで重宝されているところが、ちょっぴしあるしなぁ。
　まぁ、ご飯に罪はないから食べることにした。いい匂いで、さっ

きからお腹の虫が鳴りっ放しなのよ！

冷めない内に好きなコーンスープを口にした。むむっ！　唸りたくなるほど美味しい！　クリームが濃厚で、コーンの味に深みがあるように感じる。コーンスープってこんな上品な味のものなの！？

少しくらいは上品に食べようと思っていたのに、想像以上に美味しくて、あっという間に飲み終えちゃった。続けてフランスパンにも手を出した。焼きたてってこんなに軟らかいんだ。フランスパンって、硬いのしか知らなかった。咀嚼していると甘味が増してくるし、バターなんか付ける必要ないね。

これは、オムレツとベーコンが楽しみだわ。その前にサラダを食べておこう。美容にもいいから、いつも繊維食品は先に食べるようにしている。

ドレッシングのチーズが、妙に美味しい。酸味があるけどチーズの濃厚さもあって、レタスが甘く感じるよ。トマトもフルーティだし、たぶん野菜そのものもきっと質がいいんだ。

美味いのを食わせてやる、というこいつの言い分は本当だった。なんか、こんなにこいつの自慢通りだと、腹が立つなぁ。

オムレツは中身がトロッとしていて、玉子の味もしっかりしているし、ベーコンと一緒に食べると絶妙な塩加減でグッ！　ビックリするくらい美味しい食べ物って、初めて食べたよ。お客さんとの同伴でご飯食べに行ったこともあるけど、こんなに驚くほどの美味しさとは出会っていなかった。

「ふん、そんなに美味いか」

前方から自慢げな声が聞こえて、ホクホクした気分がブチ壊しになった。

「なによ、あんたが作ったわけじゃないでしょ」

「いちいち可愛くねぇ女だな。頬が緩んでたぜ。美味かったんだろ、素直になれよ」

相手があんたじゃなかったら、素直になってるわい！

「大きなお世話！　食べてるんだから、静かに味あわせてよ」

「ちっ、素直なのはセックスの時だけかよ」
「ごふっ！」
とんでもない言葉に、口に入れたオムレツを噴いちゃった。
「ちょっと、食事中でしょ！　デリカシーってもんがないの？」
「お前みてぇな可愛くねぇ女に使うデリカシーなんか、持ち合わせてねぇよ」
ムッカァ！！　笑いながら言うセリフじゃないよ！　こいつ最低！　イケメンでお金持ちでも、ろくでなし男だわ。
せっかく美味しく食べていたのに、その後はデザートもちっとも美味しいと感じられなくなった。全ては、こいつのせいだ！

4

あたし、こんなにプリプリ怒るような性格だったっけ？　こいつといると、調子狂う。

胸をムカムカさせながら食後の紅茶を飲んでいると、隆広……モノローグで名前を言うのも嫌だけど、しょうがない！　隆広の背後から近付いてくる、中年男性の姿が目に入った。

危うく紅茶を噴きそうになったよ。バイト先のお得意様じゃん！

確かどっかの大企業の社長さん。席は遠くだったのに、なんでわざわざ来るのよ！？

しかも、バッチリ目が合っちゃった。まさかバレた！？　逃げ出したいけど、そんなことやったらこいつに付け入る隙を与えちゃうし。絶体絶命だわ！

冷や汗ダラダラで、お得意様と視線を合わせない様、窓の外に視線をやった。大観覧車が回っているのが見える。もう営業始まってるんだ。

「東海林様、その節は大変お世話になりました。わたくし」

お得意様の声が聞こえた。こいつ、名字は「しょうじ」っていうのか。こんな最低男でも、大企業の社長から「様」付けで呼ばれるんだ。世の中って理不尽だよね。

その直後、ガンッと派手な音がして、テーブルが激しく揺れた。お皿に置いたナイフとフォークが、ガチャンッと音を立てる。

「わっ！」

水の入ったグラスが倒れそうになって、慌てて手で押さえた。

いきなり何すんのよ、こいつ！！

見ると、靴底をテーブルの縁に当てているのが見えた。なに、足でテーブルを蹴ったわけ！？　目上の人間が挨拶したのに！？

無礼な態度に抗議してやろうと、口を開いたところで隆広の顔が見えて、そのまま何も言えなくなった。

メチャクチャ怒っているような表情で、テーブルの上に睨むような視線を向けている。正直驚いた。こいつって、こんな怖い顔もするんだ。

お得意様は、衝撃を受けたような表情で固まっている。まぁ、そうだよね。若造相手にちゃんと礼を尽くして挨拶したのに、テーブル蹴られたんだから。

いきなり隆広が立ち上がった。ギョッとしていると、あたしに向かって手を伸ばした。

「咲弥子、行くぞ」

「え、なん」

みなまで言わせずに、隆広に腕を引っ張られて立ち上がり、よろめいたところを今度は腰を抱かれた。

「ちょっ」

こんな場所で、しかも目上の人の前で、なにをするんだこいつは！！

抗議しようと口を開けたところで、こいつの方が顔を寄せてきた。まさかこんなところでキス！？　と身構えていたら、耳元で囁かれた。

「いいから、今は逆らうな。俺の女の振りしてろ」

「……」

やけに真剣な口調に、マジマジと隆広を見た。さっき部屋で見た憂いを帯びた目が、今はあたしを見下ろしている。頼まれたって、こいつの言うことを聞くなんて嫌だと思ってたのに、その目を見たら逆らえなくなった。

しょうがない、頼まれてやろうじゃないの。これも、こいつの弱味ってやつよね。

隆広の体と密着している腕を伸ばして、あたしもこいつの腰を抱くようにした。お互いに寄り添わせるようにすると、体で支え合う形になって、かなり親密な関係に見せることが出来る。

これはバイト先で身に付けたやり方。しつこく迫るお客には、お

店の黒服に恋人役をお願いして、こんな姿を見せ付けることで予防線にしていた。
更にバイトを始めてからすっかり得意になった、お店用のサービス微笑を浮かべて隆広を見上げる。こいつも、極上の微笑みであたしを見ていた。演技だと分かっていても、つい見惚れそうになっちゃって、自分を叱咤した。
見てくれがよくても、こいつは最低男だよ！　でも、こんな営業スマイルみたいなのも出来るってのは意外だった。
隆広は未だにショックを引きずってそうなお得意様に向けて、初めて見る冷たい視線をくれた。傍で見上げていて、ちょっと寒気がするくらいだった。
「東海林様……」
「見て分からねぇか？　今はプライベートを楽しんでんだ。お前だってそうだろう。ビジネスを持ち込むなんて無粋なマネすんじゃねぇ」
お前！？　明らかに目上の人間に対して「お前」！？　やっぱりこいつ、最低だ！
顔は努めて笑顔で、心中では大いに罵っていると、腰を抱いていたこいつの手に力が入った。歩くって合図だな。彼女の振りをして大人しくついて行ってやる。
視線を前に向ける直前、お得意様はこの世の終わりのような顔をしていた。そのままあたしに目を向けたような気がしたのは、やっぱり気付かれたのか。
今後バイトがしづらくなるよ。どうしよう？
隆広に誘導されながら、ぐるぐる考えていたら、背後から信じられない言葉が聞こえた。
「隆広様、その女は高級クラブ『椿』のホステスですぞ。男を手玉に取るような女と、ご自分のホテルに宿泊などなさったと世間に知れたら、どうします！」
やっぱりバレてた。しかも、微妙に脅迫してんじゃん。ヤバい！

！　こういう事態にはならないように、付き合う男は細心の注意を払って選んできたのに、今までの苦労が水の泡じゃん！
泣きたくなってきた。なんであのバーに入っちゃったのさ、昨日のあたし！！
ピタッと隆広の足が止まった。怖くて確認出来ないけど、あたしを見下ろしているように感じる。ああ、もうダメだ。こいつにホステスやってることバレちゃった。部屋に帰ったら、絶対にいいように弄ばれる！！
うつむいて目を瞑っていると、隆広が振り向いたのが分かった。
何を言うのよ、こいつ！？
「つまりお前は、この俺がこいつの手玉に取られる男だと言いたいのか」
何を言われてもしょうがないとビクビクしていたのに、それは予想外の言葉だった。
驚いて隆広を見上げた。それからお得意様を見る。可哀想になるくらい青ざめた顔で、狼狽えているのが分かった。
それなりの立場のおじさんをここまで慌てさせるって、リゾートホテルのオーナーってそんなに凄いの？　それとも、実家が凄い資産家で、そこの道楽御曹司とか？　後者の方があり得そうだな。
なんてことを考えていたら、それを裏付けるような言葉が隆広の口から飛び出した。
「随分偉そうにぬかしていたが、要するにお前はその歳で女遊びをしていると、公言したようなもんだ。お前こそ、自分の身辺に気を付けた方がいい。今後は特にな」
どう見てもこいつの方が年下なのに、ウチのお店のお得意様を鼻で笑った。それから「行くぞ咲弥子」と言われたので、大人しくついて行くことにした。
ビッグマウスって、こいつみたいな奴を言うのね。別に高級クラブに遊びに行くくらいいいじゃない。こういうお金を持っているお得意様がいてくれるから、あたしみたいのが大学に行って生活出来

るんじゃないの！
　こんな凄いリゾートホテルのオーナーをやってる御曹司なんて所詮、苦労知らずのお坊ちゃんね。
　ああ、でも明日から……うんにゃ、今日からバイトどうしよう！？　きっとこのお得意様の口からママや社長に伝わると思う。うわぁ、メチャ行きづらい。ママも社長もいい人だから、クビにはしないと思うけど、やりづらくなるなぁ。
　それもこれも、全部こいつのせいだ！！

　エレベーターに乗って扉が閉まったので、隆広から離れようとしたら、腰をガッチリ掴まれていて動けなかった。
「ちょっと、もういいでしょ！　離してよ！」
「断る」
「はあ？　なに言ってんのよ、離っ！」
　無理矢理引き剥がそうとしたら、壁に背中を押し付けられた。そんなに痛くはなかったけど、いきなりされたショックで言葉が続かなかった。見上げると、隆広が顔を近付けてくる。
　またキスされるのか！？　咄嗟に顔を背けたところで、エレベーターの扉が開いた。ホッとすると同時に、腕を引っ張られた。そのままエレベーターを降りて、引きずられるように泊まっていた部屋に戻ってくる。
　リビングに入ると、いきなり叩き付けるように壁に押し付けられた。
「いった！　なにすっ」
　顔の両側にダンッと音を立てて、隆広が手の平を壁に付いた。
　ビックリして、口を開けたまま見上げていると、あたしを覗き込むように顔を近付けてくる。無言で睨み付けてやったら、溜め息をつかれた。

「お前、だからもちっと愛想よくしろって。さっきの笑顔はどうしたよ？」
「営業スマイルがほしいんだったら、いつでもやってあげるわよ。この手をどけてくれたらね」
「ったく、俺にそんな口を利くのはお前くらいだぜ」
「あ、そう。悪かったわね」
こいつは呆れているけど、あたしも呆れたわよ。なによその俺様世界。こいつの周りには、こいつの言うことを聞く人間しかいないのか。そういう人たちに囲まれていると、こういうのが出来上がるのね。
左側の手がどいたところで、すかさずそこからすり抜けようとした。でも、離れた左手で今度は肩を押さえられた。またかと思って睨み上げたら、やけに真剣な目とかち合った。
「なによ？」
「お前、気に入ったぜ。マジで俺の女になれよ」
「はあ？　なにトチ狂ったこと言ってんの！」
「いいや、本気だぜ。ホステスやってるのに、わざわざ就活するってのも笑えるしな」
そう言って、本当におかしそうに肩を揺らして笑う。
心の底から腹が立った。怒りで体が震えるって、本当にあるんだ。
「いいでしょ！　あたしの勝手じゃない！！　ホステスが普通にOLの夢見ちゃ悪いっての！？　生活と勉強のためにお金がいるのよ！！　あんたみたいに道楽でオーナー出来るような奴に、理解してもらおうなんて思っちゃいないわ！！　そこどいて！！」
「断る。ああ、俺の女になるってんなら、就職先を斡旋してやってもいいぜ」
その、いかにも小バカにしたような表情に、カッと頭に血が上った。髪の毛が逆立ったように感じるくらい、それは激しかった。
「誰があんたの世話になんかなるかぁ！！」
初めて、生まれて初めて男の股間を蹴り上げる、なんてことをし

たよ。ヒールと靴底がめり込む感覚が生々しい。
隆広は顔から血の気を引かせて、無様に倒れ込んだ。股間を押さえて悶絶している。そこが男にとって急所だってことは、もちろん知識として知っていたし、蹴ったらどうなるか、なんて考えたこともなかった。こいつの様子を見ていると相当に痛いんだな。
でも、良心のカシャクなんて微塵も起きない。あんなことを言ったこいつが悪いんだ。
あたしは寝室に飛び込んで鞄を引っ掴むと、リビングにとって返した。隆広はまだ悶絶している。傍に近寄ると、ピクピク痙攣しながらあたしの足を掴もうとしたから、その手も蹴ってやった。
「お、おま、なに、すん、だ」
「ふん、人をバカにするからよ！　いい気味だわ！！　昨日とここの宿泊費とこの服一式のことは、一応お礼を言っておく。ありがとう。だから、二度とあたしの前に姿を現さないで」
棒読みもいいところで言い捨てて、さっさと部屋を出て行った。後ろから何か言われたようだけど、途切れ途切れだったし声も小さかったから、よく聞き取れなかった。別に、もう二度と会うつもりはないから、なにを言われたって気にしなかった。
エレベーターに乗ってから中にある各階案内を見て、地下駐車場があるB1を押した。フロントのある入口は1階だけど、地下の駐車場なら誰にも見られないと思ったから。
独特の浮遊感が体を包んで、エレベーターが下がっていく。ガラス張りの壁から、外の景色が見えた。だんだんとその景色が歪んでいって、ボロッと涙がこぼれた。

5

エレベーターが地下に着く頃には、ボロボロに泣いていた。こんな顔、誰にも見せられないよ。どこの階にも止まらなかったのは、幸いだった。

扉が開くと周りも確認せずに、ひたすら歩いた。歩く度にヒールがカツカツと、甲高い音を立てる。

いつまで経ってもヒールの音が止まないから、泣いて痛い目を開けて、周囲をよく見てみた。壁にある出入口の文字と矢印が示すのは、逆方向だった。今まで闇雲に歩いていたから、それに気が付いていなかった。そっちに向かって再び歩き出す。

ようやく明るくなって地上を歩き出してから、だんだん嗚咽を抑えられなくなってきて、子供みたいにわんわん泣きながら歩いた。周囲から注目されているのが分かった。でも、途中で泣き止むことは出来なかった。こんなに泣きわめくのは、凄く久しぶりだ。

どこに行くとも決めてなくて、ただ足を動かしていたら、突然、後ろから羽交い締めにされた。体に感じるのは、スーツの感触と力強い腕。そのまま後ろに引きずられる。

「いや！　離してぇ！！」

拘束されてもジタバタもがいていたら、耳元で囁かれた。

「分かった。離してやるから、今は言うことを聞け」

隆広の声だ。もう二度とあたしの前に姿を現さないでって言ったのに、なんで追い掛けてくるのよ！

こいつの言う通りにするなんて嫌だ。あたしはその場に座り込んだ。

「やだ、やだぁ！」

「ったく、手間掛けさすな」

苛立ったそんな声を耳にした瞬間、体が浮き上がった。肩から首の辺りと膝の裏に、力強い腕の感触。ハッと気付けば、隆広にお姫

様抱っこされていた。ぎゃー！！
「やだっ降ろして！」
「今はダメだ。もう少し我慢しろ」
思ったより優しく聞こえたその声に、口を開けて隆広を見上げた。怒っているような感じはしないけど、こいつの股間を蹴り上げて来ちゃったんだよね。
絶対、嫌味とか言われて、更にまたとんでもないことされちゃうんだ。しまったなぁとは思ったけど、元はと言えば、こいつが取引なんかしようとするからであって、あたしは別に悪くない。
よくよく周りを見てみると、そこは広い交差点だった。信号待ちの人々が唖然とあたしたちを見ている。中には１０代の女の子たちが、こっちを指し示しながらキャッキャッ言ってる。うう、恥ずかしい。早く下ろせ。
横断歩道の信号が青に変わって、隆広はそのまま歩き始めた。てっきりホテルに連れ戻されると覚悟していたのに、赤レンガ倉庫の前を突っ切って公園に出た。
天気がよくて、秋の日差しがちょっと暖かい。海風もあるけど、そんなに強くなくて気持ちいい。つか、お姫様抱っこされてるから、こいつの体温で寒くないんだよね。気付きたくないことに気付いてしまった自分が憎い！
観光スポットだから、今日みたいな平日でも結構人がいる。そんな中を抱っこされて歩くなんて、体のいい羞恥プレイだ！
「あのさ、もう降ろしてよ」
「断る。降ろしたら逃げるだろうが」
「逃げないよ、ちゃんとついて行くから。この格好の方が恥ずかしい」
つい本音がポロッと口に出ちゃった。あたしのバカ！
「ふん、だったら着くまで恥ずかしい思いをしてろ」
やっぱり！！　くそぉ、つい口にしちゃった自分が悪かったとはいえ、こいつはやっぱり最低だ。

しょうがなく、こいつの腕の中に収まっていることにした。泣きすぎたせいで、目がまともに開けられないのもあったし。きっと瞼が腫れてスゴイ笑える顔になってるよ。

それにしても、人一人抱き抱えてよくこんだけ歩けるな。背中や足に触れる腕の感触は、疲れた様子が全然ない。

隆広の足が止まったのは、芝生のあるベンチのところ。そこに腰を降ろされた。

「ここで待ってろ。すぐに戻る」

「あ、うん」

ポンと頭を撫でられた。さっきとは打って変わって優しいな。なんか企んでいるのか？

去っていく後ろ姿を見送りながらそう思ってしまうのは、相手がこいつならしょうがないよね。就職先斡旋と引き換えに付き合えなんて、マジで言う奴なんだから！

鞄から化粧ポーチを出して、コンパクトミラーで自分の顔を見た。うっ……顔全体が笑える状態になっていた。瞼が腫れていて、目は真っ赤に充血してる。鼻の頭も真っ赤だし。泣いたって、一目で分かっちゃうな。

いくら見ていても、泣き腫らした顔が治るわけでもなし、早々にコンパクトを化粧ポーチに戻して、顔に付いていた涙や鼻水をティッシュで拭いた。

あいつ、なんで追っ掛けて来たんだろ？　しかもこんな場所に連れてきて。股間蹴り上げた報復するなら、ホテルに戻った方がずっと都合がいいはずなのに。

正面の奥にある柵の向こうは、海だった。カモメかな、白い鳥が飛んでる。ベイブリッジの橋も見えた。風に吹かれながら、ベンチの背もたれに寄りかかって、ボーっと海を眺めた。

泣くといろんなものがスッキリするって聞いたことがあるけど、あれって本当のことだったんだ。就職が出来なくて鬱々していた気分とか、少し解消出来た気がする。

それにしても、のんびりしてるなぁ。就活始めてから、昼間にこんなにのんびりするの、初めてじゃない？　日差しが暖かくて、ウトウトしてきちゃった。

肩に何か掛けられたのを感じて、ハッと目が覚めた。次いで、隣に誰かが座る気配。

「よう、寝てていいぜ。こんな往来じゃ何もしねぇよ」

あいつの声だ。一緒に缶のプルトップを開ける音が聞こえた。

「冗談でしょ！　ちゃんと起きるわよ！」

慌てて体を起こして、髪を手透きした。

腕が上がった拍子に、肩からスルリと何かがずり落ちる。持ち上げてみて、黒っぽいジャケットと分かった。隣の隆広を見るとシャツ姿だった。

「着てろよ、風が冷たいだろ」

「いいわよ！　あんたの服なんか誰が！」

丸めて突っ返そうとしたら、「着なきゃ後で襲うぞ」と言われた。仕方なく肩に掛ける。頼まれたって袖なんか通すもんか！

口を引き結んで真正面を睨んでいたら、目の前にミルクティのペットボトルが差し出された。キャップがオレンジ色だ。

「飲めよ」

「い、いらないわよ」

散々泣いたから喉は乾いている。でも、こいつから受け取るのがシャクで、突っぱねてしまった。ちょっと後悔。

隆広はあたしとの間のベンチに、ペットボトルを立てて置いた。

「飲みたくなったら飲め」

自分は、ブラックコーヒー無糖のショート缶を傾けている。

しばらく無言で正面を見ていたら、今度はあたしの肩に掛けたジャケットの内ポケットから何かを出した。タバコに火を点ける音がする。ポイ捨てなんかしたら、非難してやる！

そう意気込んでいたのに、こいつはちゃんと携帯灰皿を持っていた。マナーがあるんだかないんだか。あたしにはあんなにデリカシ

ーに欠けることを、平気で言ったりやったりするくせに。股間蹴り上げてきたことも、特に咎めてこない。一体なに考えてるのよ！？
両膝に頬杖をつき、公園を眺めて海を眺めて、海風に吹かれながら溜め息をついた。
「おい、咲弥子」
唐突に名前を呼ばれたから、ゆっくりと頬杖ついたまま、顔を巡らせた。
「なによ？」
「さっきは悪かったな」
「は？」
こいつの口から謝罪の言葉？　嘘でしょ！？
頬杖を崩して、唖然と隆広を見上げた。正面を向いているからあたしからは横顔しか見えない。でも、その目は真剣そのもの。ホテルで見た意地悪な表情や小バカにしたような表情は、片鱗も見えなかった。
「さっきって、あたしの就活を笑ったこと？」
「ああ、お前が怒るのも無理はねぇ。あんな言い方して悪かったな」
今度はあたしをちゃんと見て言った。あたしは思わず目を逸らしてしまった。
「謝るくらいなら、笑わなきゃよかったのよ！」
「確かにそうだな、俺が軽率だった。俺は職業に貴賤はないと思ってる。だから、ラウンジで声を掛けてきたオヤジが、お前のことを貶した時も、それがどうしたとしか思わなかった」
「だったら、どうして部屋に戻ってきて、あんなこと言ったのよ？」
すごいショックだったんだから。恋人になれば就職先を斡旋するなんて、時代劇の悪代官が何とか問屋に「娘を差し出せば商売を続けさせてやる」とか脅してるようなもんよ。
口に出してそう言ってやったら、「俺が悪代官かよ」なんて、ショックを受けたように呟いた。
「それで、なんであんなこと言ったのよ？」

「む？　そりゃお前、俺に対してあんな態度をとる女は、初めてだったからな」
あたしは開いた口が塞がらなかったわよ。
「あんたって……ああ、まぁいいわ」
「よくねぇよ、なんだ？　続きを言え」
「あんたって本当にお坊ちゃんなのね」
溜め息交じりで言ってやったら、鼻で笑われた。
「ふん、言ってくれるぜ。俺にそんな口を利くのは、世界広しと言えども、お前だけだろうな」
「なによ、あんたってそこまで偉いわけ？　どう見てもお坊ちゃんじゃない」
だって、こいつの歳からしたら、もっと偉い親とかお爺さんとかいるじゃない。　３０歳……行ってないよね？
「神をも怖れぬってやつだな。お前、さっき俺の名字を聞いただろ」
「しょうじっての？」
「せっかく名前しか教えなかったのに、あの阿呆が余計なことしやがって」
阿呆？　大企業の社長を「阿呆」呼ばわり！？　やっぱり、こいつは最低だ！
「なによ、しょうじ隆広ってのが、そんなに偉い名前なわけ？」
何も考えずにこいつのフルネームを口にしてみたら、ちょっと引っ掛かるものはあった。
「お前だってニュースくらいは見るだろ」
「なによいきなり」
「いいから答えろよ」
「そりゃ見るけど」
「それで俺の名前を知らないって？　名前くらい見聞きしたことあるだろ」
バカにされた。ムカッ！　なによ、しょうじたかひろでしょ！？
しょうじたかひろしょうじたかひろしょうじ……？

心の中でこいつの名前を連呼していたら、ちょっと閃いた。閃いて……青褪めた。まさか、ねぇ。
「あのさ、もしかしてしょうじの漢字は、東海林と書くとか？　そんでもって、実家はデッカイ企業グループとか？」
恐る恐る訊いてみると、我が意を得たり、という顔をされた。
マジですか！？　東海林グループっつったら、世界でもトップクラスの企業体ですよ！？　テレビを見ていれば、ニュースやＣＭで一度は目にする東海林グループですよ！？
それに東海林隆広っつったら！！
「あの、もしやあなたは、ショウジグループノカイチョウサンデスカ？」
「なんだ、急にカタコトで言いやがって。やっと分かったかよ」
ぎゃー！！　嘘でしょ！？　誰か、お願いだから、これは悪い夢だと言って！！
「俺だって、会長なんかやりたくてやってる訳じゃねぇが」
どうしよう！？　あたし、こいつの股間蹴り上げちゃったよ！？
軽く傷害罪じゃん！？
「まぁ、会長っつっても、今時に言えばグループのＣＥＯとＣＯＯを兼任してるようなもんか」
しかも、その前にこいつとセックスしちゃってるじゃん！！　スキン付けててくれて、よかったけどさ！
「一昨年親父が死んじまって、爺さんはそれですっかり意気消沈するかと思いきや、自分が存命の内に磐石体勢で、後継者を育てようって腹積もりらしい。孫で男の俺にお鉢が回ってきた」
っていうか、なんで東海林グループの会長が、あんなバーで一人で酒飲んでたのよ！？
「ウチは各企業に独立して社長がいるが、グループ全体の組織は実家が仕切って……って、おい、聞いてんのか？」
「うわ、はいはい、聞いてるよ！！　あんた以外に、その孫ってのはいないわけ？」

ビックリした。急に話し掛けないでよ！！　とりあえず話を聞いていた証拠に、咄嗟に耳に残っていたことを訊いてみた。
「後は女ばっかりなんだよ。姉貴が二人と妹が一人。お陰で実家は居づらくて仕方ねぇ」
「それで、毎晩女と遊び歩いてるってわけ？」
「毎晩って訳じゃねぇ。大体、仕事が忙しくて、遊べるのは夜しかねぇんだよ」
だからってそういう立場の人間がさぁ、バーで一人で飲むってどうよ？　護衛みたいな奴、あそこにいたっけ？　思い出せないや。
「でも、やりたくてやってるわけじゃない割りに、やりたい放題やってるんじゃないの？　さっきだって、あのお得意様、結構な大企業の社長さんだよ」
「やりたくてやってるわけじゃねぇから、あの程度は許されるのさ」
なによ、その理屈。あれで「あの程度」なわけ？　呆れるしかないわ。まぁ、あたしには関係ない世界だしね。
「とりあえず、さっき股間を蹴り上げたことは、謝っておくわ。でも、悪いとは思ってないから」
「しょうがねぇな。元はといえば、俺がいらんことを言ったからだ。あの時一瞬花畑が見えたが、とりえあずこうして生きてるしな」
なによ、その引っ掛かる言い方。いやいや、とりあえずさっきのことは謝ったし、もうこいつと一緒にいる意味はないよね。あたしは腰を上げた。肩に掛かっていたこいつのジャケットは、きちんとたたんで返す。
「どこへ行く？」
「決まってるでしょ、家に帰るの。夜はバイトに行かなきゃいけないし、それまではゆっくり休みたいのよ。泣き腫らした顔も、治さなきゃいけないしね」
「就職したくねぇのか？」
口調は真剣だったのに、なんだか足元を見られたような気分になって、ムカついた。

「したいに決まってるでしょ。でも、あんたの世話になんかならないわよ！　じゃあね。二度とさようなら、金輪際さようなら！！」
捨てゼリフのように言い放って一歩踏み出したところで、出鼻をくじかれた。
「クリーニングに出した、あの似合わねぇリクルートスーツはどうする？」
「あんたならあたしの住所くらい、すぐに調べられるんじゃないの？」
「ちっ、本当に可愛くねぇな。だが、やっぱいいぜ、お前」
「は？」
あたしの前に立ちはだかるように、こいつもベンチから立ち上がった。
「ちょっと、なんのつもり？」
「俺が誰か知っても、お前の態度は変わらねぇ。それが気に入ったっつってんだよ」
あたしの腕を掴んで、引きずるように歩き出した。転びそうになるのを、慌てて付いていく。
「やだ、離してよ！」
「断る。俺の女になれってのは変わらねぇが、お前のその気概に免じて、ボランティアしてやるよ」
「は？　なに、どういうこと？」
「来れば分かる」
飲まなかったミルクティは、しっかり鞄の中に突っ込まれて、来た道を引き返すことになった。

6

ホテルの駐車場まで戻ってくると、メタリックブルーの車高が低い何やらスンゴイ車の前で止まった。ボンネットにエンブレムがついてて、雄々しい牛のマークよ。Ｌａｍｂｏｒｇｈｉｎｉ……ランボルギーニ？

「これ、あんたの車？」

「ああ、ここにはこれしか置いてねぇんだ」

まさか、昨夜酒飲み運転したなんてことは……

「言ったろ、ここに置いてあるって。昨夜ここに来た時は、秘書の車で送らせたんだ」

「あ、そう、いうこと……って、ちょっと！　あたし昨夜車の中で、あんたに抱けって言ったって」

「ああ、あいつも聞いてたぜ」

ぎゃー！！　嘘でしょ！？　願わくば、その秘書とは一生会いたくないわ！　ってか、このままさよならしちゃえば、会う事もないわよね。

「やっぱりいい、あたし帰る！」

回れ右をしたら、肩を掴まれた。

「このまま就職出来なくていいのか？」

「だって、もしかしたら、この先決まってくれるかもしれないじゃない」

「これから俺と一緒にくれば、確実なんだぜ？」

「だって……」

まさかこれが、就活の神様の思し召しなの！？　いやだぁぁ！！

「来いよ、お前にチョーやりがいのある仕事をくれてやる」

それはそれで怖い。でも、背に腹は変えられない、か。

「行くわよ、行ってやるわよ。それでいいでしょ！！」

「ふん、でなきゃ、面白くねぇよ」

ニヤッと笑ったこいつの顔を見て、やっぱり帰ればよかったと後悔した。

平日のお昼時だっていうのに、湾岸道路は結構混んでる。ベイブリッジを渡るって、初めての経験だわ。

左の運転席に座っている隆広は、シフトとハンドルを操って運転している。今時マニュアル車なんて、乗っているのか。まぁ、確かにシフトを操る姿は、カッコイイけどさ。こいつの場合、見てくれはよくても中身がねぇ。

「一つ聞きたい」

「なによ？」

「ホステスの方が、普通のＯＬよりよっぽど稼げるだろう。それなのに、お前はなんで就職にこだわるんだ？」

う……やっぱり、訊かれたか。あたしのバイトを知ってる大学の友達にも、同じ様なことを訊かれた。

「それはよく言われるよ。バイト先のママからも、このまま続けてほしいって言われてる。でも、あたしはちゃんと会社に入って、人に堂々と言える職業に就きたい」

「ホステスは、人に言えねぇのか？」

「……」

言葉に詰まった。それを言ってしまったら、身も蓋もないじゃない。ママや一緒に働く人たちに悪いよ。

「あたしは、昼間にちゃんと働く職業に就きたいのよ。ホステスとしてあたしを雇ってくれた、ママや社長さんには感謝してるけど、このまま夜のバイトを仕事としてやっていくのは嫌だ」

ごめんなさい、ママ。うつむいて目を閉じて、心の中のママの顔に謝罪した。

「まぁ、お前の人生だからな。お前のしたいようにすればいいさ」
なによ、自分から振っておいて、その言い方！　……ってこれは、あたしの八つ当たりね。話題を変えよう。
「ねぇ、さっきあんた」
「そのあんたってのやめろ。これから行くところで人に聞かれたら、困るのはお前だぞ」
むう……まぁ話の流れからしたら、こいつご推薦の企業ってことよね。じゃあ仕方ないか。それに、天下の東海林隆広を「あんた」なんて呼ぶ人間、こいつの周りにはいないでしょ。
「だったら、あたしもお前と呼ぶのはやめてよ」
「ふん、分かった。咲弥子」
う……こうやって急に呼べるところが、こいつのデリカシーのなさを露呈しているのよ！　くそ、負けるもんか！！
「隆広、さっき抜け出せるのは夜しかないって言ってたけど、今日は仕事はいいわけ？」
「オフだ。さっきラウンジで、あのオヤジにそう言ったろ。基本的に日曜日は一日オフだが、他に月に1日か2日休みを取ってる。でないと、やってられねぇよ」
ふうん、忙しいってのは本当みたいね。ＣＥＯとＣＯＯの兼任なんて、どんな仕事をしてるのか、見当もつかないけど。
それから３０分くらい走って、すんごいビルの地下駐車場に入っていった。どのくらいすんごいかと言えば、六本木ヒルズの森タワーくらい。そこの地下駐車場に入る時、「海東物産」という社名が見えた。
マジですか！？　海東物産と言ったら、超一流企業ですよ！？　日本でトップクラスの大企業ですよ！？　まさかこいつが斡旋するって会社、ここかい！！
唖然としている間に、隆広は駐車場に車を停めて、降りていった。慌てて追い掛けようとシートベルトを外したところで、助手席のドアが勝手に開いた。

「へ？」
「なにしてる、早く降りろよ」
「え？　ドア、開けてくれたの？」
「当然だろ。ほら、手を出せ」
当たり前のように左手が差し出された。それがまた様になっているのがムカつく。自然にこれが出来るってこと自体、女馴れしてる証拠よね。
乗る時もそうだったけど、車高が低くて乗り降りがしにくい。こりゃエスコートがないと、逆に不便だわ。まさかこういう車って、男が女をエスコートするために、こんなに車高が低かったりするの？　そんなわけないよね。
隆広の後ろについて、エレベーターのあるところまで来た。
何度か逃げようかと思ったけど、どうせすぐに捕まるだろうし、就職先を決めたいという思いはあったから、大人しくついて行くことにした。
まさかそれが海東物産とはね。でもここって東海林グループの中核企業だから、逆に言えば当然のことなのかも。
エレベーターは全部で5台。4台は一角に揃ってあるのに、わざわざ離れた1台の前で上行きのボタンを押したよ。なに？　会長専用エレベーターでもあるわけ？
扉が開いて乗り込むと、階数ボタンは2つだけだった。41階と42階。なに、このエレベーター？　マジマジと見ていたら、上から解説が聞こえた。
「社長室と会長室に直通で行くエレベーターなんだよ。あんま人に見られたくねぇ来客とか、俺らが使う」
「ふうん。うん？　ってことは、あんた……隆広の仕事場もここ？」
「ああ。俺は休みだが、秘書の連中は上で仕事してるぜ」
軽い浮遊感が体を包んだ。凄い早さで階数表示が上がっていく。
東海林グループ会長の秘書かぁ……バリバリのキャリアウーマンとか？　でもこいつだと手が早そうだな。

「言っとくが、野郎ばっかりだぞ」
「何にも言ってないじゃない！　でも男ばっかりって意外」
「ふん、直人は女ばっかり揃えてるがな」
「直人？」
「ここの社長だ」
なんて会話をしている間に、エレベーターが止まって、扉が開いた。
普通に廊下が奥まで続いてるだけの空間だった。床はフカフカの絨毯が敷いてあるけど、ちょっと殺風景だ。隆広の後ろについて歩いていると、ちょっとした広間のような場所に出た。
例のエレベーターの扉が４台ある。その前にカウンターがあって、受付嬢らしき女性が二人、席に着いていた。
隆広が軽く手を挙げると、二人は立ち上がって綺麗なお辞儀をする。ううむ、隙のないお辞儀だわ。こういうとこまで、社員教育が徹底されてるってこと？　隆広だけでなく、あたしにも頭を下げられちゃった。仰天しながらも、失礼がないように会釈して返した。
「直人はいるか？」
「はい、只今は社長室にて休憩されています。お知らせしましょうか？」
「いや、いい。咲弥子」
うぉ！　なんでわざわざこっち見るのよ！？　受付嬢が変な目で見てんじゃん！
「なによ！」
「お前な、こんな時くらい愛想よくしろよ」
「余計なお世話！　なによ？」
訝んでいると、腕を引っ張られてよろめいた。転びそうになるのを、こいつの腕が抱き止めて、囁く声で耳打ちされた。
「面白ぇもん、見せてやるよ」
「は？　うわっ」
再び引きずられるように歩かされた。受付嬢が顔を寄せ合ってヒ

ソヒソやってるよ。彼女たちからの角度なら、多分キスしてるように見えたはず。くそぉ、紛らわしいことするな！

引っ張られて行った場所は、社長室の札がつけられた、重厚な扉の前。途中、秘書室の札がある扉の前を通っていた。

その社長室の扉を、こいつはノックもせずにいきなり開けた。やっぱり常識がない奴だ！

第一印象、広い部屋。高級そうなソファーセットが、ど真ん中に置いてある。それでも邪魔くさくないのは、部屋の方が遥かに大きいから。さっきのホテルのリビングより、一回りは広いんじゃない？

壁の上の方に、三人のおっちゃんの写真が飾られている。歴代社長だってさ。一人、明らかに若いのが端っこに飾られていた。こいつと同じくらいイケメン、つうか美形だ。浮かべている微笑みは、こいつより数段上品に見える。

反対側の壁には、これまた重厚な本棚。ちゃんとスライド式のガラス戸がはまってるよ。ざっと見たところ、分厚い本がぎっちり埋まっていた。これで頭殴ったら、軽く人を殺せるかも。

「おい、直人。相変わらずだな」

隆広の呆れた声が前から聞こえた。背中越しに覗き込むと、とんでもない光景が飛び込んできた。

ご立派なデスクの向こうにある、革張りの椅子に座った美形と、その前で不自然な姿勢の女性がキスをしていた。

うわぁ、なにやってんの！？　この二人！！

女性の不自然な姿勢は、美形の膝の上に座っているからだった。うぅわぁ、他人のキスシーンなんて初めて見た。それでもあんまりやらしく感じないのは、美形の綺麗過ぎる顔のせいかね？　さっきこいつが言ってた「面白ぇもん」ってこれか。

「おい、直人！」

こいつの苛立つ声に、ようやく美形が顔を離した。こっちを向いて、やたらと愛想のいい笑みを浮かべる。普通はもっと、慌てたりするもんじゃないの？

「隆広、上司といえどもノックは常識ですよ」
「ふん、黙って開けられてヤバいことをしてる方が悪いだろ」
うわ、こいつがまともなこと言ってるよ！
「今は休憩中ですから、何をしようと勝手でしょう」
しれっと、何をぬかすんだ！？　この美形は！！
「まぁな、致命的な失態でもやらかさなきゃ、別にいいさ」
こいつも何を言い出すんだ！？　こいつら、揃いも揃って類友だ！！
美形の顔は、壁に飾ってある写真の端っこのと同じ。で、こいつは直人って呼んでた。ってことは、これが社長！？　なんて女にはデンジャラスな会社なのさ！？
「おい、お前らが休憩中になにをしようと勝手だがな、こっちは連れがいるんだ」
隆広が左手の親指を立てて、あたしを指差した。
ギョッとしたよ！　二人共、あたしの方を見るんだもん。
詩織と呼ばれた女性は、さすがに気まずそうに頬を赤らめているけど、社長さんはニッコリ微笑んだ。
詩織さんがいそいそと、社長さんの膝の上から降りた。頬がポウッと赤く染まっていて、目が潤んでるのが見て取れる。女のあたしが見ても、ドキッとするくらい色っぽかった。
あたしもまさか、キスとかの後はああいう顔をしてるのかいな！？　つまり、ああいう顔を、こいつに見られていたってことかい！！　いぃやぁだぁ！！
本気で頭を抱えていたら、振り向いた隆広と目が合った。
「ぎゃあ！」
「うお！？　なんだ、ビックリすんじゃねぇか」
「な、な、なんでもないない！！」
うおおぅ、今すぐここから逃げ出したい！！　でも、そんなことしたら、こいつに付け込む隙を与えちゃう。
くそぉ、つくづく思うよ。なんで昨日はあのバーに行っちゃった

のさ！　全然行ったことない所だったのに！　そうすれば、こいつと出会うこともなかったのにぃ！！
　涙が乾いて目が痛いのに、また泣きそうになってきた。これ以上泣いたら、本当に今日はバイトに行けなくなるよ。それにこの状況じゃ、とても泣けない。
　グッと泣くのを我慢していると、前方からおかしそうに笑う声が聞こえた。社長さんが紫檀のデスクに頬杖ついて、肩を揺らしている。
　詩織さんはそのとなりで立っていて、乱れたスーツを整えていた。それから社長さんに向かって、きりっとした表情で言った。
「それでは社長、私はこれで。隆広会長、１３時から社長は会議が入っておりますので、時間厳守でお願いします。ただいまコーヒーをお持ちしますので」
「ああ、分かった。こいつにはミルクティを頼む」
「承知しました」
　え！？　あたし別にコーヒーでもいいんだけど？
　え、と小さく声が出た瞬間、隆広に睨まれて口を噤んだ。なによ、余計な仕事をさせないようにって思ったのに。
　詩織さんは、何事もなかったかのように、右手のドアから出て行った。
「まったく、あなた方のせいで、貴重な休憩時間に最後まで出来ませんでした」
　本当に残念そうに言うんだもん。耳を疑っちゃったよ。最後までってセックスのことだよね？　まさか、その１３時の会議の時間まで楽しもうって思ってたの？　あと３０分しかないのに、凄いなぁ。
　少ししてドアをノックする音が聞こえた。詩織さんがトレーにコーヒーを２つと、紅茶を１つ、持ってきてくれた。ソファーセットのテーブルに置いて、再び同じドアから退出していった。お手間を掛けさせちゃって、すみません。全てはこいつのせいです。
　チラッと隆広を見上げると、ちょっと難しい顔をしていて、予想

外の表情に驚いた。何つうかさ、仕事してる男の顔って感じ？　いつもこういう表情をしてればいいのに。
「会議ってな、例のアレか？」
「ええ、あなたにこの仕事を仰せつかった時から、避けては通れないものですからね。幸い、私に味方してくれる人間も多いので、比較的やりやすいですよ」
「ま、そうでなきゃ、ここにお前を配置した意味がねぇよ。俺がお前にあんま肩入れしても、バランス悪くなっちまうからな」
「その辺は期待していませんよ。あなたはあなたのやるべきことを、やればいいんです」
　社長さんはそう言って笑いながら、腰を上げた。隆広なんかより、よっぽど上品な仕草だよ。こいつ、本当に東海林グループの会長かね？
「ところで、そちらの女性はあなたの新しい恋人ですか？」
　は！？　今、なんとおっしゃいました？　あたしがこいつの恋人！？
「ばっ」
　言い掛けたところで、こいつの手が口を塞いできて、社長さんの誤解を解けなくなった。なに考えてんだ、こいつ！？
　社長さんは、ちょっと目を丸くしてから、首を傾げた。
「これまであなたが付き合ってきた女性とは、随分タイプが違うようですが？」
「そうじゃねぇよ。誰がこんなじゃじゃ馬！」
　じゃじゃ馬で悪かったわね！！　相手があんたじゃなかったら、もっとおしとやかに出来るわい！！
「どのような女性と付き合おうと、あなたの勝手ですが、あまりとっかえひっかえしていると、お祖父様が煩いでしょう」
「ふん、爺さんは何も言わねぇよ。煩いのは、周りの連中さ」
「まぁ、どうぞ。お掛け下さい」
　そう言って、ソファーに座るよう促された。

7

あたしと隆広が並んで座って、社長さんと向かい合う格好になった。すんごい座り心地のいいソファーだよ。お金掛けてるなぁ。
「それで、一体なんの用です？　アポなしなんて、あなたにしては珍しい」
へぇ、普段はちゃんとアポ取るんだ。意外！
「社長秘書の内定者に、この前、辞退した奴がいただろ」
「ええ。……まさか、そちらの女性を？」
「ああ」
「ええ！？」
ちょっと、いきなりその展開はなによ！？
あたしの大声に、隆広は顔をしかめた。
「なんだよ？」
「なんだよ？　じゃないわよ！　あたしそんなこと聞いてない！！
社長秘書ってどういうこと！？」
「だから、今言っただろうが。こいつの秘書を蹴った女がいるって」
「だからって、なんであたし！？」
「神をも恐れぬ言動が出来るからだ」
なに真顔でしれっと言ってんのよ！？　美形社長が唖然としてるじゃないの。あ、そうよ！！
「大体、こんな手の早い社長なんて、デンジャラスな会社はご免よ！！」
ホントに、休憩中に秘書とあんなことする社長なんて、貞操の危機じゃないの！　まぁ、あたしはもうとっくにヴァージンとはおさらばしてるけど。
不躾なのは承知で社長を指差して訴えたら、隆広は一瞬ポカンとしてから、腹を抱えて笑いだした。
「はははははっ！　聞いたかよ、直人。少しは反省しろよ」

「ちょっと、なにがおかしいのよ！？」
こんなに笑われるなんて恥ずかしいじゃない！！　またこいつの股間を蹴り上げたくなった。肩をイカらせて腹立たしいのを我慢していたら、前方からこれ見よがしな溜め息が聞こえた。
「詩織は恋人です。いくらなんでも、部下に手を出すようなマネはしませんよ」
「こ、恋人！？」
拍子抜けするような言葉だった。思わず、マジマジと社長を見ちゃった。社長はニッコリ笑って言った。
「ええ、私が社長になる前から付き合っていますよ。この仕事に就くことになった時、彼女にサポートを頼んだんです」
「で、でも、だからって会社ですよ！？　あんなことしていいんですか！？」
「休憩時間くらいああいうことしていないと、こんな大企業の社長なんて、やっていられませんよ」
なんなのよ、その理屈。やっぱり隆広と同類の人間だわ！
あたしが心中で文句を言ってる間に、社長は隆広に向けてまともなことを話し始めた。
「それで隆広、こうして連れてくるからには、彼女は内定を辞退した彼女と同等か、それ以上の人材なのでしょうね？」
「んなこと知るか。ただ咲弥子は、俺が東海林グループの会長と知ってもこんな態度だし、その上、俺の大事な股間を蹴り上げてくれた勇者だからな」
ぎゃっ！　なんてこと言うのよ！？　それについては謝ったじゃないの！！
「それはそれは、中々興味深い事実ですね。一体なにをしたんです？」
うっ、それはさすがに言われたくない！！
すると、隆広もそれは同じだったのか、そっぽを向いて言葉を濁していた。ホッとしていると、隆広があたしに向かって手の平を見

せてきた。
「なによ？」
「履歴書、予備くらい持ってんだろ」
「なに、鞄の中見たの！？」
「んなわけあるか。リクルートスーツ着てバーにやって来たんだ、面接帰りか何かだったんだろ。出せよ」
くそぉ、何でもお見通しって訳！？　いちいちムカつく！
あたしは鞄から、白い封筒に入った履歴書を出して、直接社長の前に置いた。
「ちっ、ホント可愛くねぇぜ」
ふん、煩いわよ！　大体、あたしの住所とか書いてるあるのに、こいつに易々と個人情報を見せてなるものか！　どうせ調べられれば分かっちゃうけどさ。
社長は「拝見しますよ」と言って、封をしてないそこから、折り畳んだ履歴書を取り出した。スラスラ読み進んでいた目が、あるところで止まった。
「ほう、秘書検定二級を持っているのですか。他に簿記検定二級と英検二級、これだけ持っていれば、どこでも引く手あまたでしたでしょう」
そんな感心したように言われたの初めてだよ。なんか照れるな。
「それで今時分になっても就活してるって、どういうことだよ？」
どっちに訊いてるのか分からなくて、あたしは黙っていた。あたしの方が知りたいくらいだよ。
「私に訊かないで下さい。まぁ飛び抜けて優秀という訳ではないようですから、同じ様な能力の人間と比べた時に、劣るような何かがあったのでしょう」
さすがに分析が早いなぁ。就職で他人と競争なんて、考えもしなかった。
「おや、自活しているのですか？」
「あ、はい。学費も生活費もバイトで稼いでいます」

「今更敬語で話すのかよ」
煩いわね！　色んなものスッ飛ばしてるけど、これってつまり社長面接じゃないの！　緊張だってするし、あんたと違うんだから、タメ口なんか利けるわけないじゃない！
隣に座る隆広に文句を言いたい衝動に駆られて、何とか思い止まった。
それよりあたしのバイトが何か、こいつがバラさないかとちょっと不安になった。でも、結局口は挟まれずに、社長は「なかなか根性がありますね」なんて、呟いている。ホッとしたけど、逆にこいつが何を考えているのか分からなくて、戦々恐々だよ。
「で、どうなんだ？」
「履歴書を読む限りでは、申し分ないですが」
「じゃあ、決まりだな」
なんでそんなに嬉しそうなのよ？　こいつの息の掛かったところで仕事って、なんか嫌だな。
「その前に」
社長さんの目があたしに止まって、しばらく見つめられた。なんでこんなことするの？　なんかドキドキしてきちゃうじゃん。
「泣き腫らした目をしていますね。どうしたのですか？」
う……そんなことを訊くわけ？　言える訳ないじゃないの！！
努めて笑顔で返したけど、頬が引きつるのを感じた。いつもバイト先でやってる営業スマイルを出せばいいのに、上手く表情が動いてくれない。
あれだけ泣いてスッキリしたと思ってたのに、また涙が出そうになる。こいつの言葉に、結構傷付いてたんだ、あたし。懸命に涙を堪えていたのに、瞬きした拍子にポロッと零れてしまった。引き結んだ口がわなわな震えて、零れた涙を指で拭った。努めて笑顔でいようとすればするほど、泣きたくなる。
嗚咽が漏れそうになって、慌ててうつむいた。スカートを掴む手の甲に、大粒の水滴が落ちる。

ポスンと、大きな手が後頭部を包み込むように撫でられた。
こいつの手がこんなに温かく感じるなんて！　くそ、泣き止め、あたし！！　そう自分に言い聞かせていたのに、予想外の優しい声に気持ちが崩れそうになった。
「俺が泣かしたんだ。股間蹴り上げられたのも、自業自得さ」
「あなたが失言を？　また珍しいこと尽くめですね」
結構親しげな社長さんも驚くほど、いつものこいつはまともなわけ？　じゃあ、なんであたしにはあんなに意地悪なのさ！
何とか涙を引っ込めて、鼻を啜りながら顔を上げると、社長さんがあたしの履歴書を封筒に戻していた。
「大変魅力的な資格をお持ちですが、私が雇うこともないんじゃないですか？」
「どういう意味だ？」
「男ばかりで周りを固めず、女性の秘書を雇って、少しは周囲を安心させてやりなさいと言っているんです。プライベートな関係以外の女性を近くに置くのは、そう悪いことじゃないですよ」
「ちっ、余計なお世話だ」
なにそれ？　つまりあたしにこいつの秘書をやれって？　どうしてそうなるのよ！？
「そんなに睨まないで下さい。あなたにとっても、悪い話ではないと思いますよ。何しろ、東海林グループ会長の秘書ですからね」
穏やかに苦笑されて、慌てて眉間を触りながら隣を見ると、隆広はとっても不本意そうな顔をしていた。ほら、こいつだってこんなに嫌がってるじゃない。
「私は隆広、あなたにとっても、このような女性が傍にいるのは、いいことだと思いますよ。少なくとも、彼女はあなたに媚びませんからね」
「でもよぉ、こいつに俺の秘書が務まるかぁ？」
そんないかにもダメそうに言われると、なんかムカつく。危うく売り言葉に買い言葉で、やってやろうじゃないの！　って言いそう

になった。それこそ墓穴掘りってやつよね。
貝になって様子を見ていると、二人とも黙ったままで睨み合っている。どうなっちゃうんだろ？
あたしは、こいつの秘書なんかやりたくない。絶対こき使われるに決まっているし、東海林グループ会長の秘書なんて、そもそもあたしに務まるわけがなかった。
社長さんの秘書だってそうだよ。こんな大一流企業の社長秘書なんて、恐れ多くてとても出来ない。あ～あ、就活の神様は、あたしには微笑んでくれないみたい。うんにゃ、そもそもこれ自体、就活の神様の思し召しと決まったわけでもないんだし。
そんな風に考えていたら、少し気分が晴れてきた。
社長さんがテーブルに置いた履歴書の封筒を鞄に入れて、あたしは席を立った。
「咲弥子？」
隆広の怪訝な声を無視して、社長さんに頭を下げた。
「今日は、貴重な休憩時間にお邪魔してしまって、すみませんでした。あたしはこれで帰ります」
「隆広の秘書の件、考えておいて下さい」
優しそうな微笑をしていても、社長さんの目は真剣そのものだった。あたしは、曖昧に笑ってもう一度頭を下げて、一人で社長室を出た。
「おい、待てよ。咲弥子！」
後ろから追ってくる隆広の声を無視して、来る時に乗ってきたエレベーターのボタンを押した。すぐに開く扉。あいつが走ってくるのを見て、急いで閉ボタンを押す。絶対に間に合わないと思ったのに、閉じる寸前で腕と足を割り込ませて、強引に乗ってきた。
「お前、どういうつもりだ？」
「もういいでしょ！　あたしはこんなところで働く気なんかないの！　あんたの秘書だってごめんよ！」
「お前、本気で就職する気あるのか！？」

隆広が声を荒げたから、驚いて体が固まっちゃった。就職する気はあるけど、それはもっと分相応なところで……。言おうとして止めた。なんか、自分でも後ろ向きな考えだと思ったから。
「あたしの勝手でしょ！　諦めないで、地道に就活していくわよ！」
エレベーターが地階に止まった。ドアが開くと同時に、さっさと降りて出口に向かって歩く。
こんなことになって、こいつの車で送ってもらうのは嫌だった。そう思っていたのに、腕を掴まれて違う方向に引っ張られた。
「どこに行く？　車はこっちだ」
「ちょっと！　あたし、電車で帰るわよ！」
「連れてきたのは俺だ。帰すのも俺の役目だろうが」
「でも、あっ！」
あのメタリックブルーの車体に背中を押し付けられた。両脇を隆広の腕に挟まれて、逃げ場がなくなる。顔を上げると、覗き込んでくるこいつと目が合った。その表情は、意外に真面目だった。
「まさか、直人がお前を蹴るとはな。こんなことになるとは思わなかった。悪かったな」
「え！？　あ、や、別に……あんたが謝ることじゃないでしょ」
ビックリした。こんなに素直に謝ってくるとは、思ってもいなかった。やっぱり、変なところで紳士だ。
面と向かっては見られなくて、視線を逸らしていたら、顔がだんだん近付いてきた。慌てて隆広の胸を押さえる。
「ちょっと、なにすんのよ」
「キスしたくなった」
「はあ！？　なに言ってんの？」
そんな恥ずかしいこと、よく口に出来るもんだわ。
「あいつらの見せ付けられたしな。お前……咲弥子も、興奮してたろ？」
う……否定したいけど、あの二人を見ていて妙にテンション上がってたのは、確かだから。まさか、見られていたの！？　当てずっ

ぽうだよね！？
　ぐるぐる考えていたら、顔が陰ってきた。しまったと思った時には、隆広の唇が至近距離に迫っていた。
「俺は、お前とやりたいと思った」
「そっん」
　軽く唇が触れて、すぐに深いキスになった。たっぷり2～3分は舌を絡め合っていたと思う。こいつ、やっぱり上手い。
　ディープキスなんて、今まで付き合ってきた男たちと何度も経験してきているのに、こんなに欲情させられるのは初めてだ。解放された時には、足がガクガクになっていた。こんな風にされるなんて、やっぱりちょっと悔しい。

8

散々いじられて、足の先から頭の天辺まで快感が突き抜けて行った。車の中なのに、悲鳴のような嬌声を上げちゃったよ。周りは大丈夫だったのかね。

っていうか、自分からキスして弄んで煽っておいて、最後までしないってどういうこと！？　まるであたしが淫乱みたいじゃないの！

くやしくて、情けなくて、涙が出てきた。就職したいのに釣られて、のこのこついて行って、その結果がこれなんだから。なんであたし、こんな奴と一緒にいるわけ？

倒れていたシートを戻して、運転している隆広の横顔を見た。散々あたしを泣かせて弄んだくせに、機嫌悪そうな顔をしている。失礼しちゃうわ！！

窓の外を見ると、遠くの方にベイブリッジが見えた。え！？　なに？　まさかホテルに舞い戻ってるの！？

「ちょっと、どこに行くのよ！？」

「ホテルに戻る。『椿』に出勤するにも、準備ってのが必要だろう」

「そんなものいらない！！　あたしのアパートに行って！！」

「場所を教える気はあるのか？」

うっ……教える気なんかない。近くまで送らせて、そこから歩こうと思っていた。全部、見透かされているんだ。くそぉ、ムカつくムカつくムカつく！！

心の中で何十回とこいつを罵倒している内に、ホテルの地下駐車場に着いてしまった。

車が停車したところで、さっさと降りて出口に向かう。追い付かれない様にと思って走ったのに、男の足に勝てるはずもなく、途中で掴まった。

「やだ！　離してよ！！　こんなところに用なんかないんだから！！」

「あと数時間で泣き腫らした顔を治せるのか！？　いいから、黙って大人しく来い！」
「いぃやぁだあぁぁ！！」
両腕を掴まれながら頑として歩かないでいると、力一杯引っ張られた。どんなに腰を落としても、引っ張られる度に数歩歩かされる。
さっきとは違って、ホテルのお客らしきセレブっぽい人たちが何人かいて、当たり前だけどこっちに注目していた。もうこうなったら人目に付こうが騒がれようが、反抗するしかない。どうせ、噂が立つのはこいつの方なんだから。
「やだやだやだ！　変態！　人攫い！　アホ！　バカ！　オタンコナス！　わぁ！！」
思いつく限りの悪口を言っていたら、突然体が浮いて、肩に担がれていた。
「煩ぇ、大人しくしてろ！　ったく、もう少しボキャブラリーを増やせよ」
「あんたに関係ないでしょ！　降ろしてよ！！」
くそぉ、荷物みたいに担がれて、恥ずかしいったらありゃしない。
「あんまり暴れるな。スカートん中が見えてるぞ」
その言葉に、ハッとして足をバタつかせるのを止めた。その間に、さっさとエレベーターに乗り込まれた。くそぉ。
口惜しがっている間に、泊まっていた部屋に連れて行かれて、ベッドに転がされた。上質なスプリングに体が跳ね返って、柔らかい布団にポスンと受け止められる。咄嗟に枕を掴んで投げ付けたら、それは顔に当たる寸前で受け止められた。
「なんなのよ！　昨夜の報復なら、もう十分でしょ！！　勝手に盛って、煽ってもてあそんで、さぞかし楽しかったでしょ！！　最低野郎！！　出てけぇっ！！」
怒鳴りながら、涙が溢れてきた。こいつの前でなんか、もう泣かないと思っていたのに。くやしい、情けない、恥ずかしい、色んな感情が心の中で渦巻いて、もう一つあった枕でベッドを叩きまくっ

た。
　みっともなく号泣して、気が付くと枕の中に入っていたらしい白い羽が、ベッドの上に散乱していた。右手には、ボロボロの布切れに変貌した枕の残骸。
　泣き過ぎて目が痛い。さっきよりも、もっと瞼が腫れてるよ。もう今日はバイトに行けないかも。そう考えたら、また涙がこぼれてきた。
　あたし、なにしてんだろう。面接帰りにバーに入って泥酔して、あんな最低野郎に振り回されて、子供みたいに泣きまくって、気に入らないからって就職のチャンスも潰しちゃった。
　バカだ、あたし。
「う……くっ……えっ」
「ったく、少しは落ち着いたかと思えば、また泣くのか。いい加減にしろよ」
　ハッと顔を上げると、壁に寄り掛かって腕を組んでいる隆広がいた。さっきとは違うストライプのシャツを着て、下はノリの利いた黒っぽいスラックスをはいている。髪が濡れているから、お風呂にでも入ったのか。あたしが泣いてる間に、なんて奴だ。
「なによぉ、元はといえば、あんたのせいじゃない」
「俺の？　バカ言うな。昨夜のバーでは俺が一人で飲んでるところに、お前が絡んで来たんだ。止めるのも聞かずに、記憶を失くすまで飲んだのはお前だろう。泥酔して俺を誘ったのもお前だ。直人の秘書の件は、採用されると踏んだのは俺の勇み足だったが、ついて来ることを選んだのはお前、咲弥子だぞ」
「……」
　全部こいつの言う通りで、文句一つ言えなかった。唇を噛んで、睨み付けるしか出来ない。更に追い討ちを掛ける様に、呆れた口調で付け加えられた。
「さっきのことを言ってんなら、セックス出来なかった原因はお前にある」

「なんでよ？」
「忘れたのか？　お前が俺の股間を蹴り上げたんだぞ。お陰で、今日明日はまともにセックスは出来ねぇな」
「え……　そんなに？」
　すっかり忘れていました。っていうか、そんなにおおごとになっているなんて、思いもしなかった。アソコって男にとっては、本当に急所なんだ。
「しょうがねぇから、お前を泣かせることにしたが、それがなかったら俺だってお前に突っ込んで、愉しみたかったさ」
「つっこ……！　だから、言葉を選びなさいよ！！」
　言ってることは尤もなのに、なんでいちいちデリカシーに欠けているのよ！？　せっかく、悪いと思っていたのに。でも、それだから車の中でした時、あんなに苦しそうな顔をしていたのか。色っぽいなんて思っちゃったよ！
「ふん、まぁいい。お前の言う通り、突っ込めなくなったのは、俺が就職をダシにしたのが悪かったんだからな」
「あの……ごめんなさい」
　全部、こいつの言う通りだけど、一時的とはいえセックス出来なくなったのは、あたしの責任よね。それは悪いと思ってペコッと頭を下げたら、溜め息をつかれた。
「そうやって、いつも素直になってろよ。その方が数倍可愛く見えるぜ。『椿』には何時に出るんだ？」
　急に話題が変わったから、ちょっと答えるのに時間が掛かった。
「６時３０分にお店に着けば大丈夫だけど……」
「あと３時間半てとこか。そのままでいいから、９階に行ってこい」
「え？　なんで？」
「行きゃ分かる。俺の名前を出せよ。でなきゃ、時間に間に合わねぇぞ」
　よく分からないけど、とりあえず行ってみることにした。手ぶらでいいって言われたけど、なんなのよ？

エレベーターで9階に降りてみると、明らかに客室とは違う解放感溢れるフロアが広がってた。……といって、ラウンジでもない。床がフカフカの絨毯なのは、上層階の高い客室フロアと変わらないけど。

壁にある指示板に従って歩いていくと、お洒落なカウンターがあった。

「え！？　エステサロン！？」

つい声を上げちゃって、カウンターにいた女性がこっちを見た。ホテルのコンシェルジュとは、服装が違う。巷のエステサロンで見掛ける、淡いピンクのワンピースを着ていた。

え、どういうこと！？　遅刻せずにお店に行くには、どんなに遅くてもここを30分前に出ないといけないでしょ。準備の時間も考えたら、あと2時間しかないのにエステしてこいってこと？　あいつ、エステがどんなものか分かっているわけ！？

あたしがその場に突っ立っていると、カウンターにいた女性がわざわざこっちにやってきた。

「いらっしゃいませ、お客様。ご予約はされていらっしゃいますでしょうか？」

接客のお手本みたいな笑顔だわ。さすがに、教育されてるね。そういや、あいつの名前を言えって言ってたっけ。信じるしかないか。

「東海林隆広に言われて来たんですけど」

「はい、承っております！　どうぞこちらへ！」

あいつの名前を口にした途端、女性の表情と姿勢が変わった。別にさっきも悪かなかったのに、急にピッと背筋が伸びて、緊張した面持ちになったよ。あいつがオーナーだからなのか、東海林グループの会長だからなのか、どっちにしても名前だけでこうなるってのは凄いな。中身はともかくとして。

急かされるように、カウンターの奥にある入口を通されて、あれよという間に、ガウンに着替えさせられた。寝心地のいいエステ用のベッドに寝かされて、すごい美人のおばさんがあたしの隣で深々

と頭を下げる。
「オーナーからお話は伺っております。手短に、かつ丁寧にさせて頂きますね」
「はあ、あの、よろしく」
言うが早いか、腫れて痛かった目蓋に冷たい布が当てられた。
あ、そっか。エステっつっても、この目の腫れを治すために予約入れてくれたのか。デリカシーがないくせに、こういうところは気が利くんだな。変な奴！

それからキッチリ９０分間、蒸気エステとか顔をマッサージされた。普通なら一晩は掛かりそうな泣き腫らした目蓋が、ものの見事に治ってるよ。さすがにプロだね。
来たときの服に着替えて、鏡の前に立つあたしに、担当してくれた美人おばさんがやってきた。
「如何でございましょうか？」
「はい、ありがとうございます。綺麗にしてもらって、助かりました」
「それはよろしゅうございました。どうぞ東海林様によろしくお伝え下さい」
それはごくごく普通の挨拶であるはずなのに、あたしに向かって頭を下げたその美人おばさんの目に一瞬、ほんの一瞬の間、媚びるような色が見えてしまった。この人はあたしじゃなく、あたしを通して、その後ろにいる隆広に向かって挨拶していたのか。
あたしは全然そういうつもりはなくても、向こうはそういう風に見るわけだ。あたしのこと、変な風に誤解してなきゃいいんだけど……。
部屋に戻ると、何だか美味しい匂いが漂っていた。

リビングのソファーに隆広がふんぞり返っていて、プラズマテレビが付いている。何見てんだろ？　あたしの位置からは、光の加減で見えなかった。スピーカーから聞こえてくるのは、英語だ。
「よお、戻ったな。ふん、やっぱりその道のプロってな、違うな」
「あ、うん。その、予約してくれてありがとう」
それより、あたしは漂ってくる匂いの方が気になった。お腹が鳴っちゃって、お昼御飯を食べていなかったことを思い出した。テーブルの上に、見たことのある赤と白の箱と、ウーロン茶のペットボトルが置いてある。
「あ、ケンタッキー！」
「ああ、昼飯食ってなかったろ。腹減ったから、買ってきた」
「え、あんたが？」
「なんだ、悪いか？　車で行きゃ、往復でも３０分は掛からねぇぜ」
「そうじゃなくて！」
ケンタッキーって、要するにファストフードじゃない。東海林グループの会長が食べるもんじゃないと思うよ。それに、こいつがわざわざ自分で買いに行くなんて、お店は大騒ぎだったろうな。絶対目立つもん。
そう言ってやったら、ちょっと苦笑された。
「秘書の連中にも、よく言われる。マクドとか、安いし手軽でいいじゃねぇか。なのに庶民の食い物を奪うなとか、天下の東海林グループ会長が自分で買いに行くなとか、煩ぇんだ。何を食おうと俺の勝手だろうが」
本人はそんな風に怒っているけど、あたしは秘書たちに同感。セレブはセレブらしく、お高い物を食べていてほしいわ。
それにしても、こいつの秘書たちって、上司相手に凄いこと言うね。
あっ……くそ、社長さんの話、思い出しちゃったよ。こいつの秘書にならないかってやつ。男ばっかりなんでしょ？　なんかやだな。それにこいつの秘書をするっていうのも、ぶっちゃけやりたくない。

そりゃ棚ボタなのは、分かっているけどさ。
お腹の虫が鳴って、考えを中断した。今はとにかく、空腹を満たすことが先決だよ。
ケンタの箱を開けると、フライドチキンが3つ残っていた。他にコールスローとポテトの小さいの。
「俺はもう食ったから、好きなだけ食べていいぜ」
「あ、ありがと」
って言われても、チキン3つは多いよ。ちょっと迷って、チキン2つとコールスローをテーブルに出した。ウーロン茶のキャップを開けて、喉を潤す。これも、こいつが買ってきたんだよね？　コンビニでペットボトルを買う東海林グループの会長……やっぱり目立ちそうだわ。
うう、美味しそう。みっともなくならないように注意して、フライドチキンにかぶりついた。
んんん～～、美味しい！！
夢中になってパクパク食べていると、何となく視線を感じた。それとなく顔を向けたら、隆広が興味津々にこっちを見てる。思わず鶏肉を噴き出しそうになっちゃったよ。
「な、なによ？」
「いや、美味そうに食うもんだと思ってな」
だって、ケンタッキー好きだもん。値段がちょっと高いから、月に一回食べるくらいだけどさ。この衣の食感と独特の味付けと皮の感じが、最高なのよね。
しかし、フライドチキンにかぶりついてるのを見られるのって、何だか緊張するな。特にこいつが相手だと。
でも隆広を見たら、もうプラズマテレビに集中していた。今の内に食べちゃおう。
幸い、食べ終わるまで隆広と目線が合うことはなく、お陰で心置きなくお腹を満たすことが出来た。

9

それから、バスルームで軽くシャワーを浴び、歯磨きやメイクの下地を済ませてリビングに戻ると、隆広に寝室に行くように言われた。

今度はなによ？

行ってみるとそこにあったのは、ゴォ～ジャスな桜色のイブニングドレス。スカートの部分にビーズのような光る石が散りばめられて、スリットも大きく入っていて、何じゃこりゃ！？　まさか、これを着てバイト先に行けと！？　冗談でしょ！？

あたしが寝室の入口で固まっていると、背後に立った隆広に「それやるから着て行け」と言われた。

「こんなドレスいらないわよ。今着てるので十分だって」

これも十分ゴージャスなんだから！　アパートに帰れないなら、これでお店に出ようと思ってたよ。さっき車の中で散々暴れたから、ちょっとシワになっちゃいるけど、物がいいから全然気にならない。

それに、なんかさっきはなかったものが、デンッと鎮座しているよ？　三面鏡が乗った、引き出し付きのドレッサー。上には所狭しとメイク道具が並んでる。

「ねぇ、あれどうしたのよ？」

「ここの美容サロンから運ばせた。必要だろう？」

いや、まあ、必要と言えば要るものだけどさあ。やることがいちいちド外れてるよね。さすが東海林グループの会長だわ。

「お前がどんな風に化けるのか、楽しみだな」

いかにも楽しそうに言われて、ムカついた。ふん、あんたがビックリするくらい、化けてやるわい！

一人寝室に残されて、ドレスを見に行った。ちゃんと同系色の、ストラップ付きのピンヒールも揃えてある。そのヒールの横にはブランドのロゴが入った袋。中には当然のように、Ｔバックのショー

ツとストッキングが入っていた。本当に、抜かりが無いわ。
ドレスの生地を触ってみると、やっぱりシルクっぽい。ハイネックの首周りはレースになっていて、スカート部分のキラキラは多分スワロフスキー。ダイヤかと思うくらい繊細で煌びやかだよ。裾はそんなに広がっていないけど、大胆にスリットが入っていて、これでお店に出たら絶対一悶着起こりそうだわ。
つか、あたしのバイト代で買える代物じゃないよ。ママにも変な誤解を与えちゃう。絶対に着ていけない！　今着てるこのワンピースだって、十分物議を醸しそうなのに……。
ドレスは置いておいて、先にメイクをすることにした。
スキンケアやメイクコスメは、普段からそれなりに良いものを使っていて、用意されていたものもそんなに違いはなかった。ただアイシャドウとかチークに関しては、贅沢と言えるほど専用パレットに色が豊富に揃えてあって、思わずほしくなっちゃったよ。
クリームファンデにルーセントパウダーとチーク、ハイライトで陶器のような肌を作る。それから、くっきりアイラインとグラデーションの効いたアイシャドウでメリハリのある目元を作り、仕上げに付け睫。
よしよし。
最後に髪をアップにセットして終了。ヘアアイロンで毛先をクルクルに巻くのも、最初は苦労したけど、今じゃもうお手の物。
鏡の中のあたしは、いつもお店に出ている時の顔になっていた。このスタイルになると、自然に営業スマイルが出来るんだから、不思議なもんよね。
今日の出来に満足していると、ドアがノックされた。
「うわ、はいはいはい」
ドアを開けると、隆広と知らない男性が立っていた。隆広はちょっと呆気に取られたような顔をしてる。
「なによ？」
「……いや、意外に化けるもんだと思ってな」

ふふん、そうでしょうとも！　こいつにそう言わせられたのは、ちょっと鼻高々だわね。
「で、なによ？」
「ヘアメイクを命じられまして……」
一緒にいた男性が、ヘラッと笑って言った。そういえば、いつも行くサロンの美容師が持ってるようなバッグを、腰に下げている。
やっぱりこいつ、変なところで気が利くわ。いや、変なところっつうより、女に関することでは、だわね。全く、どんだけ女馴れしてんのさ！！　つか、なんであたしがこいつのことでモヤモヤしてんのよ！
そんな自分にイラッときて、隆広をギッと睨み付けちゃった。
「で、ですが、必要ないみたいですね」
あたしの睨みを変に誤解したらしい美容師が、へっぴり腰で答えた。別にあんたを睨んだ訳じゃないんだけど……。
「呼び出して悪かったな」
「い、いえ、では僕はこれで」
「ああ」
くわあ、悪かったとか言いながら、ちっとも悪びれてないこの態度！　俺様め！
美容師は何度も頭を下げながら、部屋を退出して行った。
「お前、なんでドレスを着ねぇ？」
「あんなの着ていける訳ないでしょ！　女馴れしてんなら、あたしの立場ってのも考えなさいよ！」
「立場もなにも、ホステスだろうが」
……ああ、ダメだ。東海林グループ会長と言っても、やっぱりこいつはお坊ちゃんだわ。
「分かってないねぇ」
あからさまに溜め息をついて、両腕を広げて呆れてやった。当然の如く、こいつは面白くなさそうに渋い表情をしている。顔に「不本意」って書いてあるよ。

「なにがだ？　俺がプレゼントしてやってんだぞ。嬉しくねぇのか？」
「当たり前でしょ！　あたしなんかが買える代物じゃないじゃない」
「お前に買える物贈ったって、意味ねぇだろうが！」
「あんたバカ？」
「バカとはなんだ！！」
「じゃあアホ」
「……」
　あたしの容赦ない罵倒に、またしても絶句してる。まぁ、天下の東海林隆広にこんなこと言う奴は、こいつの周りにはいないよね。あたしは懇切丁寧に教えてやった。
「こんなの着てお店に出たら、パトロンが付いただの、どんな金持ちを落としただの、痛くもない腹を探られるだけでしょ！　下手したらこの世界から抜けられなくなるじゃない！　あたしは就職したいの！」
　しかも贈り主がこいつと知れたら、もうジェラスの嵐よ！　絶対、修羅場になる！　そんなつまんないことに、巻き込まれたくはないわ！！
　隆広は納得いかないような顔してる。分からなけりゃいいのよ、無理に分かってもらおうなんて、思っちゃいないから。
「ま、このワンピースドレスだって、十分物議をかもしそうな代物だからね。これ以上なにか起こってほしくないのよ！」
「お前な……」
「なによ？」
「俺にそんな口利いたら、他の奴は無事じゃすまねぇぞ」
「あらそう。じゃあ、あたしにもそいつらと同じ様にしてみなさいよ！」
　つい勢いで言い切っちゃったけど、こいつってば東海林グループで一番偉いのよね。こいつの権限ってどんだけデカいんだろ？
　しまったなぁと思っていたら、鼻で笑われた。

「後悔してんだろう」
「し、してないわよ！」
くそぉ、どもっちゃったのが悔しい！
「ふん、お望みならやってやるよ」
「やらなくていいってば！」
「そうだな。あのドレスを着たら、さっきの暴言は聞かなかったことにしてやるぜ」
ぐっ……ムキになっちゃった自分が憎い！
今ので立ち直ったのか、ニヤニヤ笑いながら見下ろしてくるのがムカつく！
「どうする？」
「くっ……ちなみに、着なかったらどうなるの？」
「ふむ……お前のバイト先を潰してやろう。で、路頭に迷った咲弥子を、俺の女にしてやるよ」
絶っっっ対やだ！！
「……着れば、潰さないのね？」
「ああ、そうだな」
気に入らないけど、しょうがない。路頭に迷いたくはないし、大好きなママと尊敬している社長さんのお店を潰されたくはなかった。
「分かったわよ！　着ればいいんでしょ！！　この最低男！！」
叩き付けるように閉めたドアに背中を押し付けて、込み上げる涙を堪えた。バッチリお化粧したこの顔で、泣く訳にはいかない。
スンッと鼻をすすって、ドレスの元に行く。頭部と手足のないマネキンに着せられたドレスは、とっても綺麗。こんな状況じゃなかったら、あたしだってこういうドレスを着てみたいよ。
「はぁー」
抗えないつらさを溜め息で吐き出して、ドレスに着替えた。脱いだ下着は、さっきの袋に入れた。
予想通り、サイズはぴったり。悔しいけど、あたしによく似合っていた。裾はヒールを覆うほどに長いのに、歩くのに邪魔になる程

じゃない。鏡に映るあたしは、今までお店に出ていたあたしとは全然違って、スーパーモデルみたいに見えた。着る服だけで、こんなに見た目が変わっちゃうなんて。
打ちひしがれた気分でリビングに出ると、隆広が満足そうな顔でこっちを見ていた。
「ふん、似合うじゃねぇか」
「……」
何も答えたくない。無言で目を逸らして宙を睨んでいたら、隆広があたしの前に来て、車のキーをクルクル回していた。
「なに、してるの？」
「『椿』に出るんだろ？　送るぜ」
「いらっ……」
いらないと言おうとしたら、顎を掴まれてキスされた。ちょっと触れるくらいの軽いキス。それでも平手を食らわせようと振り上げた右手は、あっさりと受け止められた。
「その格好で、電車に乗る気か？　止めとけよ」
「くっ……変なこと、しないでよね！」
「当然だ、そこまで節操なしじゃねぇよ」
ふん、どうだか！
「ほら」
渡されたのは、白っぽいバッグ。こんなのあたし持っていなかった！
「ちょっと、あたしの鞄は！？」
「そのドレスにゃ合わねぇだろ」
「なっ！？　こんなのいらないわよ！」
だってこれ、あの有名なガーレットのバッグよ！？　パリで老舗のブランドよ！？　この特徴ある革生地とロゴは、知らない人がいないくらい有名よ！？　しかもこれすっごく高くて、１００万近くするのよ！？　ドレスといいこのバッグといい、どうしてこんなたっかいブランドばっかりなのよ！！

って、こんなこと東海林グループの会長に言っても無駄か。そういうもんしか、持ったことないわよね、きっと。
「あたしの鞄は、どうなるのよ？」
「さっきのワンピースと、似合わねぇリクルートスーツと一緒に、自宅に送ってやるよ。財布や携帯は入れ替えてある」
言われて白いバッグの中身を見て、殆どそのまま入っているのを確認した。ただ一つ、無い物があった。
「あたしの履歴書は？」
「俺が預かってる」
「なんでよ！？」
「直人の言うことも、検討してみようと思ってな。俺の秘書たちがお前をどう思うか、興味もあるしな。だから、持って行く」
「あたしは、あんたの秘書になるなんて、一言も言ってない！」
「だが、就職はしたいんだろ」
また、足元を見られたような気分になってムカついた。でも、もう6時を回っている。遅刻するとバイト代を減らされちゃうから、あと30分で着かないと……。もう、無理かな。
諦め気分でいると、隆広の右手が背中を押すように、回された。
「ちょっと！？」
「エスコートは必要だろう。早くしねぇと、遅刻するぞ」
遅刻なんて言葉を知っていることに、ちょっとした驚きを感じつつ、さっきは一人で泣いて降りたエレベーターを、こいつと一緒に乗った。

10

絶対ラッシュに巻き込まれるかと思っていたのに、遅刻することなく出勤することが出来た。隆広の運転技術が凄いと言うべきなのか、６時３０分ちょうどにお店の前に到着した。

近くで降ろしてくれればいいって言ったのに、まるで意地悪のように、お店の真ん前に車を停めた。当然のことながら、あたしが降りるのをエスコートする。

目立つ外車で銀座のド真ん中。こいつ自身も目立つ男だから、嫌でも注目を浴びることになった。当然、出勤途中の同僚たちも、立ち止まってあたしたちを見ている。ああ……これでもう今日は針のムシロだわ。

「送ってくれてありがとう。今度こそ、もう姿を見せないでよね」

「ふん、棒読みで礼を言われても、ちっとも嬉しかねぇぜ。まぁ、精々頑張って来い」

そう言って肩に触れてこようとしたから、睨み付けて止めさせた。これ以上、何にもしないで！！

背中に隆広の視線を感じながらお店に入り、控え室に行くと、当然のように同僚のお姉様方に囲まれた。

「ちょっと小夜、あの人誰！？」

「こんなドレス、どうやって手に入れたの！？」

「バイトの癖に、いつの間にあんな金持ちそうなイケメン、掴まえたのよ！？」

「就職するなんて言いながら、あたしたちと張り合う気なら、容赦しないわよ！！」

あああもう！！

こういうことになるから、お店の手前か奥で停めてって言ったのに、あの俺様御曹司め！！

「あたしはちゃんと必ず就職します！　あいつは単なる行きずりの

男！　ドレスはややこしい事情で押し付けられただけで、好き好んで着てるんじゃありません！！」
　煌びやかなお姉様方に囲まれた真ん中で、精一杯声を張り上げて訴えた。
　着なきゃここを潰すって言うんだから、しょうがないじゃない！
　そう喉まで出掛かって、何とか呑み込んだ。こんなことが知れようものなら、こんな追及じゃ収まらないもの。
　みんな胡乱気な目であたしを見ている。でも、これが本当のことなんだから！
「失礼します！」
　人の輪の隙間からズカズカ進んで、部屋の隅に移動した。背中に感じるみんなからの視線が痛いけど、もうどうしようもない。くそぉ、絶対この仕返しはしてやるんだ！！
　密かにあいつに対する報復を心に決めていると、「小夜ちゃん」と呼ばれた。これ、あたしの源氏名。さやこだからさよって捻りも何にもないけど、シンプルだから結構気に入ってる。
　振り向くと、にこやかな顔をしたママがあたしを呼んでいた。年齢不詳のママは、オフショルダーのセクシーな黒いドレスを素敵に着こなしている。首元に光るネックレスとイヤリングは、本物のダイヤ。もう美女としか言い様がない人で、毛穴なんて存在しないんじゃないかと思えるくらい綺麗。
　そのママが、にこやかな顔をしている。一見して穏やかそうだけど、こういう表情をしている時は、意外と要注意。多分、このドレスと送って来た隆広のことだろうなぁと思いつつ、腰を上げた。
　その場では何も話さず、お店のオフィスに通された。うわぁ、これはいよいよ深刻な話だわ。
　ソファーに座るように促されて、ママと対面するように座った。
「何の話かは、小夜ちゃんのことだから、分かっているでしょうね。さっき小夜ちゃんを送ってくれた人は、東海林隆広ね？」
「はい、そうです。別に知り合いでも何でもなくて、偶然にこうい

うことになっちゃったんです」
普段はあまりやらないけど、今回ばかりは先回りして釈明することにした。バッサリ端折ってはいても、嘘は言ってない。そもそもバーで会ったこと自体が偶然だったんだから。
っていうか、お姉様方は分からなかったのに、顔を見ただけでいつの正体が分かるって、さすがママだわ。
ママは頬に手を当てて、考え込むようにあたしを見ている。嫌な視線じゃない。ただ、あたしの言葉と表情から色々読み取ろうとしている、とは感じた。
「彼がどういう人物かは、知っているのね？」
「それはもう、嫌というほど！」
俺様で最低でデリカシーがなくて、変なところで紳士な奴。さすがに口に出しては言わなかったけど、あたしにとって東海林グループの会長は、こんな奴だ。
「そのドレスは、彼から？」
「はい。あたしは着たくなかったんですけど……」
脅されたことは、言いたくなかった。言葉を濁しただけで、きっと気持ちは理解してもらえると思ったから。それなのに、ママの言葉はそれから大きく外れていた。
「そう、小夜ちゃんによく似合ってるわ。あなたの魅力を十分に分かってくれているのね」
「は？」
「いいお客様になるといいわね。小夜ちゃんにとっても、『椿』にとっても」
え！？　あ、あの……それはどういう意味でしょか？
ママの言葉をぐるぐる考えている間に、話は終わったとでも言うように、ママは席を立ってしまった。
「さぁ、もうじき開店の時間よ。小夜ちゃんも準備して」
「は、はい……」
ヤバイ！　絶対に誤解された！！　ママにだけは、そういう誤解

をされたくなかったのに！！　最悪じゃん！？
くそぉ、やっぱりあいつに仕返ししてやる！

気持ちの上ではどんなに腸が煮えくり返っていても、笑顔でサービスするのは、この仕事じゃ当たり前。いや、どの仕事でも同じか。
今までは地味なドレスであまり目立たないようにしていたのに、今日はこの無駄に目立つドレスのお陰で、やりづらくて仕方が無かった。お客様の注目は集めちゃうし、お姉様方からはほしくもない剣呑な視線を頂いたちゃうし。もちろん、あからさまになんて絶対にしてこない。それがまたイライラに繋がるのよね。
予想はしていたけど、この針のムシロは、なかなかに強敵だった。何度溜め息を押し殺したことか！
開店して2時間ほどが経った頃、ホステスとお客様の会話でざわついていた店内が、一瞬水を打ったように静まり返った。
その時のあたしはご指名を受けて、かなり歳のいったお客様のテーブルに着いていた。バイトのあたしでもお得意様はいてくれて、この人もその一人。６０歳はとっくに超えてるだろうなぁ、とは思うけど実際の年齢なんて聞いたことは無い。あたしでも知ってる一流企業の社長さんであることを、名刺を頂いて知っているだけ。
でもこの人のお相手をしているお陰で、煩わしい視線を感じ取ることがなかったから、今日は来てもらえて本当によかった。
ざわついていた店内が急に静まり返ったのは、このお客様と経済談義に花を咲かせていた時だった。
何じゃい？　と思って顔を上げたら、思わず声を上げそうになったよ。
緊張したような顔の黒服に案内されているのは、東海林隆広じゃないか！！　涼しげな顔をして、やけに場慣れしているように見え

る。急に静かになったのは、こいつが登場したから？　どんだけ目立つ存在なのよ！？　まぁ、確かに存在感はある奴だけどさ！！
　フロアにいる全員がポカンと口を開けて見送る中、あいつが通されたのは、何とＶＩＰルーム。そりゃまぁ、天下の東海林グループ会長だから扱いは全く違うだろうけど、このお店、一見さんはお断りだったはず。まさか、あいつもお得意様の一人だったのかぁ！？
　すぐ後から、ママも同じＶＩＰルームに入っていく。きっとママのお客なんだ。だから、あいつの顔を見ただけで、ママは正体が分かったんだ。ちょっとホッとした。
　あいつの姿が消えると、再びフロアに活気が蘇った。さっきよりざわつきが大きく感じるのは、きっとあいつの噂をしているからなんだろうな。
「珍しいね、彼がこういう店に来るなんて」
　隣に座るお客様が、溜め息と共にボソッと言った。タバコを口にされたので、すかさずライターで火を点けて差し上げる。あいつのことは、知っていると思われない方がいいと判断して、話を振った。
「ご存知なんですか？　今の男の人」
「小夜ちゃんは……まぁ顔は知らないか。名前は聞いたことがあるだろう、東海林隆広という」
「まぁ、もしかして東海林グループの会長の？」
「そうだ。今年３０歳になったのか、若い身でありながら東海林グループの全権を握る男だよ」
　さんじゅう！？　てっきり２０代後半かと思ってたよ。ま、そんなに変わらないか。
「お若いんですね。会長さんて、もっとお歳を召した方がなると思ってました」
「彼の祖父に当たる先代の会長が、後見になって指導しているらしいな。しかし小夜ちゃん」
「はい？」
「いつも思っているんだが、私はこういう話しか出来ない男で、い

つも経済の話ばかりしているが、いいのかい？」
「はい、全然構いません。私はこういうお話が好きですし、とても勉強になりますよ」
ニコッと微笑んで、お客様に2杯目の水割りを作って差し上げた。このウィスキーの水割りも、あたしが作ると美味しいって評判なのよね。
お客様は、安堵したような満足したような顔で、受け取った水割りを美味しそうに飲んでいる。学費と生活費を稼ぐためだけにここで働いているけど、お客様のこういう反応を見ていると、やりがいはあるよね。
いい雰囲気で、さっきの話の続きをしようと思っていたら、ママがテーブルにやって来た。
「小夜ちゃん、いいかしら。ご指名よ」
う、それはもしや、東海林隆広でしょうか？
何も言ってないのに、ママは穏やかに微笑んでうなずいた。
行きたくないけど、行かないと今度は色々と探られるかもしれない。仕方なく、あたしはお客様にお詫びを言って、席を立った。お客様は、ちょっと驚いたような顔をしていた。そりゃまぁ、ああいう状況ですぐにママが呼びに来れば、指名の相手があいつだってことは、分かっちゃうわよね。
あたしが立った後、すぐにママがお客様の傍に座ってくれた。あたしの代わりがママなら、お客様も文句は言わないもんね。
それより、こっちが問題だよ。二度と姿を見せないでって言ったのに、あの俺様最低野郎！！
フロアを歩いていると、周りからお姉様方の視線が体中に突き刺さる。あたしだって、指名されて迷惑してるわい！
このやり場の無い怒りは、あいつにぶつけるしかない！

11

ノックしてＶＩＰルームに入ると、豪華なソファーに東海林隆広が、ふんぞり返っていた。でも、なんかさっきとは雰囲気が違う？　なにが違うのか、正面に立って分かった。服装が丸っきり変わっていた。

見るからに高級品な三つ揃いのスーツを隙なく着こなして、足を組んでソファーの肘掛に肘を乗せて、あたしを見上げている。こっちが見下ろしているのに、ちょっと気圧される感じがした。

声を出そうとしたら体が震えているのが分かって、グッと足を踏ん張った。くそぉ、こんな奴なんかに負けるもんか！

「なにしに来たのよ？　わざわざ着替えちゃってさ！」

「そりゃお前、『椿』に来るのに正装しないなんて、失礼だろう」

「はあ！？　なに言ってんの、バカじゃない？」

「当たり前だ、冗談に決まってんだろ。まぁ座れ」

隣を指差されて、仕方なく座った。従わないとまた脅されそうな雰囲気が、こいつの目にはあった。

「ふん、やっぱりそのドレス、お前に似合ってるな。スゲェ目立ってたぜ」

「あたしは、目立ちたくなかったわよ。大変だったんだから。お姉様方には追及されるし、ママには誤解されるし！」

「だから、こうして来てやったんじゃねぇか」

どういう意味よ？

思いっ切り睨んでやったら、呆れたように溜め息をつかれた。溜め息つきたいのは、こっちの方よ！

なにを言うのか待ってるのに、こいつはタバコを取り出して口に咥えた。なかなか火を点けようとせず、あたしを見てくる。

「なによ？」

「客がタバコを咥えたら、ホステスがやることは一つだろう」

「誰が客！？」
「俺。金は払う、さっきママにも話して、お前を指名させてもらった。何か文句はあるか？」
ない。っていうか、言えるはずなかった。
あたしはカルティエのガスライターを取り出して、こいつの前で火を点けた。タバコの先に火が移り、紫煙が立ち昇る。
「あんた、ここの常連だったの？」
「あんたはやめろ。ホテルの中とは違うんだ、他人に聞かれたら困るのはお前だぞ」
くっ……なんでいちいち、言うことが尤もなのよ！！　確かにそんなの聞かれたら、追及の嵐は更に強くなる。
「隆広、さんて、ここの常連だったの？　ここって一見さんはお断りのはずだよ」
「残念ながら、過去に2回接待を受けて来たことがある。好き好んで来る場所じゃねぇがな。酒は一人で飲むことにしてる」
「それが、あのバーだったの」
「そういうことだ」
うなずいた隆広が、「ここで一番高い酒」と注文してきたので、室内のインターホンで待機している黒服に伝えた。確か１００万くらいするブランデーだったと思う。まぁ、こいつならポンと出せるんだろうけど……ふと気付いた。
「ちょっと、今のってまさか、あたしの売り上げにしてくれるってこと？」
「お前の客として来てんだから、当然だろ」
しれっと言ってるけどさぁ、それってあたしのお店での立場が益々悪くなるよ。今日のことで十分に、お姉様方を刺激しちゃったっていうのに。
「はぁ……」
「景気の悪い溜め息をつくんじゃねぇ。お前、本気でホステスやってんのか？　さっきからお前の態度は目に余るぞ」

だって、相手がこいつじゃとてもホステスとしてなんて、対応出来ないよ。
でも、そんなこと言えない。こいつの言う通りだから。ちゃんとホステスとして応対して、こいつをギャフンと言わせてやる。
意気込んだところで、黒服がお高いブランデーを持って来た。綺麗な琥珀色の液体をブランデーグラスに注ぎ、隆広の前に置く。
「どうぞ、東海林様」
「ああ」
くそぉ、名字の様付けで呼んでも、動揺も見せない。まぁ、こいつの場合呼ばれ慣れてんだろうけど。
しかも、ブランデーグラスを呷る姿は、メッチャ様になってるよ。ムカつくなぁ。顔は笑顔で心ん中では罵倒しまくっていたら、「お前も飲め」と言われた。
こ、こんなお高いブランデー、お店でも飲んだこと無いよ！　くそ、こいつの目の前で、思わず興奮しちゃったよ！
努めて笑顔でグラスにブランデーを注ぎ、「いただきます」と少しグラスを掲げて、くいっと一口飲んだ。
美味しい～！！
ついジタバタしたくなるほど、芳醇な香りと強めのアルコールが口の中に広がって、何とも幸せな気分になる。
横からのニヤニヤ笑う視線に気が付いて、ハッとしてグラスをテーブルに置いた。
「いいから飲めよ。小夜のザル加減なら、ボトル一本空けても問題ねぇだろ」
言われて反論出来ないのが悔しい。さすがのあたしも、ボトルを一本空けたことはないわよ！　でも、笑顔で「そんなことありませんよ」と言うしかなった。くそぉ、いつもやっていることなのに、こいつの前だとなんで出来ないのよ！？
負けるもんか！
「東海林様、さっきとはお召し物が違いますけど、どうされたので

すか？」
「東海林隆広と、分からせるために着る必要があったからな。このくらいしねぇと、説得力ねぇだろ」
本気で言ってるのよね？　真顔だから。でも、これはやりすぎだと思う。説得力あり過ぎだよ。みんな唖然としてたもんね。それだけ、こいつの存在感が凄いってことでもあるけど。
「そんなことはないと思いますけど。昼間のスーツ姿も、とても素敵でしたわ」
「本気で言ってんのか？」
「勿論です」
これは本当。昼間のスーツの方が、ずっとよく似合ってた。今のも悪くないけど、何ていうか、カッチリし過ぎてる。会長として仕事するなら、これでも分かるけどさ。
ああ、なるほど。そういう意味での『説得力』ね。でも、やっぱりこれはあり過ぎだわ。
それから30分くらいで、隆広は帰っていった。一体なにしに来たのよ、あいつ？　まさか、本当に100万のボトルを入れてくれるためだったの？
首を捻りつつ、上客として隆広をお見送りすると、ママに呼び出された。
「小夜ちゃん、よくやったわ」
「えと、なにがですか？　ママ」
「東海林グループの会長を、『椿』のお客様に迎えられたのよ。小夜ちゃんのお陰。今月はバイト代、奮発するわね」
「あ、ありがとうございます」
アルバイトのあたしは時給制だから、それほどお給料は高くない。と言っても、専属で働いているホステスと比べてであって、普通のフリーターでは到底無理な金額をもらっている。これから年末になっていくし、就活もまたやっていかなきゃいけないから、一時的でもお給料が高くなるのは、ありがたい。

それがあいつのお陰っていうのが、ちょっと引っ掛かるけど、それは考えないことにした。
「小夜ちゃん、前から言ってるけど、お店続けてくれないかしら？」
ふっと、ママが言った。そう言ってもらえるのは嬉しいけど、あたしはやっぱり昼間のお仕事をしたいわけで。
「ごめんなさい、ママ」
「そう……しょうがないわね」
溜め息をついて、ママはお店の奥に入っていった。その背中に向けて、あたしは深々と頭を下げた。

お店は深夜1時までやっているけど、バイトのあたしは11時30分まで。
お姉様方からの、嫌がらせのような視線の嵐はその後も続いた。でも、あたしの上がりの時間が早いお陰で、誰からも絡まれることなくお店を後に出来た。控え室で一緒になろうものなら、何をされるか。
次の出勤日は大丈夫かな。ただ絡まれるだけならいいけど、お店に影響が出るようだと働きづらくなるしなぁ。
結局は、あいつのせいか！　世間では会長様でも、あたしにとってはまるで疫病神だね！　ああ……もうあいつのことは考えないようにしよう。精神衛生上よくないわ。
いつもは電車に乗って帰るけど、今日はタクシーで帰ることにした。こんなドレス着て電車なんて、さすがにちょっと。それにこの時間だと、酔っ払いも多いだろうから、絡まれると困るし。

この辺で流しのタクシーを掴まえるのは難しい。あたしはゆっくりを歩き始めた。こんな遅い時間でも夜のお店が多い周辺は、まだまだ人影は多い。
今度はどこの会社を受けようか。考えながら歩いていると、ブルッと体が震えた。上着を持っていないから、ちょっと肌寒い。
タクシーを拾える場所まで急ごうと早歩きを始めると、前方に見覚えのある男が、見覚えのない車に寄り掛かってタバコを吸っていた。くそぉ、こんなところでまた会っちゃったよ！
「よぉ、やっと帰りか」
「なにしてんのよ？　あんたこそ、さっさと帰ったら？」
さっさと通り過ぎようとしたのに、長い足でガードレールを跨いできて、道を塞ぐように立たれた。
「なに言ってる。お前を待ってたんだ」
「はあ？」
「乗れよ、送ってやる。コートがねぇと寒いだろ」
まさか、これを狙ってコートをを用意しなかったわけ！？　抜け目のないこいつが、ドレスだけなんておかしいと思った！
「いらないわよ！　タクシーで帰るから」
「タクシー代が浮くぞ」
こいつを押し退けて歩こうとすると、そんな言葉であたしを惑わせる。確かにそうだけど、こいつの車に乗ったら、もっとヤバイ目に遭いそうだし。
携帯灰皿にタバコを捨てたこいつは、足が止まったあたしに続けて言った。
「この時間じゃ深夜料金てのも、取られるんだろ」
「……なにがしたいのよ！？」
「別に、お前を送るだけだ。早く乗れ」
「……」
無言で睨み付けてやったけど、結局乗ることにした。立ち止まって、寒さが急に身に沁みてきたから。

だからって、まさかお姫様抱っこされてガードレールを越えることになるとは、思ってもいなかったよ。さすがに銀座の繁華街だからか、からかう声は聞かれないけど、やっぱり恥ずかしいじゃないの。

「ちょっと、もう降ろしてよ！」

「このまま乗せてやる。暴れんなよ」

「いらない！！」

こいつの腕の中でジタバタしたら、諦めたように地面に降ろされた。うわ、寒い。抱っこされて体が密着していたから、余計に寒さが身に沁みる。

すると、運転席のドアが開いた。こいつが運転してきたんじゃないの？　とか思っていたら、こいつに負けないほどのイケメンが降りてきて、後部座席のドアを開けた。まさか運転手という人かいな？

ボケッとこの人を見上げていたら、隆広が説明してくれた。

「吉永里久だ。俺の専属運転手、兼秘書」

「……」

愛想も何もなく、ムチャクチャ素っ気無く無言で会釈されて、「はぁ、どうも」と頭を下げるしか出来なかった。

もしかして、昨夜バーからホテルに行く時に、送ってくれたという秘書だったりするの？　うわぁ、恥ずかしい！！

二人で並んで後部座席に座り、吉永里久という人の運転で、車が走り出した。

12

昼間乗ったランボルギーニとかいうのとは、明らかに違う。妙に内装が豪華で、一度だけお客様のお供で乗ったリムジンのようだわ。
「どうしたのよ？　この車」
「さっき『椿』でブランデー飲んだだろうが。飲酒運転になっちまう」
「……」
「なんだ？　驚くようなことか？」
「つうか、あんたなら捕まるなんて、あり得ないんじゃないの？」
東海林グループの会長が、どんだけの権力を持っているのか知らないけど、世間様に黒を白と言っちゃってまかり通るくらいしてるかと思った。特にこいつの場合。
正直にそう言ったら、不本意そうに返されたよ。
「お前は、俺を何だと思ってるんだ？」
「だって、そのくらいの権力はありそうじゃん」
「まぁ、あると言えばあるがな。だからって、ゴシップ好きの連中を喜ばすようなことを、進んでやる訳ねぇだろ」
言われてみれば、確かにそうよね。こいつなら特に！
そういえば、送るって言われたけど、あたしアパートの場所教えてないよ。まさか、ホテルにまた戻るとか？　そんなの嫌だ。
「新宿方面に行って」
「なに？」
「あたしのアパートがそっちにあるの。もう家に帰りたいから、新宿方面に行って」
「知ってる。初台だろ」
「は！？」
なんでこいつが、そんなこと知ってんのよ！？　まさか、たった2時間程度で調べたとか！？

信じられない思いで隆広を見たら、ニヤッと笑われた。
「もう忘れたのか？　履歴書は俺が持ってんだぞ。そこに書いてあるだろうが」
「あっ！」
くそぉ、騙されるところだった！　あんな短時間で調べられるなんて、こいつの権限は本当に凄いんだ、なんて思っちゃうところだったよ！
「くっくっくっ、そういう抜けたところも、お前はいいぜ」
どういう意味よ！？
笑われたのが悔しくて、ぷいっと窓の外を見た。夜の銀座もネオンは結構派手。でも、歌舞伎町の方がやっぱりちょっと下品かな。外は明るい銀座の風景とは変わって、灯りの無いビルが多くなった。銀座を抜けると、深夜の都心てこんなもんよね。
あたしが見つめる窓には、隣に座る隆広の顔が映り込んでいる。何という訳でもなく、その顔を見た。
口は悪いし、手は早いし、デリカシーはないし。でも、こうしている分には、まともなイケメンだ。三つ揃いのスーツなんか着ていると、そこらの３０歳の男なんか太刀打ち出来そうにないほど、威圧感がある。
お店のフロアには大企業の社長さんも来ていたのに、そんな人までもが、ＶＩＰルームに向かうこいつに圧倒されていたもんね。伊達に東海林グループの会長なんか、やってないってことか。
でも、だったらどうして、あたしなんかに構うのさ？
３０分も経たずに、あたしのアパートの前で車が停まった。こんなことなら、どんな条件付けられても履歴書返してもらうんだった。
「送ってくれてありがと。でも、これでもう本当にあたしの前に、現れないでよ」
言い捨てるようにしてドアのロックに手を掛けたところで、勝手にドアが開いた。自動ドアかと思っちゃうくらい、タイミングはバッチリだった。

外で吉永里久が、あたしを見下ろして立っている。いつの間に降りていたのよ？
とりあえずお礼を言って車を降りると、何故か隆広も付いてきた。
「ちょっと、なによ？」
「部屋まで送る」
「はあ！？　必要ないって」
「話があるんだよ。ここで待ってろ」
「……」
吉永里久も、黙って会釈なんてしてんじゃないわよ！　全くもう、秘書のくせに何だか隆広と同類に見えてきた。
「話ならここで十分でしょ」
「お前の部屋を見てぇんだよ。さっさと案内しろ」
くそぉ、どこまでも俺様め！！
本当にこんな奴を部屋に入れたくないけど、このまま外で立っていたら、確実に風邪を引いちゃう。仕方なく、こいつを伴って3階の角部屋まで来た。
家賃8万円の1DK賃貸アパートなんて、東海林グループ会長が来る場所じゃないよ。
開錠して玄関に入ると、少し寒さが和らいだ。用心のために、玄関の灯りはいつも点けている。でも、ホッとする間もなくガッチリ肩を掴まれて、鉄製のドアに背中を押し付けられた。
「ちょっと、なにすんのよ！？」
「そりゃお前、一人暮らしの女の部屋に招き入れられたら、やることは一つだろう」
「なっ！？　あんたが話しがあるってんぅ」
こういう展開ってあり！？　抗議の言葉は、こいつの唇に遮られた。絶対、絶対舌を入れられるもんか！！
目を瞑って口を引き結んでいたら、強引なキスはされずに、ゆっくりはむように優しく口付けされた。それが凄く意外で、本当に優しくて、張り詰めていた気が緩んでいってしまう。

自然に開いた唇を割って、隆広の舌が入ってきた。あたしも舌を出すと、ゆっくりと絡み合う。こいつとディープキスをするのは、今日でもう4回目。でも一番優しくて、深いディープキスだった。

優しい舌遣いに、こいつに反抗していた気持ちが和らいでしまう。スーツの上からも分かるくらい逞しい肩に両手を置くと、彼の両腕が背中に回って抱きしめられた。

今日の仕事は本当に針のムシロだった。アパートに帰ってきても、慰めてくれる人はいない。就活を始めてから彼氏とは別れた。もし別れていなかったら、昨日はあんなに泥酔することはなかったのかも。

あたし、ずっと誰かに慰めてほしかったんだ。それがこいつなんて……なんだか嫌だ。

そう思った途端、キスしている自分が許せなくなって、隆広の胸を押した。あっさりと唇は解放されたけど、背中に回った腕はそのままだった。お互いの息が感じるほどの距離で見詰め合う。

「一つ言っておく」

「な、なによ？」

こんな至近距離で見詰め合っても、全く気にもならなかったのに、自分の発した声が上ずっているのを知って、急に恥ずかしくなった。こいつとキスして欲情したなんて、知られたくない。

「あの『椿』のママには、気を許すなよ」

「は？　なに言ってんの？」

「お前が考えてるよりずっと、強かな女だぜ、あれは」

最初は何を言われているのか分からなかった。それが、あたしの中のママを貶める言葉だと理解して、本気でムカついた。

「やめてよ！　ママはいい人よ！　ママのこと、何も知らないくせに！」

「お前は知ってるのか？」

「し、知ってるもん！　ママはいつもあたしのことを考えてくれてる、優しい人なんだから！」

あたしの中のママを汚されたせいで、ムカついてそう叫んだけど、ママのプライベートまでは知らなかったことを、今、気が付いた。
「まさか、あんたと出来てるとか？」
「冗談言うな。あんな女と誰が寝るか！」
「ね、寝るって……ママのこと汚さないで！！　あんただってママのこと、知らないんじゃない。変なこと言ってないで、さっさと離して！」
ただでさえ距離が近いのに、こいつは更に顔を近付けて来た。思わず目を瞑る。不意打ちで耳たぶを舐められた。
「やだ、やめって……ひゃっ」
濡れた舌が耳たぶをしゃぶるように舐めてる。やだ、背筋がゾクゾクしちゃう。
「イヤリング、付けさせるのを忘れていたな」
「やっ、やめて……お願っ」
「ふん、お前の弱点は耳か」
こいつが声を出す度に、吐息が耳孔に入ってくる。やだっ、これ以上やられたら、骨抜きにされちゃう。本当に、耳はヤバイんだって。
「お、お願い、も、やめてっ！」
自分でも喘いでいるとしか思えないような声で、身を捩りながら訴えた。ドレスのスリットの間から、大きな手が内腿を撫でる。
「昼間言ったことは、冗談なんかじゃねぇぞ」
ひ、昼間？　なに？　やっ！　そんな、音を立てて耳を舐めないでよ！
「咲弥子、俺はお前がほしい。忘れるなよ」
最後にフッと息を吹き掛けられて、体から力が抜けた。慌てて隆広の肩にしがみつく。足がガクガクで、自分で立つことが出来なかった。
「こんなの、最低……」
「そうか？　あんなにいい声を出しておいて、言うセリフかよ」

「……」
悔しいけど、反論出来ない。こいつ相手は嫌だと思っていたのに、慰めてほしいと思ってしまった。あたし、こんなに弱い人間だったんだ。
「ふっ……えっ……」
嗚咽が漏れちゃったところに、顎を下からすくい上げられるようにして、上向かされた。涙でぼやける視界に、こいつのやけに真剣な顔があたしを覗き込んでいた。
「なによぉ」
「可愛いぜ、咲弥子」
「あんたなんかに言われたって、嬉しくない！　出てけ！」
泣きながら訴えたら、体から隆広の温もりが消えて、ゆっくりと玄関にぺたんと座らされた。
静まり返った部屋に、あたしのすすり泣く声だけが響く。いつの間にか、隆広はいなくなっていた。舐められた耳を手で押さえた。まだ、あの感触が残っている。吹き掛けられた息と、あいつの声。
「忘れるなって……こんなの、忘れられるわけ、ないじゃない」
最後の最後で、こんなの残していくなんて。ほんと、最低！
誰か、お願いだから……こんなの悪い夢だって言ってよ。

１２（後書き）

次回から隆広視点になります。

1（前書き）

隆広視点

1

爺さんめ、丸一日オフの朝に呼び出しなんて、何考えてやがる！？　しかも、もうすぐ仕事が明けるっつうタイミングで、俺に直接電話してきやがった。

冗談じゃねぇ、貴重な休みを潰すな！

喧嘩腰で断ったら、あっけなく翌日に延ばされた。だからって、一度損ねた機嫌は早々直らねぇ。自分のことだからな、よく分かるぜ。

俺は機嫌直しと休日前の恒例で、マスターの店に行った。マスターが趣味で集めた世界中の酒が飲めてメシも美味い。俺にとっちゃ憩いの場ってやつだ。

休みの日に女と過ごすことは、あまりない。付き合ってる女がいればまた別だが、一月前に別れた。俺としてはかなり長く、１０ヶ月も付き合いが続いた女だった。でしゃばる性格じゃなく、どちらかといえば従順だったのに、仕事が忙しくなって一緒にいる時間がなくなってくると、お決まりのクレームがついた。

「仕事とあたしとどっちが大事なの！？」

アホか、そんなもん同じ次元で考える問題じゃねぇだろ。なんで女は、こんな比べようもねぇことに、答えを出したがるんだ？

２週間ぶりのデートでそんな応酬をしたら、大泣きされた。それがきっかけで、結局その女とは別れた。付き合う女は厳選しているはずなのに、別れる時にはいつもこんな形になる。周りの連中からは、女をとっかひっかえしていると思われてるが、実態はこんなもんだ。

とにかく強い酒が飲みてぇ。そんな欲求を抱えつつバーの扉を開けると、先客がいた。俺がいつも座るカウンター席に、見たことねぇ女がいる。

店に入ってきた俺と目が合ったマスターは、困った表情で肩をす

くめた。要するに、止める暇もなかったってことか。いつもそこに座ってるってだけで、特にマスターと契約してる訳でもねぇ。俺は女から一つ空けたスツールに着いた。
「すみません、東海林さん」
すぐさまマスターが詫びを入れてきて、俺の前にグレンフィディックのグラスを置いた。
「この一杯は私からの驕りということで」
「マスターが謝るこたねぇだろ。俺はそこまで狭量じゃねぇぜ」
マスターは笑って「分かりました」と言ったが、きっと今日の支払いからはこの一杯分が引かれてるんだろう。
それならそれで、今度このバーを誰かに紹介してやりゃいい。
大衆向けのバーとは違い、落ち着いた雰囲気の店内はゆっくりと酒を飲むのにちょうどいい。個人的に気に入ってる店なんで、なるべくなら誰にも教えたくねぇが、直人ならまぁいいだろう。それに、マスターとは貸し借り無しの間柄でいたいからな。
フォーフィンガーロックのスコッチを一息で空け、マスターに次を促した。大きな氷が一つ入ったグラスに、琥珀色の液体が注がれる。いつ見ても美しい光景だな。
「今日はまた、そのような格好で、どうなさいました？」
「着替えるのが億劫で、仕事明けのまま来た。嫌なら着替えてくるぜ？」
「そんな、滅相もありません。どうぞ、そのままで」
マスターの言う格好ってのは、仕事着のことだろう。普段ここに来る時は、堅苦しいスリーピースからラフなスーツに着替えて来る。今日はそんな僅かな時間ももどかしかった。もう2年は通ってるバーだが、この格好で来るのは初めてだな。高価なカフリンクスやタイピンを外して着崩していても、高級ブランド品ってのは隠しようがねぇか。
2杯目を半分ほど一気に飲んで、タバコを取り出した。特に銘柄は決めてないから、その時に手に入ったものを吸っている。俺が喫

煙者だと知ってる連中が、土産だ贈り物だと外国の煙草を持ってくるからな。値段が高いから旨いってことはねぇが、外国産の方が旨味があるというのは、確かだな。
葉巻にしようかと何度か考えたことはあるが、その度にその選択肢を打ち消した。爺さんの真似していると思われるのが癪だった。
タバコを口に咥えると、マスターがライターの火を出す。間髪入れずってタイミングがいい。ゆっくり紫煙を堪能していると、右から酒を促す声が聞こえた。あの女だ。
見ると、ロックグラスを掲げてワイルドターキーを注げと言っている。スゲェな、女のくせにウィスキーのロックかよ。
マスターはやんわり断っているが、聞いちゃいねぇ。マスターが客の注文を断ることは滅多にねぇ。よっぽど酒量が過ぎている時くらいだ。つまり、それだけこの女は飲んでるってことだろうが、俺から見える横顔に酔っ払った様子はねぇ。若干頬が赤く染まってるくれぇだな。それがいい具合にこの女を色っぽく見せている。ふん、なかなかいい女じゃねぇか。
渋るマスターからバーボンを注がせ、それを一息で飲み干した。飲みっぷりもいい。
俺は興味が湧いて、改めてその女を眺めた。
緩やかにパーマの掛かった髪を無造作にバレッタで留め、あるかなきかの薄化粧。それでも十分に美人顔だ。無個性な紺色のスーツは、リクルートスーツだろう。10月にこの格好ということは、就職難なのか。飲み方からして、祝酒には見えねぇな。
女は再びワイルドターキーを一気飲みすると、おもむろに俺に顔を向けた。
しばらく眺めていたのが気に障ったのか、女はやや据わった目で俺を睨むように見ていたかと思うと、突然ニヘッと笑った。
ニヤッでもなく、ニコッでもなく、ニヘッて何だ？
「お兄さん、イケメンだねぇ！　一緒に飲もうよ」
……これはナンパか？　ナンパ自体はしょっちゅうあるが、こん

なのは初めてだ。ふん、面白ぇ。
俺は首肯し、女の隣に移動して、ロックグラスで乾杯した。女はそれすらも一息で明け、更にワイルドターキーはもういいからストリチヤナをくれと言い始めた。
マスターは開いた口が塞がらねぇって体だが、女の様子だとかなり強そうだから、心配いらねぇだろ。俺がそう言ってやると、マスターは安心したのか、冷えたショットグラスにストリチヤナ、それもクリスタルを注いだ。
乾杯したからと言って何かしゃべる訳でもなく、女はショットグラスの杯を重ねていくだけだ。俺も特に話がしたいってこともねぇ。お互いに酒を美味く飲めりゃいいだろう。
そう思っていたんだが、俺がテキーラを頼むと様相が一変した。
「あっ、テキィ〜ラァ！　あたしも飲むぅ！！」
女が素っ頓狂な声をあげた。ちょっと待て、お前今ウォッカを8杯飲んだだろうが！
ショットグラスを持ったままフリーズしてる俺の前で、マスターも蒼い顔をしている。
「お、お嬢さん、飲み過ぎだよ」
「むうぅ！　あたしおしゃけ強いの！　テキ〜ラくらい飲めるもん」
青褪めて止めるマスターなんか、見ちゃいねぇ。大体、テキーラを舌巻いて発音するくらい酔っ払ってる奴がこれ飲んだら、間違いなくぶっ倒れるぞ。つか、これ以上クリスタルを飲ませても結果は同じだが。
不覚にも呆気に取られた俺の前で、女はとんでもないことを言い放った。
「むうぅ、じゃあ飲み比べ！　どっちが先に酔い潰れるか、競争する！　あたしのお酒の強しゃをしょーめーしてあげるぅ」
なにが、じゃあ飲み比べだ？　酔っ払いの思考は訳分からん。
女はオロオロしているマスターを睨み付け、「テキ〜ラ、出す！」と指示した。いよいよ顔面蒼白となったマスターは、俺に助けを求

めてきた。
「東海林さん、何とかして下さい」
何とかしろって言われてもな。子供じゃねぇんだから、ぶっ倒れようがこいつの自己責任ってやつだろう。
そう喉まで出掛かったが、マスターがあんまりにも気の毒なんで、助け舟を出してやった。
「面白ぇじゃねぇか。出してやれよ」
「で、ですが」
「外で里久が待ってる。俺が帰る時に、ついでにこいつも送ってやるよ」
「東海林さんがそうおっしゃるなら」
まだ封を開けていないテキーラのボトルをマスターが出すと、女はすかさずそれを奪い、ウォッカを飲み干した自分のショットグラスに注いだ。
なみなみと注がれたグラスを俺に向けて掲げ、「テキ～ラァ！」と叫んで一気に飲み干した。酔っ払いってのは、言動がメチャクチャだな。
「うぃっく、飲み比べぇ！」
要するに、俺も飲めということか。飲まずにカウンターに置いておいたショットグラスを掲げて、一息であける。
「むうう……出来る！　あたしもぉ」
女が覚束ない手でボトルを傾けるから、それを取り上げて俺がショットグラスに注いでやった。嬉しそうな顔しやがって、酔っ払っていても可愛いじゃねぇか。
女は二杯目も飲み干し、見ていた俺を睨み付けて来たんで、俺のグラスにも注いで見せ付けるように飲み干した。
更にグラスを掲げるんで、三杯目を注いでやると、勢いで一気に飲み干す。そろそろヤバいなと思っていると、なにやら聞き取れねぇ声でブツブツ言い始めた。
次で潰れるかと思ったが、意外にもって、五杯目を空けた。

「……」
ようやく黙ったか。思っていたより長かったな。店が閉まるまであと３０分。つまり里久が迎えに来るのもそのくらいだ。
俺はようやく静かに酒を飲むことが出来た。マスターは異常なほどに恐縮している。
「東海林さん、今日はすみませんでした」
「ま、こんな女には滅多に会わねぇからな、面白かったぜ」
「今日のお代はいいですから」
俺に迷惑を掛けたと思ってるんだろう。確かに迷惑だったが、それとこれとは話が違う。しばらく払う払わねぇで押し問答したが、女の飲み代は払わなきゃならねぇだろう、と俺がゴリ押しして３７０００円押し付けた。俺の分はいらないなんてぬかすから、受け取らなきゃここを潰すと脅して受け取らせた。
俺にとっちゃ大した金額じゃねぇし、なかなか面白ぇ体験だったぜ。

閉店時間を見計らって店に入ってきた里久は、女を肩に担いでる俺を見て首を傾げた。こいつは誰にでも無愛想で、俺に対しても滅多に笑うことがねぇが、さすがに困惑した顔をしているな。
「隆広様。どうしたんですか？　この女」
「就職難による自棄酒。これから家を吐かせるから、そこまで行け」
「……分かりました」
腹ん中じゃどう思ってんのか知らねぇが、里久は他の秘書と違って素直に俺に従う。
黒のアウディがこいつの愛用車だ。そこの後部座席に女を沈めて、俺はその隣に乗り込む。半分眠りそうなのを、無理矢理起こして家がどこか質した。俺にしては優しくやった方だが、女は鞄を抱きかかえるようにして俺を睨み付けやがった。

「知らないぃ男に、住所なんてぇ個人情報、教えて、たまるかっ」
俺が誰か知らねぇんだから仕方ねぇとしても、こんな受け答えされたのは、生まれて初めてだ。既に車は発進していたからよかったが、ハンドル握ってなかったら里久に半殺しにされてるぞ、こいつ。つか、あれだけ飲んでここまではっきり言えりゃ、女でなくても大したもんだぜ。
里久は、前方を見据えながらも、女に対して殺気立っている。まぁ、俺も普通にこんな答え方されたら、それなりの報復を考えるが、この女に対しては何故かそんな気は起きなかった。
「隆広様、車を停めていいですか。その女、ここで捨てます」
「停めるなよ、横浜に向かえ」
「なっ！？　こんな無礼な女を、あのホテルに連れて行くんですか！？」
「あそこなら、何か起きても対処出来るからな」
何たってオーナーは俺だ。スウィートルームを一部屋、常時確保しているから深夜でも連れて行ける。
「何かってなんです？」
「何かだよ。いいから行けって。お？」
眠っていたと思った女が、突然体を起こした。ゲロでも吐かれたら里久をなだめるのが大変だな、なんて考えていたら予想は外れた。
女は据わった目で周囲を確認してから俺に顔を向け、またあの妙な笑いを見せた。さすがにドン引きしていると、スカートをまくって俺の膝の上をまたいだ。
「抱いて」
「その女、ブチ殺します！」
酔っ払いの行動は、本当に予測不可能だな。里久はマジギレだ。綺麗な顔して武闘派なんだよな。
「里久、車を停めたらクビにするぞ。いいから横浜に向かえ。３０分もすりゃ着くだろ」
「ですが！」

なんでお前が泣きそうなんだよ。貞操の危機は俺の方だぞ。つか、さすがにズボンのベルトに手を掛けられたら、笑っちゃらんねぇな。

酔っ払ってるお陰で、ベルトを外そうとする女の手はかなり覚束ない。俺は女の顔を両手で包んで、酒臭い赤い唇をキスで塞いでやった。

そういや前の女と別れてから、キスもセックスもしちゃいなかった。そう思うとヤりたくなった。女のブラウスのボタンを外し、中に手を入れて直接肌に触れる。キメが細かくて滑りのいい肌だな。これはホテルに着いてから楽しめそうだ。

2

布団にくるまって眠っていると、やかましい音が鳴り響いた。うるせぇ……アラームか？　……じゃねぇな、電話……でもねぇ。……エントランスのチャイムか。

だが、眠すぎて目が開かねぇ。秘書の連中なら鍵は持っている。マンションのオートロックも解除出来ねぇ奴なんざ、はなから門前払いだ。

鳴り響くチャイムを無視していると、しばらくして止んだ。バカみてぇに鳴らす奴は、俺の知ってる人間じゃ一人しかいねぇ。今何時だ？

ベッド脇のサイドボードに腕を伸ばし、時計を取った。っつっても、まだ目が開かねぇな。何とか薄目を開け、時刻を確認する。

ぼやける視界に見える針が差しているのは、５時！？　あいつめ、減俸だ！

とりあえず体だけは起き上がれたが、目はまだ開かねぇ。思いっきり欠伸をしていると、ドアがノックされた。

「ああ！？」

これが「入れ」の同義語と、俺の秘書なら分かるはずだ。

「おはようございます、起きておられましたか」

慇懃無礼に入ってきたのは俺の秘書の一人、野添洋行だ。どう見ても俺には『ひろゆき』としか読めねぇが、『ようこう』が正しい読み方だそうだ。こんな読みにくい名前を付けた親の顔を見てみてぇぜ。

「お前のチャイムが煩くて起きた。朝５時に主人を叩き起こしておいて、よく笑顔で来られるな」

「お忘れですか？」

「なにをだ」

「今日は朝７時に、お祖父様に呼び出されているじゃないですか」

「……ああ」
忘れてたぜ。昨日、じゃねぇ一昨日仕事が明ける直前、爺さんから連絡が入ったんだ。最初は昨日と言われたが、丸一日オフを朝から潰されちゃたまんねぇ。
昨日か……一日で色んなことがあったな。例えて言えば、天国と地獄……ちっ、笑えねぇ。
「ったく、年寄りは朝早くていけねぇな」
「お祖父様としては、仕事中や仕事明けに呼び出すよりは、気を利かせているつもりのようですよ」
「だからって7時ってのは早すぎだ。どうせ朝飯食ってけとか言うんだろ」
ようやく目が開いてきた。グレーを基調にしたシンプルな壁紙に、必要最低限の家具その他、キングサイズのダブルベッド。昨日咲弥子にはああ言ったが、俺の部屋もホテルの部屋と似たようなもんだな。
何にしても眠い！　盛大な欠伸が出たぜ。
「隆広様」
なんだ？　その呆れ顔は。剣呑に見上げてやると、今度は溜め息をついてきた。
「その顔、女性の前では絶対にしちゃダメですよ」
「欠伸を止められるか」
「せめて手で口を覆うくらいのことは、した方がいいと思いますね。顎が外れるんじゃないかと思うくらい大口開けて、酷いアホ面でしたから」
「それくらい許さねぇ女なんか、こっちから願い下げだ」
「まぁ、ここで大人しく「そうだな」なんて言われたら、槍が降ってくるでしょうから、そういうことにしておきましょう。朝食の準備、しますか？」
「ああ、頼む」
俺の秘書たちは、揃いも揃って一言多い。つか口が悪い。何も言

わずに従うのは、里久くらいだ。いや、あいつもたまに俺の命令を無視するか。俺が畏まられることを良しとしなかったからだが、こうして実践されると、いちいち腹が立つな。今更、止めさせようとも思わねぇが。

洋行が立ち去る気配がないんで、怪訝な目を向けると、困惑顔で訊いてきた。

「俺から振っておいて何ですが、朝食、本当に食べて行かれるんですか？」

「当然だろ」

「では、軽めに作りますね」

「ガッツリ作れ。俺は風呂に入る」

「……分かりました」

洋行は、納得しがたいという顔をしている。はっきり教えたことはねぇが、実家を出たのはそれなりに理由があるんだ。嫌味でお前の仕事を増やした訳じゃねぇんだぜ。

布団をはだけてベッドを降りた俺の背後から、「ちょ、ちょ、ちょっ」とかいう奇妙な声がした。振り向くと、この世の終わりのような顔をしてやがる。

「なんだよ、けったいな顔しやがって」

「あのですね、前から言ってますが」

頭痛でもするのか、痛みをこらえるように、こめかみを押さえた。

「なんだ、早く言え」

「ベッドから降りたらスッポンポンて、絶っっ対女性の前でやってはダメですよ！！」

そんなこと今更だろうが。大体、女と寝る時はセックスするんだから、真っ裸なのは当然だろう。昨日もやった。そう言ってやったら、胡乱げな目線をくれやがった。

「まさか、相手はあの酔っ払い女性ですか？　マスターの店で出会ったという」

「耳が早ぇな、里久か」

「先に言っておきますが、彼が自分から話した訳ではありませんよ」
「分かってる。春樹が吐かせたんだろ」
「正解です。ですから、里久を責めないでやって下さい」
「そこまでケツの穴は小さくねぇよ。朝飯、頼むぜ」
「分かりました」
これ以上こいつと話していても埒が明かねぇ。俺はとっとと寝室を出てバスルームに向かった。

都心の一等地に建つ４０階建てのマンション、その最上階が俺の自宅だ。
どの階も１フロアに１部屋で６ＬＤＫの贅沢な造り。一人暮らしなら２ＬＤＫで十分と言ったのに、俺の嗜好は無視され、秘書どもが勝手にここと決めた。あいつらが納得するセキュリティーと立地に叶ったのが、ここしかなかったらしい。
俺の意思を無視とはいい度胸だが、俺に何かあればあいつらが責任を取らされるんだ、仕方ねぇか。デートの後は大抵ホテルでセックスするから、女を通わせることもねぇ。そういや、女を連れてきたことは一度もねぇな。
リビングの窓から街を一望した。せせこましくビルと家屋が建ち並んで、空間といったら空しかねぇ。こうして見ると緑が少ねぇってのが、よく分かるな。
俺がここに帰らねぇ時も、洋行はせっせと来て掃除やら片付けをやっている。人が住まないと家中が傷むとか言って、たまに泊まってもいくらしい。そのせいか、意外に生活感はある。
バスルームは、湯船のある風呂場とシャワールームに別れている。風呂は２４時間循環型なんで、いつでも入れるのがいい。洋行に言わせると贅沢な造りらしいが、実家もこんなもんだから、俺には普通だ。

熱い湯を頭から被っていると、毎朝お馴染みの下腹部が目に入った。回復するのに今日いっぱい掛かるかと思ったが、思ったより早かったな。

ったく、昨日のアレはホントに地獄だったぜ。

スゲェ女だったな、藤野咲弥子。自分から名乗る前に、俺に名乗らせやがった。

マスターの店じゃ、ワイルドターキーとストリチヤナを浴びるようにカパカパ飲んで、挙げ句の果てにテキーラまで。あれで二日酔いしねぇってのは、殆どバケモンだな。俺も二日酔いをしたことがねぇから身も蓋もねぇが、少なくとも女であそこまで飲める奴は初めてだ。

迎えに来た里久との相性は最悪だな。同属嫌悪ってやつかもしれねぇ。何となくだが咲弥子は、里久と同じ匂いを感じる。欲求不満なのは全然似てねぇけど。里久が女を作ったって話は聞いたことねぇ。暇があればジムで体を鍛え、道場で実戦技を磨いてるからな。真っ当な男のくせに、どうしてあんなにストイックに生きられるのか、不思議だぜ。

ああくそっ、思い出しちまった。ベッドの上で散々泣かせた後、爆睡しやがった咲弥子の寝顔。あんな幸せそうな顔で寝られたら、突っ込むなんて出来ねぇわな。あいつが自分からああ言ったってことは、寝てる間にヤられた経験があるってことだよな。意外とろくでもねぇ男と付き合ってきたんだな。

それにしても、相手がいるのに自分で処理するなんざ、人生初の屈辱だったぜ。

……いや、人生初の屈辱はもう一つあったな。多分この先も一生ねぇだろう。股間を蹴り上げられるなんてことは。

熱めのシャワーを浴びてんのに、今思い出しても寒気がする。マジで三途の川を渡り掛けただろ、ありゃ。真面目に花畑が見えたし。自業自得と言われれば、返す言葉もねぇが。

今まで付き合ってきた女は、全部向こうからのアプローチだった。

独り身の時も俺から付き合えと言ったことはなかった。それなのに「俺と付き合えば、就職先を斡旋してやる」なんてセリフが、よく出てきたもんだぜ。

この俺が酔っ払い女に一目惚れ？

まさか、そんなはずはねぇ。あいつに惚れたと言うなら、それは『椿』へ行くのにホステスの顔になったのを見た時だ。

化けるだろうと予想していたが、あそこまでとは思わなかった。普通の化粧でも、つか、スッピンでも十分美人だったのが、化粧の仕方で女の顔の印象ってな、随分変わるもんだな。

あの陶器のような肌、思い出しても震えが来るほどだ。

起き抜けに一発ヤッた時といい、車ん中で弄り倒した時といい、男をそそるエロい表情をしていたが、あいつのアパートに押し掛けて泣かせた時のあの顔は、まさに垂涎ものだった。

む、こんな程度で欲情するとは情けねぇ。まぁ、ここまで回復したのは、よかったと言えるか。

ったく、この俺が股間蹴り上げられたなんて、春樹と冬樹に知れたら絶対に大笑いされる。何としても極秘にしとかねぇと。里久はほぼ俺に従順だし、洋行は常識人だからいいとして、あの二人は主人を主人とも思わねぇからな。爺さん相手でも怯まねぇのが気に入って使ってるが、やっぱあそこまで徹底されると腹が立つ。

……やめだやめ！

咲弥子ならともかく、朝っぱらからあの二人の顔を思い出すなんて、縁起悪ぃ。腹立ち紛れにホイップクリームなみにボディソープを泡立て、全身をくまなく洗った。

軽く風呂に入って体を温め、最後にあまり濃くない髭を当たってバスルームを出た。

ウォーキングクローゼットがある寝室へ戻っていると、洋行の作

る朝食の匂いが漂ってきた。あいつめ、ガッツリ作れっつったのに、パンなんか焼きやがって。作っちまったもんは仕方ねぇ。話は後で着けることにして、さっさと着替えることにした。
　爺さんは服装にこだわる性格じゃないんで、特に堅苦しいスーツを着ていく必要はない。どうせオフィスに行けば着替えを余儀なくされる。それまではラフなスーツでいよう。
　髪をオールバックにセットしてダイニングルームに向かうと、ちまっとした朝食が用意されていた。
「おい洋行！　ガッツリ作れっつったろ」
　それが玉子とハムのホットサンド一つに、ヨーグルトとはなんだ！？
「ですが、ご実家で絶対に朝食が出ますよ？」
「だから、米の飯を食わせろよ」
「それよりも、ご実家で素直に召し上がってくるのが、よろしいんじゃないかと」
「……」
　ちっ、正論過ぎて返す言葉がねぇな。
「お祖父様への反抗心は分かりますが、意地を張らずに甘えてくればいいじゃないですか」
「爺さんは関係ねぇよ」
　理由を話してねぇと、こういう誤解を受けることになるのは、日頃の俺の言動のせいか。ま、今更変えようとは思わねぇが。
「忘れていましたが、冬樹から伝言があります。今朝ご実家で朝食を作られるのは、真砂子さんだそうですよ」
「あいつはどっからそんな情報を取ってくるんだ？」
　冬樹が住んでるのは、実家から遠く離れたオフィス近くのマンションだ。大体、東海林本家の、しかも誰がメシを作るかなんて究極の内部情報だぞ。そんなもんが筒抜けなんつったら、やば過ぎるだろ。
「俺も訊いてみましたが、ご実家のセキュリティに侵入したとか。

昨夜お祖父様が真砂子さんに、隆広様が今朝来ることを伝えていらしたそうです」
全く、呆れて物も言えねぇな。あいつの希望通り、3億も掛けてスパコン入れてやったのに、実家なんかハッキングしてどうすんだよ。
「ですから、朝食は召し上がってきた方がいいと、冬樹が言っていましたよ。彼なりの隆広様への気遣いじゃないですか？」
「……仕方ねぇな」
「では、コーヒーを淹れてきますね」
俺が食卓に着くのを見届けてから、洋行はキッチンに引っ込んだ。

3

物足りねぇ朝メシを食って、爺さんとの約束の３０分前に里久が迎えに来た。

っつっても、こいつのアウディはここの駐車場に停めてある。こいつ自身は、近所の安アパートで一人暮らしだ。俺の護衛も兼ねてるんだし、部屋も余ってんだからここに住みゃいいのに、頑なに固辞してんだよな。

いつも無愛想な奴だが、今日の里久は更に機嫌が悪い。いや、昨日『椿』へ行った時からこうだったな。咲弥子のことを吐かせるのに、春樹の奴、何をしたんだか。洋行は知ってるだろうが、口を割らなかったな。口止めされてるのか、俺が知ると里久が気の毒になるようなことなのか。

不気味なほど静かな車での移動を終えて、俺はデッカイ屋敷の前に立った。屋敷っつうか、館だな。ここ東京じゃねぇだろってツッコミたくなるぞ。東京のど真ん中だが。

明治初期に建てられた洋館は３階建て。見た目は古いが、代が変わるごとに当主の趣向でリフォームしてるから、内装は意外に現代的だ。爺さんが新しい物好きってのもあって、かなり前からオール電化にしてる。ちなみに自家発電機も設置済みだから、停電が起きても問題ねぇ。ホントに抜け目ねぇな、あの爺さんは。

２年前に死んだ親父は、結局ここを自分の好きなように改装することは出来なかったな。構想はあったみてぇだが。

今は当主が俺なんで、一応俺の持ち物ってことになってるが、とてもここに住もうなんて気にならねぇぜ。爺さんは健在だし、一番上の香緒里姉貴はとっくに結婚してるのに旦那と一緒に居座っている。爺さんも孫娘には甘いっつうか、別居よりはずっといいなんて言いやがる。だが、一番うるせぇのは妹の多香子だ。

朝っぱらからあのマシンガントークを聞かされるのか。げっそり

した気分で玄関のドアのノックを叩く。平成のご時世にノックたぁ前時代的だが、エントランスにはいつも執事が待機してるんでノックで十分だ。

「隆広様、おはようございます。お待ちして申しておりました」

バカ丁寧に頭を下げるのは、この館の執事長の真嶋。爺さんより5つ年上で、髪も髭も見事に白い。もう十分に老境なのに、ここの若いメイドたちに人気があるのは、禿げなかったせいだけじゃねぇな。

「真嶋翁、元気そうで何よりだな」

「恐れ入ります。大旦那様はテラスでお待ちになっておられます」

今日は天気がいい。もう少し時季が進むと、とてもそんな陽気じゃなくなるが、秋晴れで日当たりのいい庭なら、今日は日向ぼっこも出来るだろう。

一応当主の俺が相手だからか、真嶋翁が先導する。歩く足元はまだまだ揺ぎないし、背筋も伸びている。少なくとも爺さんが健在な内は、館内のことは真嶋翁に任せておいて大丈夫だろう。

「母さんは元気か？」

「はい、旦那様が亡くなられてから、少々塞ぎこんでおられましたが、最近は学生時代のご友人たちと出掛けられることが多くなり、気力が戻られたご様子です。一週間ほど前から、大奥様とご一緒にヨーロッパ旅行に出掛けられました」

「そうか、ならよかった」

親父が死んで、一番堪えていたのは母さんだったからな。元気に留守にしてるなら、それでいい。

真嶋翁に続いて庭に出た。何度も言うが、東京のど真ん中だっつうのに、陽射しを遮るものがねぇ庭ってのは、贅沢だよな。爺さんは、テラスにしつらえたテーブルセットの椅子に座って新聞を読んでいた。

去年までは俺がどこへ行くにも、爺さんがべったりくっ付いて来ていた。自分が後見だってことをアピールするためだろう。今じゃ、

こうして実家に引っ込んでいることが多いが。
毎朝各新聞を読むのは、昔からの習慣だと言ってたな。でかい記事よりは、隅っこにある小さい記事を中心に読むんだとか。俺らくらいの立場になると、デカイ記事になるような事件は自然と耳に入ってくる。つか、耳に入れようとする連中が多いんだよな。
俺の場合は冬樹が事前に事件をジャンル分けしてまとめておくから、それに目を通せばいいだけだ。持つべきは、信頼出来るサポートだな。あいつはちとオタクだが。
「大旦那様、隆広様がお見えになりました」
俺の時よりも更に深々と頭を垂れる。この差はどうしようもねぇか。まぁ、俺に対して真嶋翁の頭が、爺さん程垂れるのを見せられるのは勘弁してほしいぜ。今でも十分、面倒臭ぇ立場にいるからな。
爺さんは老眼鏡を外してから、読んでいた新聞を丁寧にたたんでテーブルに置いた。几帳面なのは相変わらずか。着物に羽織っつうのが似合うのも、この歳ならではだな。髪も髭も、かなり白いものが混じってきた。髪の量は同年代の連中が羨むくらい豊かだから、年齢よりもかなり若く見える。
それにしても、今朝は随分機嫌がいいな。鼻唄でもしそうなくらい春爛漫な雰囲気だぞ。
「来たか、隆広」
「おはようございます、爺様」
「うむ、帰ってくるのは久しぶりだろう。ここはもうお前のものだ。つまらん意地など張っとらんで、素直に戻ってきてはどうだ？」
「意地で一人暮らしをしている訳ではありませんから。もどりたくなったら、自分から帰ります。そういうお話ならもう用は済んだので、行きますよ」
軽く頭を下げて踵を返したところで、予想通り声が掛かった。ここは俺も素直に振り返って、爺さんを見下ろす。
「待て待て。全く、そんな性急では女にモテんぞ」
「爺様に心配される程、苦労はしていません。話というのは、そっ

ちのことでしょう？」
「うむ、読みがいいのは話が早くて助かる。真嶋とお前以外はくどくど説明しなきゃいかん」
「それで今回は、どこから来た話です？」
どうせ今日の話ってのは、見合いかなんかだろう。俺が女と付き合っている間も、いい話が舞い込んで来たり、爺さんが「これは」と思った女を見付けて来たり、色々あった。その度に「今付き合ってる女がいるから」と断っていたが、あいにく今の俺には女がいねぇ。それを知ってる爺さんにとっては、ベストタイミングってやつだ。昨日までは。
「うむ、高嶺建設の会長からだ。孫娘が三月に大学を卒業するそうでな、下手な虫が付く前に結婚相手を決めてしまいたいそうだ。だが本人の意見は尊重したい。そこで何人か男の写真とプロフィールを見せたところ、即断でお前に決めたらしい」
高嶺建設っつったら、業界きっての最大手だ。グループ内にも建設会社は抱えているが、あいにくと第3位に甘んじている。俺はそれでも全然気にしちゃいねぇが、何でもトップが好きな爺さんとしちゃ渡りに船だろう。この話なら、俺に女がいたとしても強引に話を進めるだろうな。
「このお嬢さんだ」
そう言って渡されたのは、成人式で撮ったものらしい振袖姿の写真だった。無駄に豪華な装飾をあしらった台紙で、開くと三方向からの立ち姿の写真がはまっていた。
「美人ですね」
「そうだろう。お前の好みに合うと思わんか？」
嬉しそうだな、爺さん。この話を進めたいってオーラがバンバン出てるぞ。
確かに写真の女は、正統派美人って部類の顔だ。今までに来た見合い話の中では、群を抜いて美形だな。日本人離れした顔立ちに、くっきりした二重瞼の大きな眼。結い上げた髪がかなり薄い茶色な

のは地毛だろう。今の高嶺社長夫人はハーフだと聞いたことがある。この自信のみなぎった目を見れば、自分の美しさと家柄の良さを十分に理解しているのが分かる。爺さんの言う通り、俺好みの女であることは間違いねぇ。

だが、こんなに好みの女の写真を見せられても、咲弥子がほしい欲望は薄れもしなかった。『小夜』になった時の美しさは、この写真の女の比じゃなかったぜ。加えて、俺を知っても変わらねぇあの無礼な態度。このお嬢様には間違っても備わっちゃいねぇだろう。

「確かにいいお話ですが、俺にはもう決めている女性がいますので」

「なに！？　聞いとらんぞ！」

そりゃそうだよな。何しろ一昨日出会ったんだから。あんなにも欲しいと思った女は、俺も初めてだぜ。

「高嶺会長がこのお嬢さんの意思を尊重しているのなら、爺様も俺の意思を尊重してくれませんか？」

「……どういう娘だ？」

「綺麗な女性ですよ。自分の意見をはっきりと持ち、俺に対しても一歩も引きません」

多少美化しちゃいるが、直人に聞いても同じ様な言葉を並べるだろう。

「素性はどうなんだ？」

爺さんは諦め切れねぇって顔だな。そこを持ち出されたら、咲弥子に勝てる見込みはねぇだろう。あいつの住み家には、お嬢様って育ちの欠片も見られなかった。

「家柄で結婚相手を決めるような真似は、したくありません」

「……」

爺さん、脳の血管ブチ切れなきゃいいんだがな。肘掛けから腕が持ち上がって、わなわな震えてるぞ。

「わしがこの話を進めたいのを、分かっていて言っているのか？」

「もちろんです。爺様の顔を見た時から、満開の桜みたいなオーラを感じましたよ」

「わしが反対したらどうする？」
「爺様は反対しません」
躊躇することなく返した俺を、爺さんは不思議そうな目で見上げた。こうして見ると、随分と小さい存在になったもんだな。
「なぜ、そう言い切るのだ？」
「これまでの爺様の主義主張に反するからです。添い遂げる相手は、自分が心から望んだ者にしなければ、不幸が待っているだけだ。俺が望むのは、このお嬢さんじゃありません」
「お前の好みに合うお嬢さんだぞ？」
「今は違うんです」
ビジネスでしか使わねぇ極上の笑みを見せて、俺は話題を打ち切った。爺さんは疲れたのか、盛大に息を吐いて椅子にもたれ掛かる。結構な時間、わなないていたからな。
「まったく、本当に融通が利かんな、お前は。わしの望みを叶えようとは、思わんのか？」
「爺様の望みは、俺が会長を継いだことで既に叶えていますよ」
やりたくもない仕事をこうしてやってるんだ。文句を言われる筋合いはねぇ。爺さんは諦めたように肩を落とした。
「昨日の夕方、坂元水産の社長が注進にきた」
「へぇ？」
坂元水産？　ああ、昨日のおっさんか。何かやるだろうと思っちゃいたが、爺さんに告げ口たぁ情けねぇ。
「昨日の朝は『椿』のホステスと一緒だったそうだな。まさかと思うが、お前の言う結婚したい相手というのは、そのホステスか？」
結婚はまだ考えてねぇが、そこは訂正しねぇ方がいいだろうな。ここは誤解してもらっておいた方がよさそうだ。
「そうですよ」
「……お前のことだから、反対しても押し切るのだろうな」
「まぁ、そうですね。話が早くて助かります」
爺さんの揚げ足を取ってやると、益々肩を落として溜め息が深く

なる。これじゃ俺が虐めてるみてぇじゃねぇか。そんなつもりはないんだがなぁ。
「お前が一人で高級クラブ『椿』に行ったと、昨夜から今朝にかけて盛大に噂が流れたぞ」
「へぇ、そりゃ相当尾ひれがついたでしょう」
「冗談を言っている場合か。これは誰かが故意に流したものだぞ」
「でしょうね」
流したのも故意なら、爺さんの耳に入れたのも故意だろう。噂の出所はあのママだな。ホステスのいるクラブに俺が一人で行くなんて、今までやったことねぇからな。昨夜『椿』にいた客は、仕事で見たことある連中ばっかりだった。あいつらが証人みてぇなもんだ。
咲弥子の客として行く前に、冬樹に一通り調べさせた。『椿』の顧客はそうそうたる顔ぶれだ。名だたる一流企業・組織の重役ばっか、爺さんの名前まであったぞ。あの顧客リストを見れば、あのママがどれだけ強かか分かるぜ。一緒に見た春樹も、あの手広さには呆れてたな。
それに直人が俺の秘書に推した女は、咲弥子が初めてだった。あいつが有能と太鼓判を押したのに、それで就職が決まらねぇってのもきな臭ぇ話だ。
「あそこのママはやり手だ。油断すると足元をすくわれるぞ」
「承知しています。俺に喧嘩を売る気なら、それ相応の報復はしますのでご心配なく」
心配性な爺さんを安心させてやろうとニッコリ笑ってやったのに、それを見た爺さんはうすら寒そうに首をすくめた。
「まぁ、ほどほどにな。今朝は真砂」
「真砂子さんが作った朝食でしょう。食べて行きますよ」
今度は口をパカーッと開けて俺を見上げた。呆気に取られた爺さんを眺めるのは、ちょっと気分がいい。別に虐めてるわけじゃねぇが。さすがに俺の秘書がここのセキュリティにハッキングしたなんて、思い付きもしないだろうな。

真砂子さんてのは、この館に古くから仕えている女中頭だ。親父を幼い頃から面倒を見ていて、その子供の俺たちも随分世話になった。5年前に引退してそろそろ古希を迎えるが、体も頭もまだまだ元気だ。

若い頃からずっと住み込みだった真砂子さんには、他に住むところがない。狭くてもいいという真砂子さんの意思は置いておいて、爺さんは嫁いで行った二番目の姉貴、由香里姉さんの部屋を貸している。由香里姉さんも、真砂子さんならいいと言って喜んで使わせている。

あの真砂子さんを哀しませるのは、俺も気が重い。それが分かっているから、爺さんも高齢なのを承知で、朝食を作らせたんだろう。それを俺が知っていたとは、考えもしなかっただろうが。

4

真嶋翁の案内で爺さんの後についてダイニングルームに行くと、香緒里姉貴と旦那、それに妹の多香子がテーブルに着いていた。
「お祖父様、おはようございます」
三者三様で爺さんに挨拶すると、先ず姉貴の旦那が俺に挨拶してきた。姉貴と多香子は今気が付いたかのように、俺に顔を向ける。
「あら隆広、珍しいわね」
「お兄様！　お久し振りです！」
「今日は新作デザインのお披露目ガーデンパーティがあるんだから、雨を降らせないでよ」
「やだお姉様、知っていたらあたし撮影入れなかったのに！　あたしもパーティに行きたぁい！　サボっちゃおうかな」
「お仕事でしょ、ちゃんと行って来なさい。今度パーティがある時は、事前に教えてあげるから」
「絶対よ、お姉様！」
そこまで話して、ようやく多香子の口が閉じた。ただでさえこいつの声は甲高いってのに、更にけたたましく喚かれるとうるせぇ。
「隆広坊っちゃま」
多香子とは対照的な静々とした声。背後から掛けられたこの声は、忘れるはずもねぇ、真砂子さんだ。振り返ると、小さい真砂子さんがにこやかに微笑んでいた。
真っ白になった髪を上品に結い上げ、渋い仙斎茶に染めた紬の着物に、白い割烹着をかぶった昔からの出で立ちは懐かしい。
遥か昔は見上げていた真砂子さんも、今じゃ見下ろすのも首が疲れるほどだ。半世紀近くも歳が離れていると、真砂子さんにとっちゃ俺は死ぬまで「坊っちゃま」だろうな。……これを咲弥子が聞いたら、間違いなく大笑いでバカにするぞ。その光景が目の前に浮かぶ。今の内に改めさせておいた方がよさそうだ。

「その呼び方はやめてくれよ、真砂子さん。俺はもう３０だぜ」
「まぁ、そうでしたね。やんちゃで可愛かった坊っちゃまも、今では立派なご当主になられて。真砂子は嬉しゅうございます」
心底嬉しそうな顔で、目を潤わせている。ダメだ、言った傍からこれじゃ、一生言われ続けるんだろうな。仕方ねぇか、７０を過ぎた真砂子さんに無理強いは出来ねぇ。
「今朝は隆広坊っちゃまがいらっしゃると大旦那様からお伺いしまして、わたくしが腕に寄りを掛けてお作り致しました。お口に合いますかどうか」
「真砂子さんが作ったものが、不味いわけないだろ。久しぶりだから楽しみだぜ」
小さな肩を軽く叩いて、俺は空いてる席に向かった。以前は親父が、その前は爺さんが座っていた席が、今日の俺の座る場所だ。今までの席で構わねぇんだがな。何つうか、居心地悪いぞ。胸中で溜め息をついてそこに座る。
テーブルに並んでる真砂子さん作の朝食は、俺の好物ばかりだった。湯気の立つ白米にしじみの味噌汁、だし巻き玉子、納豆、焼き鮭、きんぴらごぼう、卵豆腐、梅干しに漬物。
朝メシはやっぱり和食だな。洋行も今朝は手抜きだったが、いつもはこんな献立で作る。好き嫌いはないが、家で食べるメシってのは和食がいい。
洋行がホットサンド一つしか食わせなかったから、さっきから腹が鳴りっ放しだ。けたたましくしゃべる多香子も、この時は静かに待っている。俺が合掌して箸を持ってから、ようやく食事が始まる。家長制度みてぇなのが、未だに根付いてる家なんだよな。堅っ苦しいことこの上ねぇぜ。
久しぶりの真砂子さんのメシは、格別に美味かった。毎日食って

た頃から美味かったが、たまに食うとなると感動もひとしおだな。
高校を卒業と同時に家を出たから、真砂子さんのメシを食うのは年に数回、実家に帰ってきた時だけだった。真砂子さんが引退してからは、今日が初めてだ。
洋行の料理も美味い。俺の味ツボをよく理解しているから、不味いものが出されたことはねぇが、真砂子さんとはやっぱ違うな。
しかし美味い真砂子さんの手料理も、多香子のマシンガントークを聞きながらってのは興ざめだぜ。ほとんど一方的なしゃべりに、付き合っているのは姉貴だ。こっちもエキサイトしてくると声が大きくなってくる。向かい合った二人はガンガンしゃべりながら、しっかりメシが減ってるのは久々に見ても不思議な現象だ。
姉貴の旦那はその隣りで黙々とメシを食っている。銀縁メガネに今時七三分けの、ダサいインテリ男だ。姉貴より三つ年上で４０歳にもなってねぇのに、国立大学の教授ってのは大したもんだが、なんでこんな男が姉貴と結婚なんてしたんだか。
弟の俺から見ても派手な顔立ちな姉貴の好みは、もっと軽くてチャラい男だったのに、なんでこんな生真面目な男と結婚する気になったんだ？　不思議だ。
由香里姉さんの方が、よっぽども納得出来るぜ。医療機器メーカー社長の息子と恋愛結婚して、早々に家を出て行った。姉さんが嫁いでから急激に業績が伸びたんで、政略結婚と噂されたが勿論ただのやっかみだ。本人たちはノーコメントを貫いている。
はぁ、由香里姉さんの穏やかな笑顔が懐かしい。全く、姉貴と多香子に姉さんを見習ってほしいぜ。
綺麗に食い終わった俺を見て、真砂子さんは安堵した表情で礼をし、奥に引っ込んでいった。
さて、朝メシが終われば、もう実家に用はねぇな。
「お兄様、待って。お願いがあるの」
外に待たせてある里久の元へ急ぐ俺の背中に、多香子の無駄に明るい声が掛かった。無視するともっと煩くなる。ちっ、しょうがね

ぇな。
「なんだ、俺はこれから仕事だぞ。お前だって撮影があるんだろ」
「あたしはお昼からだもの。そんなに時間は掛からないから」
今は大学を卒業し、高校生から始めたモデルの仕事を今も続けている。それなりに人気はあるらしいが、今年２５歳になったのに見た目も背丈も女子高生みたいな童顔で、ファッションモデルを出来るってのが俺にはよく理解出来ねぇ。
「あのね、明後日ガーレットの新作のバッグが発売されるんだけど、あたしが必ずゲット出来るように、お兄様の名前で予約してほしいの」
相変わらず、ブランド物が好きだな。俺もその話は知っている。それまでの伝統的なデザインを一新して、大胆なイメージチェンジを図っているって話だ。更に、発売日を直前まで公開しなかったために宣伝効果は抜群、予約の受付も日本時間の今日夕方からっつう徹底振り。暇なセレブの間じゃその話題でもちきりだ。
昨日咲弥子が『椿』に行く前にやったバッグは、そこの定番のものだ。咲弥子は目を丸くしていたな。大抵のホステスはブランドに目がないが、あいつは目的があるから慎ましく生活してるようだ。モデルの稼ぎをひたすら買い物につぎ込む、浪費癖が抜けねぇ多香子とは大違いだぜ。
「そんなの自分で予約しろよ」
「それがダメなの！　お兄様くらいネームバリューがないと、絶対にゲット出来ないの！」
「お前だって、その妹じゃねぇか」
別に俺でなくても、東海林の名前を出せば大抵の無理は利く。
多香子は黙っちまった。それまで廊下に響いていた高い声が、急に静まる。ああ、ここはこんなに静かだったんだよな。
「あたしじゃ確実には買えないのよ！　明後日は世界で２０個しか売り出されないの！　ちょープレミアなの！」
「んなこた知ってる」

「知ってるなら、予約くらいしてよ！　妹のあたしが可愛くないの！？」
ああ、うるせぇ。耳にキンキン響くぜ。お前を可愛いなんて思ったら、俺もおしまいだ。
「ああん、もう！　明後日にゲット出来なかったら意味ないの！　その日の夜、モデル仲間とパーティに行くの！　その時に持って行きたいの！！」
「で、自慢したいってのか？」
「悪い？」
むくれて言うことじゃねぇだろ。
「悪かねぇが、そんなにほしいなら、自分で予約でも何でもしろよ。じゃあな」
「待ってよ！　じゃあじゃあ、パリ本店にいる支配人かオーナーかデザイナーの、携帯番号教えて！」
ったく、たかがバッグに必死だな、多香子。俺の腕にひっ掴まって、コアラよろしくぶら下がってるぜ。
「そんなものホイホイ教えられるか！　俺の信用問題に関わる。知りたきゃ自分で調べろ」
「やだぁ、そんなの無理に決まってるでしょ！　お兄様クラスの人しか知らないんだから！　お願いだから教えてよぉ」
多香子が腰を落として俺の腕を引っ張った。なんか、覚えのある光景と感触だな。昨日俺のホテルで駄々をこねた咲弥子にそっくりだ。あいつの方がまだ可愛いかったが。
「多香子、我が儘を言うのはやめなさい。隆広が困っているでしょ」
「お姉様！　だってぇ」
ちょっと待て姉貴。誰が困ってるって？　急に出て来て勝手な誤解すんな！
「そんなにほしいなら、私が予約してあげるわよ。隆広ほどの人脈はないけど、私にもそれなりにコネはあるから」
「本当！？　お姉様！」

「ええ、だから隆広を離してあげなさい。仕事に行けないでしょ」
「わぁい！　お姉様大好き！　お兄様のイケズ！！」
お前にイケズと言われたって、痛くも痒くもねぇよ。ようやく解放されてホッとしたぜ。
多香子は姉貴に抱き付いて、頬にキスまでしている。されてる姉貴はくすぐったそうな顔をしながら、俺に目配せした。これで姉貴への貸しが一つ減ったか。
東海林の家のことは元々あんまり興味がなかった姉貴は、大学の経済学部に行きながら服飾の専門学校に通い、大学卒業と同時に自分で服を作ってネットで売り始めた。
センスはあったと思うが、最初は売り上げも人気も芳しくなかったな。それがネットでクチコミが広がるようになると、じわじわと人気が出始め、８年前には自分のブティックを持つまでになった。今じゃ全国に２０店舗を構える、一端のブランドに成長したな。
その店舗の出資者が俺だ。本店となった一号店から今まで、全部の店の資金を出してやってる。もちろん東海林グループとは関係ねぇ、俺のポケットマネーってやつだ。姉貴のブティックを持ちたいって夢を知った時は、俺はまだ大学を卒業したてだったが、横浜の例のリゾートホテルを買収して収入はあったし、あの頃から財産は使い切れねぇほどあったしな。
そういうわけで、姉貴は俺に借りがたくさんある。こういう精神的なことで、それを解消していこうってのが姉貴らしい。服を作るのに、結構金を使っているからな。
ホントに、多香子と一緒になった時のあのかしましささえなきゃ、姉貴は由香里姉さんと同じくらい、いい女なんだがなぁ。

5

姉貴のお陰で煩ぇ多香子から解放され、実家を出た時は9時を回っていた。
む、遅刻だな。まぁ俺が何時にオフィスに出ようと、咎める奴はいねぇが。
舘の駐車場で待っていた里久は、少し機嫌が直っていた。着ているシャツが汗ばんでいたから、庭で筋トレでもしてたんだろ。ホントにストイックを形にしたような奴だぜ。
実家からオフィスまでは約30分。昨日、咲弥子を連れてきたビルに入っていく。
里久を残して先にオフィスに上がった。会長室は直人の部屋より一つ上のフロアだ。自分の部屋に行く前に秘書室に顔を出す。これはいつもの日課で、大抵は冬樹と洋行もいるんだが、今日は春樹だけだった。
佐藤春樹はここの室長で、俺のスケジュール管理と外部との交渉を一手に引き受ける、有能だが一番口が悪い秘書だ。
「おす」
「ひく」
「……お前な、上司がきて挨拶したのに、んな返答はねぇだろが」
「おはようございます。ご隠居のお話は無事に済みましたか？」
しれっとして言い直しやがる。まぁ従順にされても、白けるだけだが。
「ああ、見合い話がきていた」
「高嶺建設の社長令嬢でしょう」
「ふん、冬樹か？」
「ええ、先方もご隠居も、非常に乗り気だったそうですね」
「ああ、爺さんから聞いた。アホらしくなるほど、春爛漫なオーラがばんばん出てたぜ」

面倒な説明をする必要がねぇってのは気分がいい。
「それで、お受けしたんですか？」
「なんでだ？」
「えっ、だってズバリ隆広様のドストライクなタイプの女性ですよ？」
そこまで驚くこたねぇだろうが。今まで付き合ってきた女は、確かにあんなんばっかりだったが。
「せっかく晴れているんですから、雷雨を降らせるような珍回答をしないで下さいよ」
「お前は……俺をなんだと思ってんだ」
「お付き合いしている女性がいなくて、お見合いの相手がタイプな女性だったら、受けてもいいとおっしゃっていたじゃないですか」
「そりゃ１０日も前の話じゃねぇか」
「もしや新しい女性が出来たんですか？　まさかと思いますけど、一昨日の夜マスターのバーで出会った、泥酔女ですか？」
なんだ、その胡散臭そうな顔は。里久の奴、どんな説明したんだよ。いくら気に入らねぇからって、脚色するような奴じゃねぇぞ。
「後で話す。お前らに用もあるしな」
「では、なるべく早く揃って会長室に伺います。ですがその前に」
改まってなんだ？　わざわざ咳払いなんかしやがって。
「高木社長から昨日、貴重な休憩時間を邪魔されたと、私に苦情が来ました。いつもはちゃんとアポイントメントを取るんですから、勝手なことをしないで下さいよ。しかも女連れだったとか。もう一度訊きますが、あの泥酔女ですか？」
「お前、里久の口を割らせるのに何をしたんだ？」
「隆広様も口を割りたくないようですね。まぁいいでしょう。簡単です、取っ捕まえて縛り付けて、笑い倒したんです」
「笑い倒す？」
「体中をくすぐってやったんですよ」
「……」

くすぐった？　あいつを？　里久がくすぐられて体をよじりながら大笑いする様を想像しようとしたが、これっぽっちもイメージ出来ねぇ。
「あいつが大笑いしたのか？」
「ええ、それはもう盛大に。洋行も冬樹も見てましたよ」
そりゃ里久のプライドは粉々に砕かれただろうな。気の毒に。
「しかしお前の細腕で、よく里久を捕まえられたな」
「彼にも弱点はありますからね、そこを突いてやれば簡単です。冬樹と洋行にも手伝わせましたから」
里久にも弱点があるとは興味深いが、訊いてもこいつは「教えてしまったら私の楽しみが半減しますので、お断りします」とのたまいやがった。温厚面のくせにサド気質な奴だ。
「まぁあんまり虐めてやるなよ。一番年下なんだから」
「虐めているつもりはありませんので、大変不本意なご意見ですが、一応頭の隅には置いておきます」
「ああ、そうしとけ」
ひらひら手を振って会長室に引っ込もうとしたところで、車を車庫に入れてきた里久が戻ってきた。ドアを開けた途端、春樹の姿を見てギロッと睨み付ける。すげぇ目が怖ぇぞ。一昨日の比じゃねぇな。俺には黙って頭を下げて、自分の席に着いてパソコンを起動させる。
秘書とはいっても、里久は俺の護衛と運転手が主な業務だから、デスクワークは俺宛のメール整理くらいだ。ただし届くメールの量は半端ねぇから、毎日数百通と格闘している。
春樹は里久の睨みをあっさりとスルーして、自分の席に着いた。この二人しか秘書室にいねぇと、いつもここの空気は一触即発の殺伐としたもんだ。和気藹々しろとは言わねぇが、よくもまぁこんな中で仕事が出来るもんだぜ。
「あ、隆広様。午後から面会がたて続けにありますから、書類の目通しは昼までにお願いしますよ」

春樹の声を背中に受けながら、手を振って秘書室を出た。
ドア一枚隔てた会長室に入ると、ちと気が滅入る。直人の社長室よりも更に広い俺の部屋、窓際にあるデスクの上には、有無を言わさず書類の山が積まれていた。コレ全部に目を通せってか。あと2時間で。
一日休んだだけでこの高さだ。長期休暇なんかした日にゃ、どんだけ積み上がるか。考えたくもねぇな。とはいえ、休まねぇなんて選択肢はいらねぇし。しょうがねぇよな、引き受けちまったもんは。
会長室には、いざという時に俺が逃げ込める、プライベートな小部屋がある。そこで仕事着に着替えた。

書類と格闘すること1時間……。なんてモノローグやってる場合じゃねぇ。ようやく半分まで、山を減らせたぜ。
グループ傘下全企業一週間分の、物流・人流・管理会計・営業利益に経常利益……要するに、各企業のあらゆる動きが表となり文書となって、俺の元に上がってくる。俺はそれを元に各企業の事業展開を考えていくわけだ。
基本は各企業のトップが指揮を執るが、そいつらにGOサインを出すのが俺だ。そいつらの人事を決めるのも俺。俺が出なきゃならねぇ会議がないのは助かるが、その分決裁しなきゃならねぇ書類やら文書やらがやってくる。全企業分が一挙に押し寄せるわけじゃねぇのが、せめてもの救いだな。各分野ごとに日がズレているのは、春樹のお陰だ。口は悪いが俺の業務が滞りないように差配する能力は、やっぱり優秀だぜ。
それに面会。各企業の代表取締役やら専務取締役やらが、何だかんだと理由を付けちゃ俺のところにやってくる。わざわざ面会に来る連中は、大抵二つに分かれている。
一つは俺派、つまり古い体質とおさらばしたい連中で、何かにつ

けて俺と組もうとする。もう一つは前の方がよかった派、親父や爺さんと同年代の連中が多い。おっさん連中から見れば俺はひよっこみてぇなもんだからな、何かにつけて俺を貶そうとする。どっちつかずって奴らもいるが、そういう奴らは両派を高みの見物よろしく眺めてるんで、放っといていい。いざとなれば俺に付くよう、当然裏工作済みだ。

俺に継がせることが、最悪グループを分裂させる事態になり兼ねねぇって、爺さんは考えなかったのかね。それとも自分が後見になれば、抑えられると考えたのか。俺が継いで一年間は、どこに行くにも誰に会うにも爺さんがベッタリ貼り付いていた。そこで俺がヘマをしなかったのに安心したのか、二年目に入ってからは爺さんも本家に引っ込んでいることが多くなった。

爺さんがいないことで身軽にはなったが、俺を舐めてる連中は此れ幸いとちょっかいを出してくるのが鬱陶しい。重役連中の人事権を持っているとはいえ、気に入らねぇからって無計画に辞めさせる訳にはいかねぇからな。俺と対立してもグループ全体から見ればマイナスにしかならねぇのに、それも分からずに噛み付くいい歳したオヤジ共がいるから面倒臭ぇ。

爺さん派の連中は、本家に度々面会に来てるらしい。あることないこと吹き込んでいるんだろうが、これまでのところ爺さんがそれに惑わされたってことはねぇな。だが今後は少し注意した方が良さそうだ。爺さんの様子だと、咲弥子の受けはあんまよくなさそうだしな。それこそ、妙なことを吹き込まれたら、信じまいかねねぇ。

ふん、俺も咲弥子のことは少し調べた方がいいか。

小休止に煙草に手を伸ばす。おっと、大事なことを忘れてたぜ。今の内に済ませておくか。

火の点いた煙草を咥え、携帯で俺の仕事着をオーダーメイドしている仕立て屋に連絡を入れた。

俺が『椿』に行ったことが知れ渡ってるなら、指名したのが小夜だってことも、同様だろう。俺が客に付いたってのに、小夜が安物

のドレスなんか着てたら、また何を言われるか知れたもんじゃねぇ。東海林の名前自体も低く見られちまうからな。
裾は歩きやすく見た目はゴージャスに。そんな注文を付けて至急で3着作らせることにした。向こうじゃ悲鳴を上げてたが、いつも通り仕事をしてくれりゃ、明日の夕方には出来上がるだろう。
咲弥子のアパートに直接届けさせてもいいが、あいつの存在はあまり広めねぇ方がいいな。届け先をいつも通りここに指定して携帯を切った。まぁ咲弥子が大人しく受け取るとは思わねぇが、着させる自信はある。
煙草を一本吸い終えたところで、ノックがした。
「入れ」
秘書室に繋がるドアから、春樹たちがやってきた。四人揃うのに、随分時間が掛かったな。冬樹が何か調べてたのか？
「隆広様、休憩中でしたか」
「おう、タイミングいいな」
片手を挙げながら、二本目に火を点ける。ヘビースモーカーと言われる俺だが、仕事の時は吸わねぇことにしてる。喫煙は俺の息抜きなんだ。それを理解しねぇ頭の固い奴もいるが。
「また煙草ですか？　そろそろ禁煙を考えたら如何です。隆広様が肺ガンでくたばろうと隆広様の勝手ですが、我々が副流煙でとばっちりを受けるのはご免ですよ」
「ふん、この中じゃ俺と長くいる時間はお前が一番だからな。お前が肺ガンにでもなったら、労災くらいは降りるようにしてやるよ」
「ガン保険にも入っていますよ。ところで、洋行と冬樹から報告があるそうです」
「なら先に聞こう」
「隆広様のご用は？」
「後からでいい」
どうせ咲弥子の履歴書を見せるだけだ。
件の二人が顔を見合わせ、洋行が軽く挙手をした。

「では先ず俺から。高木社長のことです」
「直人の？　なんかあったのか？」
「あったのか？　じゃないですよ。さっき高木社長に書類を届けに行ったのですが、穏やかにいつもの微笑み浮かべて、真っ黒いオーラを撒き散らしているんですから、心臓に悪いです。ヤスリで寿命を削られてるような感覚ですよ、あれは」
　あいつは性格悪いからな。機嫌が悪い時ほど愛想がいい。それを知ってる奴なら、近付きたくもねぇだろ。
「昨日、隆広様が急に押し掛けたせいです。あれ以来、高木社長の機嫌は超低空飛行だそうですよ。あれでは社員が可哀想です」
「セックスを中断されただけでかよ？　あいつも心が狭いな」
「というか、赤星秘書が五日前まで、その、女性のアレだったのと、予定が立て込んでデートする暇もなかったために、久しぶりに出来るチャンスを潰されたとか。夜は元々会食の予定があったそうで、あの昼休みが本当に貴重な機会だったらしいです」
　だからって何でお前が俺に恨めしげな視線を向けるんだよ！　ったく、しょうがねぇな。
「分かったよ、俺がなだめてやりゃいいんだな？」
「と、会った社員からことごとくお願いされました。赤星秘書も、さすがに手を焼いているようです」
「確か今夜は俺も予定があったな」
　誰かと会う約束があったはずだ。春樹を見ると、うなずいて口を開く。
「隆広様好みの広告代理店の女社長と会食が入っています」
「なんでそこを強調するんだ？」
「ご隠居の見合い話を断られたからです。あんなに隆広様好みのご令嬢なのに」
　爺さんならともかく、なんでお前からそんな残念そうに言われなきゃならねぇんだ。そんなに高嶺建設とパイプを作りてぇのかよ。
「しょうがねぇな、明日の夜、直人にアポ取っとけ。嫌がったら何

でもいいから脅していい」
「本当に何でもいいんですか？」
「常識的な範囲でだ」
「……分かりました」
返事をするまで随分間があったな。まぁ相手が直人なら、多少無理な脅しでもいいが。

6

「冬樹は？　報告ってななんだ」
「ちょっと信じらんないんすけどね」
釈然としねぇ表情で頭を掻く冬樹は、春樹とは似ても似つかねぇ顔だ。名字を含めてたった一字しか違わねぇのに、赤の他人だってんだから面白ぇよな。ＩＴオタクでビン底メガネのくせに、無駄に色男だし。以前、フラッとここに来た多香子が冬樹を見て「少女マンガのお約束」なんて呟いていたな。
「隆広様が高級クラブに一人で行って、小夜ってホステスを指名したって、ネットでスンゲー噂になってますよ。小夜の顔写真まで公開されてて、ちょっと異常な騒がれ方っすね」
「ふん、爺さんの耳にも入ってたぜ。あのママも、やることに抜け目がねぇな」
「それなんですが、本当に隆広様が一人で『椿』に行かれたんですか？」
「当たり前だ。何のために昨日冬樹に調べさせたと思ってんだよ」
「急に銀座の高級クラブなんか調べろっつうから、変だなと思ってたっすけど、まさか本当にねぇ」
冬樹も春樹も、不審気な目線を隠しもしねぇ。里久は黙ったまんま俺を睨み付けている。咲弥子を実際に見たのは、こいつだけだからな。
「その小夜というホステスの写真を見ましたが、正に隆広様のモロ好みの女性ですね。高嶺建設の社長令嬢になびかない訳です」
洋行がしきりに首肯しながら呟きやがる。ったく、どいつもこいつも。
「冬樹、その『椿』のことだがな、もっと詳しく調べろ。特に金の流れと社長の動向、ママの個人的外出先、ホステスたちの出入りもだ」

「はあ、それはいいっすけど、えらくご執心っすね。こんなにガツガツしてる隆広様って初めて見たっす」
なに！？　……んな風に見えるのか。咲弥子相手に？　なんか屈辱だな。
「そんなんじゃねぇよ。あそこのママは俺が好きになれねぇ人間だ。なんか裏でやってるぜ」
「調べてどうするのです？」
「それは『椿』の実態を見てからだ」
「分かりました。隆広様のご用件は？」
「先ずはこれを見ろ」
部屋に入った時に移しておいたデスクの引き出しから、咲弥子の履歴書を取り出し春樹に受け取らせた。
「拝見します」
四人が顔を付き合わせて書面を見る。途端に里久が嫌そうな表情をした。咲弥子とはとことん相性が悪いらしい。
「この女性がどうか？」
「お前、こいつのことをどう思う？」
「履歴書を見る限りでは、常識的な人間ですね。字も丁寧に書かれていますし、短いですが文章も整然としている。在学生でこれだけの資格を持っていて、更に自活しているなら文句はないでしょう。どこでも通用すると思いますよ」
「ところがそいつは、未だに内定の一つも決まってねぇんだ」
「どういうことです？　そもそも、何故我々にこれを見せるんですか？」
春樹が指先で履歴書を弾いた。その後ろで里久の視線がいよいよ怪しくなってくる。『椿』帰りの咲弥子を送った時に、それとなく話はしていたから、事情が理解出来たんだろ。
「昨日直人に会いに行ったのは、こいつの面接だよ。あいつの秘書に内定してた女が辞退しただろ。その穴埋めにと思ったんだが、直人は俺の秘書に推してきた」

「なるほど、就職難の泥酔女ですか。しかも我々の部下にと？」
「部下っつうより、要するに女の秘書を雇えってことだ」
「まぁ、履歴書を見る限りでは、使えそうですが？」
「それに、俺が東海林グループ会長と知っても、一切媚びねぇからな」
媚びねぇどころか、俺の股間蹴り上げてくれたし、俺が贈ってやったドレスは脅さねぇと着ねぇし。可愛いのはセックスん時だけっつう、素直じゃねぇ女だ。
媚びねぇと聞いて、3人とも感心した顔をしてやがる。お前らだって同じなんだよ。
「僕は嫌です！　こんな女！」
突然吐き捨てるように言ったのは、確認するまでもねぇ、里久だ。本当に珍しいな、こいつがこんなに嫌悪を示すのは。里久とは潜在的に敵意のある春樹も、面食らっている。
「里久？」
「第一こいつ『椿』のホステスじゃないですか！　なんで秘書なんかに雇うんですか！？」
「というと、もしやこの女性が小夜？」
「別人っすね」
「女性はメイクをしたら化けるとは言いますが、いやはや、見事な化け方ですね」
洋行も冬樹も、春樹ですら感心したような口振りだ。昨日はあまり気にしなかったが、確かに咲弥子が小夜になると俺好みの顔なのかもな。
「『椿』のホステスなら、金銭に困ることはないでしょう。この藤野咲弥子は、何故就職したがるんです？」
「本人曰く、人に堂々と言える職業に就きたいそうだ。ホステスは学費と生活費のためにやってるんだと」
「確かに実入りはいいっすけどね」
やけに実感こもってるな、冬樹。昨日の時点で、咲弥子の給料も

調べたのか？
「咲弥子はバイトだと言っていた。ママにも相当信頼を寄せているらしい。俺は咲弥子の就職が決まらねぇのは、『椿』が関係していると睨んでいる」
「ああ、なるほど。確かに『椿』での小夜の評判は上々、どころかナンバー1ホステスを食う勢いですからね。評判の割りにそれほど客が付いていないのも、バイトなら頷けます」
「他のバイトのホステスと比べると、給料は破格っすよ。あれなら生活に困ることなんてないんじゃないっすか？　あんな安アパートに住んでるのが不思議なくらいっすよ」
　読みの早い春樹と調べた冬樹は、納得したようだな。
「お前だって言ってたじゃねぇか。咲弥子ならどこでも通用するって」
「まぁ、そうですね。この履歴書で就職が決まらず、本人に何らかの決定的な落ち度がないと言うなら、外部からの横槍という可能性がないとは言い切れませんが」
　俺の感触としては、咲弥子に何か欠落しているとは思えねぇ。おそらくあのママが何か工作しているんだろう。あの顧客リストなら、日本の主だった企業を網羅しているはずだ。言い換えればそこを介して、どんなに小さな会社にも顔が利くってことだ。
「冬樹と洋行は、どうなんだ？」
「俺は別にいいっすよ。俺の仕事とかち合うことはないっすから」
「俺も女性が入ってくることには、賛成です。俺の仕事が減ります」
　なんだ、やっぱり家の仕事をするのは嫌だったのか、洋行。
「里久はど」
「僕は嫌です！」
　皆まで言わねぇうちに食って掛かられた。こいつが俺に対してこんなに突っ掛かるのは、初めてかもな。なんで咲弥子とはこんなに相性が悪いんだか。やっぱり同属嫌悪なのか？
「私も反対です。いくら成績優秀で有能でも、元ホステスの肩書き

は隆広様にはマイナスにしかなりません」
「職業に貴賤はねぇぜ」
「あなたがそうでも、他の人間は違いますよ。突然女性秘書を雇えば、それだけ人々の関心を集めます。重箱の隅をほじくるように、藤野咲弥子の過去を暴き立てるでしょう。そうなれば彼女も傷付きますし、あなたが庇えば庇うほど、傷は大きくなります。どうしても就職させたいなら、放っておくことです。あなたが手を貸しても、状況は同じと考えます」
「俺はもう小夜の客になっちまったぜ」
「ホステスと客の関係の方が、まだマシですよ」
まぁな、春樹の言い分は正しい。俺が『椿』に行っただけで騒ぎになるんだからな。だが、俺はあいつを傍に置いておきてぇ。秘書にすりゃ、それが叶うんだよな。洋行の仕事が減るから、俺の身の回りの世話をするだけでもいい。あいつが大人しく従うとは思わねぇが、それはそれで楽しみが増えるってもんだ。
「お話はそれだけですか？」
「ああ、冬樹にもう一つ調査を頼む」
「はい、なんすか？」
「こいつ、藤野咲弥子のことを調べてくれ」
「隆広様！？」
「爺さんにもう宣言しちまったからな。こいつと付き合うって」
「な！？」
「俺も履歴書以上のことは知らねぇんだ。今後は爺さんにあることないこと吹き込む連中も出てくるだろ。その対処のためにも、調べておく必要がある」
春樹と里久の視線が痛ぇな。こいつらは普段仲が悪いくせに、共闘するとなると妙な連帯感が出てくるらしい。洋行は溜め息、冬樹は面白がってるな。
「分かりました。どこまで調べたらいいっすか？」
「もれなく全部だ。『椿』の調査よりも優先しろ」

「了解っす」
春樹の苦々しい表情を見ても、冬樹には毛ほどの動揺もねぇ。兄弟でも従兄弟でもねぇが、名前の一字違いってのは、何かあるのかね。
「隆広様。藤野咲弥子と付き合うのは、私は反対です。考え直してください」
「その余地はねぇよ。俺は咲弥子以外はいらねぇんだ。お前も諦めろ」
「……」
冬樹は仕事が出来たと鼻唄交じりで、とっとと部屋を出て行った。洋行と里久もそれに続く。里久は最後まで仏頂面だったな。だが、春樹は残ったままだ。
「おい、休憩は終わりだぞ。お前も仕事に戻れ」
「隆広様、本当に考え直す余地はないんですか？」
「お前、俺の秘書になって2年経ったろ」
「は？　はい、そうですが。なんですか？　いきなり」
「その間に俺の女は、何人いた？」
俺の質問の意図が読めねぇのか、春樹は片眉を上げて怪訝な顔でいる。
「5人ですが、それがなにか……ああ、そういうことですか。冬樹がさっき言ってましたね。私も、こんなに女性に積極的な隆広様を見るのは初めてです。そんなにこの藤野咲弥子がいいんですか」
「少なくとも、俺の人生でこいつほど欲しいと思った女はいねぇ。初めて自分から欲しいと思う女はな」
「だから、彼女以外には考えられないと？」
「そういうことだ」
ようやく納得したか、この石頭め。
「まぁ、隆広様がそこまでおっしゃるなら、秘書に迎えるなり妻に迎えるなり、好きになさって下さい。私は個人的な感情はともかく、仕事に私情は挟みません」

「問題は、こいつが俺の秘書になりたかねぇってことだ」
デスクの上の咲弥子の履歴書を弾くと、春樹が目を丸くした。こいつにこんな表情をさせるとは、咲弥子が俺の秘書になったら面白ぇことになるな。
「東海林グループ会長の秘書を、やりたくない人間がいるなんて信じられませんね。就職したいのでしょう？　彼女は」
「だから面白ぇんだよ。攻略しがいがある」
「まぁ、どうぞ楽しんで下さい。私たちに迷惑を掛けてさえ下さらなければ、なにをしても構いませんから」
一旦決断すると、こいつは切り替えが早い。よくもまぁ、しれっと言い切るもんだぜ。
「どうしますか？　もし素性が、どこぞの偉い身分の隠し子なんてことだったら」
「それなら何の障害もねぇだろ。問題なのは、そうでなかった場合だ。どうも里久と同じ匂いがしてならねぇ。爺さんを説得するのはいいとして、さっきお前が言った通り、暴き立てる奴らは五万といるからな」
「里久と同じ……それならば、喜び勇んで攻撃してくる連中が、わんさかいるでしょうね。あなたの命令ならば、どんな妨害でも迎撃でもしますよ。それも私たちの仕事ですからね」
そういう仕事の方が、こいつは燃えるからな。冬樹がいるせいで、あんまり出番はねぇが。穏やかな顔して、実は里久以上に好戦的な奴だぜ。

7

翌夜、退社する直人を地下駐車場でとっ捕まえて、マスターの店に連れて行った。こいつのことだから、ばっくれるだろうと予想して、駐車場で張っていたのが正解だったな。そのために俺は今日一日、休憩返上で業務を終わらせた。今夜は夢ん中でも書類と睨めっこしそうだぜ。

渋る直人を里久のアウディに蹴り入れる。いつもは里久がドアを閉めてから運転席に座るが、今回はそんな隙を作ったら、こいつに逃げられるのがオチだ。俺が直人の隣りに乗り込むのを見て、待機していた里久がすぐに車を出す。

俺と里久の前では繕う必要がねぇからか、いつもの微笑は引っ込めて、渋面を隠しもしねぇ。

「こんな扱いをされるいわれは、私にはありませんが？」

「お前の機嫌を直してくれと、洋行が社員から泣き付かれたんだよ。荷物扱いされたくなかったら、笑顔で黒いオーラを撒き散らすんじゃねぇ」

「それの原因を作ったのは、あなたですよ？」

「休憩中にセックスしなけりゃ、どうということもねぇだろ」

「私はストレスが溜まっていたんです。あなただって、久し振りに出来る機会を潰されたら、怒るでしょう？」

「だったら溜めなけりゃいいだろうが。つべこべ言わずに大人しくしてろ」

「私はあなたほど、人間が出来ていないんです！」

３４歳の男がむくれてそっぽを向く……美形のこいつじゃなかったら、気色悪い光景だな。

「人間が出来てねぇんなら、出来る努力をしろよ。恋人を秘書に雇っていつも一緒にいられんだから、それだけでいいじゃねぇか」

「あなただってそうすればいいんですよ。一昨日の藤野さんはどう

したんです？」
「言われなくてもそうす、だっ！」
突然車が急停止して、咄嗟に両腕でガードした。危うく助手席に正面衝突するところだったぜ。
「里久！　いきなり何しやがる！」
「……なんでもありません、以後気を付けます」
そんなガチで殺気をバリバリ放って、なんでもねぇはねぇだろうが。ったく、とことん咲弥子が嫌いらしい。しかも赤信号とは、なんつうタイミングだ。
直人は涼しい顔で呆れた視線をくれている。顔が綺麗な分、そういう目付きがいちいち突き刺さるんだよ。
「隆広、今時は後部座席でもシートベルトが常識ですよ」
「うるせぇ。俺は里久の運転技術を信用してんだよ」
「それは結構なことですが……まぁ、装甲車並みに改造してあるこの車なら、事故っても破損することはないでしょうが」
直人が、ドアの内側を手の甲で叩いた。見た目からは分からねぇが、同じ型のアウディと比べると、この車は３００ｋｇ近く重い。その車体重量で最高時速は３００キロを軽く超えるからな。里久と冬樹で改造の指示をしたって聞いてるが、どんだけ馬力のあるエンジンを積んでんだか。
普通に買っても１０００万はする車が、改造費で更に倍近くかかった。驚くというより呆れたぜ。とはいえ、俺の安全と引き換えと言われりゃ、納得するしかねぇわな。一応、東海林本家の跡継ぎだからな。俺も小さい頃から誘拐だの襲撃だのに警戒して、周りの連中はいつもピリピリしていた。
あの煩い多香子や香緒里姉貴、おっとりな由香里姉さんまでもが、そういうことには随分神経を尖らせていたからな。男の俺ともなれば、過敏過ぎて笑っちまうくらいだった。
幸いなことに、これまでそういう危険な目に遭うことはなかったが、会長にされちまうと笑ってもいられねぇ。ったく、こんな立場

になんか、なるもんじゃねぇぜ。

いつもの通り、里久は表に待たせて、直人を伴ってマスターの店に入ると、見覚えのある後ろ姿がカウンターに座っていた。

「東海林さん、珍しい、お連れさんですか」

そいつの背後に立った俺に、マスターが声を掛けてきた。瞬間、そいつは口を付けたロックグラスから、勢いよく酒を吹いた。中身は琥珀色だから、ワイルドターキーでも飲んでいたか。

隣のスツールに座ると、激しく咳き込んで涙目の咲弥子が俺を睨み付けてくる。ここで会えるなら、出来上がったドレスを持ってくるんだったな。

「なんで、あんたが、ここに、来るのよ！」

「そりゃこっちのセリフだ。なんでお前がここにいる？」

「この間ここのお店に迷惑掛けちゃったと思って、お詫びに飲みに来てたの！　あんたが来るって知ってたら、来なかったわよ！　ていうか、隣に座んないでよ！」

相変わらず無礼な女だな。追い払うように、右手を振りやがって。俺は犬じゃねぇぞ！

「おや、藤野咲弥子さんじゃないですか？」

「うっ、社長さん。その節はどうも……」

横から割り込んだ直人に、咲弥子は頭を下げて挨拶している。なんだ、この差は！

釈然としねぇ気分を抱えていると、何も言わねぇ内にマスターが俺の前に、グレンフィディックのロックを置いた。直人はいつ頼んだのか、マティーニが出ている。こいつは俺ほど酒が強くねぇっつっても俺と比べてであって、普通よりは強い方だな。ほろ酔いはともかく、泥酔したところは見たことねぇ。

メールでも送っていたのか、操作していた携帯をしまって一息で

マティーニを半分消化し、俺の横から咲弥子に声を掛けた。
「隆広の秘書の件、考えてくれましたか？」
「あー、や、それは、まぁ追々……」
咲弥子の奴、愛想笑いなんかしやがって、ムカつくぜ。
「おい、なんで直人には愛想がいいんだよ」
「あんたじゃないからよ！　だから、寄んないでってば！」
「その犬を追い払うような手はやめろ、無礼な女だな」
「あんたなんか犬と同じ！　なによ、デリカシーもないくせに」
「それとどう関係がある！」
「あたしには大有り！　なんだって同じところでまた会わなきゃいけないのよ！」
「お前の方から来たんだろうが」
「隆広が人前で痴話喧嘩なんて珍しいですね」
「これが痴話喧嘩に見えるか！　直人」
「東海林さんの恋人になったんですか？」
「ち　が　い　ま　す！！」
ちっ、んな思いっ切り否定しなくてもいいだろうが。ぜってー連れ帰って、泣かせてやる！
直人は俺に背を向けて肩を揺らしてやがる。
「大変珍しく面白いものを見せて頂きました。いいでしょう、ご希望通り機嫌は直して差し上げます」
「なんだ、その恩着せがましい言い方は。お前の社員が俺に泣き付いたんだぞ！」
「分かりました、業績悪化を防ぐためにも、明日からは平常通りに過ごします。それにしても、本当に藤野さんが気に入ったんですね」
直人の言葉に「げっ！」と咲弥子の声が聞こえる。本人は声を小さくしたつもりのようだが、ばっちり聞こえてんだよ！
「ああ、そうだ。俺はこいつ以外はいらねぇんだよ」
「なによそれ！」
「この前言っただろうが。お前がほしいって」

「ぎゃああー！　言うな、アホ！」
咲弥子の奴が耳を押さえて雄叫ぶ。この前別れた時のことを思い出したんだな。ふん、もっと体に覚えさせてやろう。
俺の前にある手をひっぺがして、耳の穴ん中に静かに長く息を吹き掛けてやった。咲弥子は顔を真っ赤にしながら体を震わせ、腰砕けでカウンターに突っ伏した。
「あ、あんたねぇ、あたしがこれ、弱いの知ってて」
「俺をアホ呼ばわりするからだ」
「このＳ男！」
直人がマティーニを吹き、腹を抱えて爆笑している。こっちの方が俺には珍現象だぜ。
「ならお前はマゾだな」
「誰が！　変なこと言わないでよ！」
「お前、性懲りもなくまた面接に行っただろうが。それのどこがマゾじゃねぇって？」
「な、なんで知ってんのよ！？」
相っ変わらず紺色のスーツなんか着やがって。分からいでか！つか、予備のスーツを持っていたとはな。クリーニングの仕上がったリクルートスーツがホテルから咲弥子のアパートに届くのは、今日の夕方辺りのはずだ。
「お前のやりそうなことくらいお見通しだ」
咲弥子は悔しそうに唇を噛んでいる。この前もよくこんな顔をしていたな。俺に敵うわけねぇだろ。
「どうだったんだ？」
「なにがよ？」
「面接の首尾だよ」
「うぐっ、それを訊くわけ？　相変わらずデリカシーないわね！」
ふん、やっぱり手応えはなしか。昼間、冬樹から咲弥子の調査結果と『椿』の概要が上がってきた。後日『椿』に行こうと思っていたが、あそこじゃ話しにくいこともある。今日ここで会えたのは、

逆によかったかもな。
報告書の内容は覚えている。俺の話だけじゃこいつは信じねぇだろうが、まぁ物はためしだ。ストレートにやってみるか。
「咲弥子、就職したかったら『椿』を辞めろ」
「は？　なに言ってんのよ！？　あたしは生活するのにお金が必要だって言ったでしょ！　その歳でもう健忘症？」
いちいちムカつくことを言うな。俺の秘書になったら、春樹と気が合うかも知れねぇぞ。
「親切で言ってやってんだ。『椿』にいる限り、お前は就職出来ねぇよ」
「辞めないわよ！　あんたに言われてなんて、絶対辞めるもんか！」
とことん俺に反抗するつもりか。ったく、面倒臭ぇ奴だ。
どう説得してやろうか考えていると、横から直人が口を挟んできた。カウンター上のカクテルがスターダスト・レビューに変わっている。ジンベースにブルー・キュラソーが加わって、鮮やかな青い酒がカクテルグラスに満たされている。辛口でアルコールがかなり強い。顔に似合わず、甘い酒が苦手な奴だ。
「隆広、『椿』というとあの銀座の最高級クラブのですか？」
「ああ、お前は……行ったことねぇか」
「ええ、私はそういった接待は、全てお断りしていますから」
海東物産の代表取締役ってことは、東海林グループの最高幹部の一人ってことだ。それなりの地位も責務もある。断れねぇ接待もかなりの数に昇るが、こいつは断固として受けたことがねぇ。こういうことが出来る奴だから、こいつを強引に社長に据えた。万が一、東海林の血縁を社長の椅子に座らせたら、老獪なじじい共にしがらみで縛られて、いいように丸め込まれちまうからな。こういう奴が幹部に一人や二人はいねぇと、俺自身が身動き出来なくなる。
「お前にはそういう選択肢があるから、自由でいいよな」
「あなたはその点、がんじがらめですからね。同情しますよ」
「ええ！？」

咲弥子が唐突にデカイ声を上げた。耳元でうるせぇな。意外そうな顔で俺を見上げやがって。
「なんだよ？」
「だって、あんた、好き勝手やってんじゃなかったの？」
「天下の東海林グループ会長ですよ？　好き勝手にすれば、すぐに叩かれます。隆広はこんな性格ですから、誤解を与えることも多いですが」
「お前も一言多いぜ。誤解する奴にはさせときゃいいのさ。その方が煩わしくねぇ」
「まぁ、こんなことを言ってますが、私が接待を断れるのも、隆広がいるからこそですよ。随分と私の身代わりになってくれましたからね」
「ふん、お前に逃げられるわけにはいかねぇからな」
「そういうことにしておきましょう」
真顔で礼を言われるのは、あなたも慣れないでしょうから。囁く声でそう付け足す。ちっ、本当に余計なことを言いやがる。あんな面倒臭ぇ仕事に就かせるんだ、それなりの見返りは必要だろうが。
「はあー、信じらんないわ。あんたがねぇ」
「隆広は信頼出来る人間です。私は彼の秘書になることをお勧めしますがね」
「……」
その一言で、咲弥子が真剣な顔をしたのは、なんか腹立つな。俺の言うことには全く耳を貸さねぇくせに、こいつの言葉は素直に聞けるってことだろ。舐められてるみてぇで、気分悪いぜ。
直人はスターダスト・レビューを飲み干すと、早々に席を立った。
「では隆広、私はこれで失礼しますよ。藤野さんとごゆっくり」
「ふん、言われるまでもねぇ。明日から社員を泣かすなよ」
「私は泣かした覚えはないんですけどね」
しれっと言いやがる。
「そうやって笑顔で黒いオーラを撒き散らさなきゃいいんだよ」

「ふむ、善処しましょう」
「政治家みてぇなこと言うんじゃねぇ」
「少しは実感こめて言ったんですけどね」
苦笑したところで、腹ん中じゃ舌出してんだからな、こいつは。
ま、それくらいじゃねぇと、あそこの社長は務まらねぇが。
「足はどうするんだ？」
「ご心配なく、詩織が私の車で迎えに来ます。ようやく今夜、彼女とゆっくり過ごせますので」
なるほどな、昨日春樹に脅させてアポ取ったのに、逃げようとしてたのは赤星とデートだったからか。まだ8時を回ったところだ。時間はたっぷりあるだろ。

8

直人が去るのを見送っていると、咲弥子がズブロッカを頼んでいた。この前はストリチヤナを飲んでいたから、こういう癖のある酒は苦手かと思っていたぜ。

「咲弥子、この後俺に付き合えよ」

「なっ！？　いやよ、あたしは家に帰るんだから。明日は履歴書を出しに行くの。今度こそ、絶対に受かってみせるんだから！」

「帰らせねぇよ。大体、俺の話を聞いてなかったのか？　『椿』を辞めねぇ限り、お前は就職出来ねぇよ」

「なんで、そんなことあんたに分かるのよ！」

「ふん、聞く耳持つ気になったか？」

「うっ、そ、そういう訳じゃないけど」

俺から目を逸らして誤魔化しちゃいるが、大分心が動かされているな。あと一押しってところか。

「咲弥子、お前自分がどうして就職先が決まらねぇか、知りてぇだろ」

「そ、そりゃあ……なによ、あんたは分かるっての？」

「ああ、知ってる。だから『椿』を辞めろと言ってんだ。理由が知りたきゃ、これから俺に付き合え」

「付き合うってどこよ！？」

あからさまに嫌そうな顔しやがって。なんで俺をこんなに嫌うんだか。自慢じゃねぇが、女に限らず人に嫌われたことは、あんまねぇんだぜ。

「来りゃ分かる」

「……じゃあ、ちょっとだけでいいから教えて。それで納得出来たら、あんたに付いて行く」

「しょうがねぇな。お前、履歴書を出した会社、面接に行く会社、いちいち『椿』のママに話してんだろ」

「当たり前じゃない。バイトのシフトを変えてもらわなきゃならないし、あたしのことだって、凄く親身になってくれるんだから、当然でしょ」
なるほどな。それだけ信頼されてりゃ、あの女にとっちゃ咲弥子はいいカモだろう。咲弥子が就職するなんて言い出さなきゃ、ナンバーワンへの道を爆進させていただろうな。
「今までの就職試験、面接も全て事前報告していたんだな」
「そうよ。それがなに？」
「おかしいと思わねぇのか？」
「なにがよ？」
「お前の成績、資格、自活してることも含めて、企業にとっちゃかなり欲しい人材だ。それが、ことごとく落とされるってことがだ」
咲弥子もこれは気にしているようだな。下を向いて黙っちまった。
「あたしだって、それはどうしてか、分かんないわよ。だから、なんでなのか教えてくれるんでしょ！？」
「だから、『椿』を辞めりゃいいんだよ。これ以上聞きてぇなら、俺に付き合え」
「……分かったわよ、行くわよ、行ってやるわよ！」
ふん、ようやく言えたか。これ以上は人目のある場所じゃ、口に出せねぇんだよ。
「じゃあ早速行くぜ」
「むう、しょうがないよね」
なんだ、その心底しょうがねぇって顔は。まぁ付いてくる気になっただけマシか。
咲弥子が鞄から財布を取り出すのを見て、すかさずそれを取り上げた。
「ちょっと、なにすんの！？　庶民からお財布取り上げるなんて、しょうぶっ」
咄嗟に空いている手でこいつの口を塞いだ。阿呆、こんなところでデカイ声で言うな。さっきはカウンターで顔付き合わせていたか

らいいが、こんな誰にも聞こえる声で俺の名前を出すんじゃねぇ。
「ふがふがふがっ」
「俺が一緒にいて、お前に代金を支払わせるわけねぇだろうが」
「ふがふが」
何を言ってんのか全然分かんねぇな。俺の名前は言わないことを約束させて、手を退けた。
「あのね、あたしはあんたに借りなんか作りたくないの！　自分が飲んだ分くらい自分で払うわよ！」
「断る。何度も言ってんだろ、お前が就職したかったら『椿』を辞めるしかねぇんだよ。生活費が必要なんだろ、こんなことで金を使うな。まぁ、『椿』を辞めずに就職する道は他にもあるがな」
「な、なによ？」
「俺の秘書になる」
「ずぇっっっったい、やだ！」
「だったら、大人しく奢られておけ」
咲弥子の財布を返すと、大人しく鞄にしまった。ったく、手間隙掛けさせやがって。

咲弥子を連れて店を出ると、俺を見た里久が苦々しそうな仏頂面に変化した。そんな顔をするなよ、俺だってここで会うと思っちゃいなかったんだぜ。
明らかに渋々といった態で、里久は咲弥子のためにドアを開ける。俺には一切向けない素直な礼を言って、咲弥子は乗り込んだ。なんでこうも俺を嫌うのかね。
咲弥子を隣りに乗せて、先ず向かったのはオフィスだった。今日夕方に届いたドレスを渡さなきゃならねぇ。明日の小夜の出勤に間に合わせるには、これが一番だからな。
オフィスに着くと9時を回っていた。里久を地下駐車場で待たせ、

咲弥子を連れて上がる。
「ちょっと、付き合うってここ？　何考えてんのよ！？」
「お前に渡すものがあるんだよ。大人しく付いて来い」
人気のねぇ廊下を秘書室を素通りして会長室に入る。この時間なら春樹と冬樹がいるだろうが、知らせる必要もねぇわな。
電灯で明るくなった室内を、咲弥子はキョロキョロ見回している。ふん、直人の社長室と比べてやがるな。
「また無駄に広いのね。あんた一人で使ってんでしょ？」
「うるせぇ、しょうがねぇだろ。ここが仕事場なんだから。ほら、これだ」
「げっ！　ちょっとやだ！　あたし受け取らないからね！」
無駄に広いデスクの上にドレスの入った箱を3つ重ねて置いた。外装で中身が何か分かったみてぇだな。そっちこそ無駄に知識があるじゃねぇか。
「いいから開けろ」
「やだ！」
ったく、いちいち説明しなきゃいけねぇのかよ、面倒臭ぇな。
「いいか、俺が小夜の客に付いたことは、昨日の朝までに業界に知れ渡ったんだよ。俺が客に付いたのに、お前に安物のドレスなんか着させられねぇだろ。分かったら開けろ」
「……開けなかったら、また脅すわけ？」
「ああ、そうだな。やってほしいならやってやる」
あんなところは潰しても構わねぇがな。むしろ潰れた方が、世のため人のためってやつだぜ。今以上に反発するのは目に見えているから、それはまだ咲弥子に教えられねぇが。
ブツブツ文句を言いながら、ようやく箱を開けた。中身を見て、咲弥子が絶句するのが分かる。ふん、驚いたか。
見た目はゴージャスにと注文したら、本当にゴージャスな物が出来上がってきた。花のオーガンジーが付いたローブ・デ・コルテに、胸元をかっちりガードした豪華刺繍のチャイナドレス、そして黒い

ビロードの生地にスワロフスキーのジルコンを散りばめたシックなイブニング・ドレス。これらを小夜になった咲弥子が着たら、それこそ説得力ありまくりだぜ。
　これらに合わせた靴も用意してある。ついでにネックレスとイヤリングも、フルコーディネイトでそれぞれ箱の中に一式入っていた。当然イミテーションなんてさせらんねぇから、全部本物だ。デザイナーが直接届けに来たが、請求書を俺に渡す時には手が震えていたな。想定内の金額だったんで、大して驚きもしなかったが。
「ちょっと、これ……全部でいったいいくらして」
「野暮なこと訊くなよ。それをお前にやる。あと何着かやるから、今後『椿』に出る時はそれを着ろ」
「やだって言っても、聞いてくれないわけね」
「ああ、そうだな。やっと分かったかよ」
　諦めた調子で咲弥子が肩を落とした。この前の様子から手放しで喜ぶとは思っていなかったが、こう落胆されると傷付くな。俺のことを睨みつけやがって。
「あんたって、ほんっと最低。あたしのことを気に入ったって言っておいて、あたしの嫌がることをするわけ？」
「俺はお前が嫌がる理由が分からねぇよ。ブランド好きじゃなくたって、高級品を贈られたら、大抵は嬉しいもんじゃねぇか」
「あたしは、目立つことをしたくないの！　あんたに指名されてから翌日のお店は、大変だったんだから！　控え室じゃウザイほど嫉妬にまみれた視線をもらっちゃうし、フロアを歩いてる時は足を引っ掛けられそうになるし！　着慣れた服だったから良かったけど、こんなドレス着ていたら素っ転んじゃうじゃない。それこそ、いい笑い者よ！」
「綺麗な顔して着飾っておいて、腹ん中は真っ黒だな、ホステスってのは」
　大体そんなもんだろうと想像しちゃいたが、実際に咲弥子の口から語られると実感こもってるな。こんなだから、ホステス出身の女

に対して下賤だとか強かだとか、先入観が先走っちまうんだよ。
「そういう世界なのよ、分かったらもうこんなことしないで！　なによ、さっきは就職したかったらお店を辞めろって言ったくせに」
「すぐに辞められると俺だって思っちゃいねぇよ。噂が立った以上、お前は嫌でも『東海林隆広が指名したホステス』と見られるんだよ。今後は更に客から注目されるぞ。その小夜が安物で貧相なドレス着ていたら、東海林家そのものが安く見られちまうだろうが」
「勝手にお店に来たのはあんたじゃない！　あんたが指名しなかったら、噂になることもなかったでしょ！？　結局はあんたのせいじゃない！」
　それを言われると、耳が痛ぇな。春樹にもそれは指摘されたが、気に入っちまったもんはしょうがねぇだろ。咲弥子のホステスぶりも見てみたかったしな。
　なんてことを言ったら、こいつのことだから「迷惑だ」とか騒ぐだろうが。
「こうなっちまったもんはしょうがねぇだろ。受け入れるしかねぇんだよ、嫌でもな」
「だから最低って言ってんのよ！」
　俺を睨み上げていた咲弥子の目に涙が浮かんでいた。目尻から一筋流れ落ちるのに気付いたのか、咲弥子はうつむいて涙を拭う。
　俺としたことが、見惚れちまったぜ。今まで女の涙なんか見せられても、何とも思わなかったのに急になんだ！？　まさか、本当に咲弥子に惚れちまったのか？　ウソだろ！？
　確かに咲弥子をほしいと思っちゃいるが、それは惚れたとかじゃなく……いや、惚れてるからこんなにほしいと思ってんのか。ガツガツした俺ねぇ、自分じゃ想像出来ねぇな。
　俺に背を向け、うつむいている咲弥子の肩を掴んで振り向かせた。驚いて俺を睨み上げる咲弥子の目から、涙の粒がボロボロ落ちる。それを俺の指で拭ってやった。
「ちょっ、なによ？　まさか、待っ」

右手で咲弥子の顎を捉え、空いた左腕は背中を抱くようにして、そのまま顔を近付ける。咲弥子の言葉になってねぇ声が俺の顔に当った。酒臭ぇ息しやがって、俺たちが行く前から随分飲んでいたな。
「ちょ、やだっんんぅ」
ゴチャゴチャ言っている咲弥子の唇を一舐めしてキスした。俺が舌を入れる前に咲弥子の方から絡めてくる。この前も思ったが、こいつの舌遣い結構いいんだよな。なんだかんだ言って、こうしてキスすると素直に受ける辺り、セックスが好きなんだな。
俺が飽きるまで激しくキスしてやる。咲弥子は力が抜けて、俺にしがみついてきた。唇を解放してやると、潤んだ目でを俺を見上げてくる。お互い、頬に当る吐息が熱い。
「こんな、とこで、何考えてんの！？」
「したくなったんだから、しょうがねぇだろうが」
「信じらんなっんぅ」
咲弥子の体を更に壁に押さえ付け、キスをしながら肩から胸、腰に至るまでスーツの上から愛撫してやる。そのまま足に手を這わせたところで、俺の背広の内ポケットから無粋な電子音が鳴り響いた。メールじゃねぇ、電話の着信音だ。
咲弥子は夢から覚めたような顔になって、壁と俺の間から抜け出そうともがき始めた。少し体の位置をズラしてやると、慌てて俺から距離を取るように離れ、赤く火照った顔でこっちを見る。
ちっ、誰だ、これからってところで邪魔しやがった奴は！
「は、早く出たら？」
「うるせぇ、分かってる」
既に１０コールは鳴ってるくせに、ちっとも鳴り止む気配がねぇ。ディスプレイを見ると、冬樹からだった。あいつめ、減俸にしてやる。
「なんだ、冬樹！」
『あー、ども。邪魔してすんません』
しれっとぬかしやがって。

「分かってんなら、用件を早く言え」
『えっとっすね、今俺の携帯に里久から電話があったんすよ。隆広様があのホステスと上がったっきり、全然降りて来ないって怒りまくってるっす』
ああ、そういや里久を待たせていたことを、すっかり忘れてたぜ。こんな仕事場で女を抱くのだって、初めてだったし。考えてみりゃ、ここにスキンの用意はなかったんだ。
「分かった。すぐに降りる」
『それとっすね』
「なんだ、まだあるのか？」
『秘書室から春樹が出刃亀してるっすよ。あいつ、女に逃げられて以来たまってるらしくて。あんまり近くで刺激の強いことは、やらない方がいいんじゃないっすか？』
なにやってんだ、春樹。仕事にばっか打ち込んで、女に逃げられてんじゃねぇよ。
通話を切って咲弥子を見ると、乱れた服をしっかり整えてやがった。すぐに降りるから別にいいんだが、こうもちゃっかりやられるとムカつくな。責めてやると従順になるだけに、イラ立ち倍増だぜ。
「あ、あの、誰からだったの？」
「俺の秘書だ。隣りが秘書室で、そこから入れるＰＣ室にこもってる奴がいるんだよ。里久から早く降りて来いと、連絡があったそうだ」
「へぇ、そうなん……って、ちょっと待ってよ！　じゃあ今の全部、聞かれてたの！？」
「まぁ、そういうことだな」
俺は別に聞かれても屁とも思わねぇが、咲弥子は泣きっ面になって頭を抱えた。
「ぎゃあああー！　なんであんたは平気なのよ、このデリカシー皆無男！　っていうか、なんでこんな時間に会社にいるのよ、あんたの秘書は！」

「二人ともこの近くに住んでるからな。大抵この時間はまだいるぜ」
「分かっててやってたの！？　信じらんない！」
あいつらの存在を忘れていたのは確かだが、そんな風に罵られるいわれはねぇぞ。
「だから、ここじゃもうやらねぇよ。続きは俺のマンションでやってやる」
「やらなくていいってば！　そのドレスだっていらないから！　ちょっと、なに抱えてんのよ！」
「お前は持って行かねぇだろ。だから俺が持って行ってやる。ありがたく思え」
「いらないって言ってんでしょ！」
ドレスの入った箱を脇に抱えて、うるさく怒鳴る咲弥子に部屋を出るよう指示して、ようやく静かになった。
ったく、どうしたらこいつを大人しく従わせることが出来るのか。しばらくは俺の課題だな。

9

咲弥子を連れて地下駐車場に降りていくと、機嫌の悪い里久が待っていた。
「なんて顔してんだ、里久」
「元からこういう顔です。そもそも、隆広様がこのお」
この女と言い掛けた里久を、何も言わずに見据えた。俺は他人を黙らせるのに、よくこんな目をする。こいつには滅多に見せねぇからか、途中で口を噤んだ。普段は無口なこいつが、こんな反応を示すってのはやっぱり珍しいな。
咲弥子も里久に負けねぇくらい仏頂面だ。流されて誘った自分に腹を立ててんのか、セックスが好きなら素直でいいじゃねぇか。俺は素直に喘いでる咲弥子が好きだぞ。言ったらまた煩く喚くだろうが。
先に咲弥子を車に乗せ、トランクを開けさせる。抱えていたドレスの箱をそこに入れた。怒るというより拗ねてるような表情で、里久は無言で従う。
「お前、咲弥子が嫌いなのは、自分と同じ匂いがするからか？」
「そっ、別に、そういう訳じゃ」
俺の問いは不意打ちだったようだ。綺麗な顔に戸惑いの表情を乗せた。
「僕と同じって、藤野咲弥子は施設育ちなんですか？」
「なんだ、気付いていて同属嫌悪かと思ってたぜ」
「どういう意味ですか。あの女が隆広様を淫らに誘ったりするから……。隆広様も僕の車の中では、絶対にあんなことしなかったじゃないですか」
要するに、初対面が里久にとって最悪だったのか。意外に高潔だな。それにしても耳の痛ぇ話だぜ。あの時は俺も、酒の勢いと爺さんへの腹立ちと咲弥子への興味で、普通じゃなかったしな。

「冬樹の調べじゃ、お前とほぼ同じ境遇だな。咲弥子はお前と違って、随分可愛がられたようだが」
「僕は行った先々で酷い目に遭いましたからね、ろくでもない大人ばっかりでしたよ。だから、こんなろくでもない人間になったんです」
「お前はろくでもなくねぇぞ。春樹の言うことなんか、気にするな」
「そう言って下さるのは、隆広様だけです」
冬樹や洋行もそう思ってるがな。二人とも口に出しても里久が信じねぇもんだから、もう言わなくなっちまった。聞く耳持たなくても、言い続けてやるもんだと俺は思っているが。
「その佐藤春樹が、煩いんじゃないですか？　僕と同じだと」
「予備情報は与えておいたし、もう冬樹が教えているさ。春樹だっていい大人だ、そこまで子供じゃねぇだろ。なんだ、孤児だと分かったら態度が変わったな」
「からかわないで下さい。彼女の境遇がどうだったのか知りませんけど、親がいないって結構つらいですよ。僕の場合は、親がいても同じでしたが」
そんなことを自嘲しながら言うところは、まだ自分の過去ときっちり折り合いがついてねぇんだな。
こいつは実の親から、精神的・肉体的に虐待されて育った。１０歳で保護されるまで、学校に行ったこともなければ、戸籍すらなかったんだ。
最初に保護された施設で、そこの所長の養子になったって話だが、すぐに別の施設に移っている。原因は、施設での虐待と虐め。字も読めなけりゃ、人とまともにしゃべったこともねぇ。そんな奴が共同生活なんて土台無理な話だろうし、ストレスが溜まっている奴らから見れば、格好の発散対象だろう。
１０箇所は施設を転々としていたこいつは、結局どこにも馴染めずにホームレスになった。俺が里久を拾ったのはこいつが１５歳頃、推定という冠詞がつくが。何しろいつ産まれたのか、本人も分かり

ゃしねぇんだからな。便宜上１５歳にして、俺が公式に保護することにした。
　その後３年間みっちり勉強して、自力で大学に入っちまった時は、さすがにたまげたぜ。まぁ、頭が良くなけりゃ、子供が独りでホームレス生活なんか出来るはずもねぇからな。
「咲弥子は母子家庭だったが、小学校へ上がる前に母親と死に別れて、高校を卒業するまで施設で育ったらしい。高校の学費は奨学金で賄ったんだそうだ。『椿』での稼ぎの殆どは、その返済に充てている。他のバイトより給料が多いと言っても、それと学費を差し引けば意外とギリギリかもな」
　ってのが、今日までに冬樹の調べた咲弥子の過去だ。漏れはねぇっつうから、不明の父親がどこぞの議員か会長なんてこともねぇだろう。
「それなら、心配するほどの境遇じゃないですよ。僕に比べれば、かなりまともです。隆広様が僕と同じ匂いを感じたっていうのが、ちょっと信じられませんね」
「親がいなくて施設にいたってのは、共通項だろ。お前と比べてまともでも、俺や東海林を貶めたい連中にとっちゃ、いいネタだろうな」
　行動が早い連中は、もうその情報を仕入れているはずだ。今日の夕方には咲弥子の過去に関しての情報を、全て冬樹が隔離してネット上に流出しないよう手は打った。今後探られる心配はないというが、それ以前に情報を見付けられていたら、何をしても無駄だという。ついでに言えば、里久の情報もとっくの昔にシャットアウトしてある。
「それでも、藤野咲弥子とは別れないんですか？」
「言ったろ、咲弥子以外はいらねぇって。たとえお前と同じように親に虐待されていても、気持ちは変わらねぇよ」
「そんなことを言ったら、また春樹が煩いですよ。それこそ僕の親と同じ匂いを感じます。あいつは絶対ドＳで、人を人とも思わなく

て、とても嫌な奴です」
　そういやあいつ、里久を縛り付けて笑い倒したんだっけか。昨日、密かに洋行から聞いたが、軽く拷問だったらしいな。女に逃げられて、ストレス溜まってんじゃねぇのか？
「どんなに有能な奴でも、僕はあいつが嫌いです。まだ藤野咲弥子の方がいい」
　こんな風にポロッと本音を言う里久は、初めて見たぜ。こいつにとって咲弥子がそばにいるのは、いいことなのかもしれねぇな。
「ふぅん、お前がその気になったんなら、咲弥子について反対する奴はもういねぇな」
「彼女が、隆広様とイチャイチャするのを見せ付けなければ、別に僕は」
　いちゃいちゃ……こいつの口から出ると、スンゲェ違和感のある言葉だな。そうか、こいつに女がいねぇのは、この綺麗過ぎる顔のせいなのかもな。一緒に歩きてぇとは思わねぇだろ。整い過ぎてるってのも考えものだな。
「ちょっと、なにさっきから話してんの！？　あたしが就職出来ない理由を教えてくれるんでしょ！　さっさとしてよ！」
　急に咲弥子が座席をドアを開けて顔を出した。すぐに引っ込んじまったのは、まだ機嫌が直らねぇらしい。
「何というか、彼女が入ってきたら、秘書室がけたたましくなりそうですね」
「それはそれで、賑やかになっていいんじゃねぇのか」
「他人事だと思って、勝手なことを言わないで下さい」
「ふん、マンションに帰るぞ」
「はい……え、あの、まさか、藤野咲弥子を連れて行くんですか？」
「そうだ。俺の本気具合が分かったかよ」
「……」
　不敵に笑いながら言ってやると、里久は押し黙った俺を見返してきた。

「本当に、彼女がいいんですね」
「だから、何度もそう言ってる」
「分かりました」
納得した顔で呟いて、自分の仕事をするべく咲弥子とは反対側のドアを開けた。

俺が隣りに乗り込み、里久が車を出すと、咲弥子はむくれた顔を突き出してきた。
「さっきから何か深刻な顔してくっちゃべっててさぁ、あたしのこと忘れてたでしょ」
「ああ」
「……」
下手に釈明するよりいいだろうと思って素直に認めてやったのに、咲弥子は大口開けている。
「なんだよ、けったいな顔しやがって」
「けったい……やっぱりあんた男として最低。女の子にそんな言い方、ないでしょ！」
「分かった、悪かったな」
「なんか、そうやって素直なのも気持ち悪い」
「じゃあ黙ってろ。お前に惚れちゃいるが、だからってご機嫌取りをしようとは思わねぇぞ」
「あ、あたしだって、あんたにご機嫌取ってもらおうなんて、思ってないわよ！　っていうか、肝心なこと忘れてるでしょ！」
だよな。『椿』を辞めねぇと就職出来ねぇ理由を、教えてやる約束だった。まぁ、教えたところで信じねぇだろうが。
隣りに座る咲弥子を改めて見る。俺に食って掛かる女なんて妹の多香子くれぇだったから、新鮮に感じたんだよな。東海林の名前を聞いて、驚きはしても媚びたりしなかった。むしろ逆ギレしてたも

んな。ホステスになるために初っ端から『椿』の門を叩く辺りは、度胸の塊りみてぇだし。
「な、なによ？」
俺がじっと見てるのが気になるのか、咲弥子はちょっと身を引く。うっすら頬を赤く染めてんのは、照れてるのか？
冬樹の調べは、過去の男の情報にまで及んでいた。予想通り、ろくでもねぇ男と付き合ってきて、その度に泣きを見ていたのは咲弥子の方だった。あんな過去がありゃ、俺みてぇなのとは縁もなかっただろうが、それにしても悪い男に引っ掛かりまくりだ。ここらで終わりにしてもいいだろう。
問題は、ここで『椿』を辞める理由を話せば、確実に咲弥子は帰ると言い張るだろうことだ。出来れば、マンションに連れ帰ってヤリてぇんだがな。
だからって、その理由を話すことを条件に咲弥子とセックスするってのも、プライドが許さねぇ。
「お前の就職を妨害してんのは、『椿』のママだ」
「は？　なに言ってんの？」
案の定、不審そうな顔で……つかバカにしたような顔で、俺を見返した。４年間も面倒見てもらってりゃ、俺よりあの女の方を信用するだろうが、それにしてもその顔は傷付くぞ。
「お前をこのまま『椿』の専属ホステスにしてぇんだよ。そう、誘われてんだろ」
「そりゃあ、でもあたしはちゃんと断っているわよ！　ママだってしょうがないわねって言いながら、分かってくれてたもん！」
「そりゃそう言うさ。だが、それで諦めねぇのがあの女なんだよ。お前が履歴書を出した会社、面接に行く会社、全てにお前を採用しないよう、働き掛けていたんだ」
「嘘よ！　ママがそんなことするはずないわよ！」
「どうしてそう言い切れる？」
「だって、ママはいい人だもん。他のバイトのホステスよりもシフ

トの面で融通してくれたし、あたしのことをいつも気に掛けてくれてるし。就活してる今だって……」
　そこまで淀みなかった咲弥子の口調が、就活の話になった途端に止まった。なにか、気付いたようだな。
「どうした、言ってみろよ」
「な、なんでもない！」
「当ててやろうか。お前が面接する会社を、いちいち理由を付けちゃ、聞き出していたんだろう」
「……」
「黙ってんのは、肯定してる証拠だぞ」
「は、話してただけだもん」
「ふん、本気でそう思ってんのか？　お前だって、おかしいってさっき思ったんだろうが」
「違うったら！」
　怒鳴って顔を背けるのも肯定してるもんだが、それを指摘すると更にへそを曲げられそうだな。
「あの女はお前を『椿』のナンバーワンホステスにしてぇんだよ。本心じゃ、お前に就職してほしくねぇんだ。だが、お前の信頼を失いたくはねぇ。だから分からねぇように妨害してんのさ」
「そんなの嘘よ、あんたの作り話でしょ！　あんたこそあたしを秘書にしたくて、でまかせ言ってんじゃないの！？　あたしは絶対信じないんだから！」
「まぁ、今は信じろって方が無理な話だろうがな」
「今じゃなくたって、ずっとそうよ！！」
　窓の方を向いている咲弥子が、涙声で怒鳴る。暗い窓に映るその顔には、大粒の涙が零れていた。さっきもそうだったが、惚れた女の涙ってのは効くな。まさかこの俺が、女の涙で心を動かされるようになるとはな。
　しばらく車内に、咲弥子の微かな嗚咽が響いていた。その車が静かに停車する。俺のマンションの地下駐車場だった。

今夜のセックスはお預けだな。こんな状態の咲弥子を泣かせても、白けちまうだけだ。
里久が運転席から体ごと捻ってこっちを見る。
「隆広様、どうしますか？」
「俺はこのまま部屋に帰る。里久、お前は咲弥子をアパートに送って来い」
「ちょっと、あたし電車で帰るわよ！」
ハンカチで顔を拭いた咲弥子が食って掛かってきたが、拭いた傍から涙がボロボロ零れてるぞ。
「そんな顔で、しかもこんな深夜に女一人で帰らせられるか！」
「泣いたのはあんたのせいじゃない！！」
叫んだ咲弥子が右手を振り上げたのが見えた。
「隆広様！」
里久の声と同時に、左頬が引っ叩かれる。痛ってぇな、手加減なしでやりやがって。
「……な、なんで？」
自分で引っ叩いたくせに、なんで驚いた顔してんだよ。里久が車を降りようとするのを、右手を上げて止めた。
「ふん、これで気が済んだかよ？」
「ば、バカにしないでよ！　なんで避けないのよ！」
「お前が引っ叩きたくなる気持ちも、分からないでもねぇからな」
「な、なに言って」
俺は唖然と口を開けている里久を一瞥して、自分から車を降りた。運転席の車窓を叩いて、パワーウィンドウを下げさせる。
「隆広様、なにを考えているんですか！」
「言ったろ、あいつの気持ちを考えりゃ、これくらいはしょうがねぇ。それよりもトランクのドレス、ちゃんと咲弥子の部屋に届けろよ」
「分かりました。その頬、すぐに氷で冷やして下さい。明日、大変なことになりますから」

「ああ、分かった。ありがとよ」
ジンジン痛む左頬を堪えて、窓を閉めた里久に手を振る。今度は、咲弥子がなにか喚きながら後部座席の窓を開けた。
「ちょっと！　なに笑顔で手を振ってんのよ！」
「痛ぇんだよ！　笑ってなきゃやってらんねぇ！」
「ぅぐっ……ご、ごめん」
「ふん、謝るくれぇなら、人を殴るんじゃねぇよ。さっきのお前には、俺を引っ叩く資格はあった」
「すぐに冷やしなさいよ！」
「ああ」
里久が車をバックさせた。俺は少し退いて、走り去るのを見送る。里久のアウディが完全に見えなくなってから、熱くなった左頬を左手で押さえた。
くそっ、いってぇ！！　自慢じゃねぇが親にも他人にも、引っ叩かれたり殴られたりした経験はねぇんだ。女の平手がこんなに痛ぇとはなぁ。
咲弥子が、ずっとこっちを見ていたな。これで少しは俺に心を開いてくれりゃ、いいんだが。

10

翌日、夕方の6時を過ぎた頃、上機嫌の多香子がオフィスにやってきた。この機嫌のよさは、姉貴のコネで欲しがってたガーレットのバッグを、めでたく買えたようだな。

ほしいほしいと騒いでいた割りに、肩掛けのベルトを掴んでブンブン振り回してやがる。もちっと大事にしたらどうよ。姉貴が泣くぜ。

しかし、本当に戦略変更したんだな、ガーレットは。いかにも高級志向だった今までのデザインと違って、多香子みてぇなのが持ちたがるようなカジュアルなトートバッグになっている。まさか日本のギャルを客層に選んだんじゃねぇだろうが、それにしても真逆だぜ。まぁ、従来のものと平行してやっていくんだろうが。

それはさておき多香子の奴、何しに来たんだか。パーティーでバッグを自慢するんじゃなかったのか？　ケバケバしい色にしか見えねぇ、ショッキングピンクのミニ丈カクテルドレスだが、多香子が着ると妙に合う。自分の背と童顔は自覚してんのか、デザインは所謂カワイイ系だ。まぁ、シックなものを着たところで、失笑を買うだけだからな。

俺はちょうど、今日の書類すべてを捌き終わって、煙草を吸っていた。幸い今夜は予定が何もねぇ。この後『椿』に行って、咲弥子がちゃんとドレスを着ているか、確かめに行くつもりだ。

昨日、自分の就職出来ねぇ理由を聞いて、何か仕出かすかもしれねぇからな。『椿』については、あいつに話してねぇことがまだある。下手に動かれると、今後こっちが動きにくくなっちまう。

里久にその辺を含ませて、咲弥子を送るように行かせたが、上手くいったかな。

多香子が来たのは、そんな時だった。

「こんばんは、お兄様」

「何しに来たんだ？」
「あん、つれない！　パーティーのエスコートを頼みに来たんじゃない」
「……」
　持っていた吸い途中の煙草が、ポロッと手から落ちた。別に驚いた訳じゃねぇが、寝耳に水だったのは確かだ。盛大に溜め息をついて、デスクの上に落ちた煙草を拾って灰皿でもみ消した。
「俺はお前ほど暇じゃねぇぞ」
「あらっ、だって春樹さんがさっき、今日はもうお兄様の予定はないって教えてくれたもの」
　春樹め、余計なことしやがって。
「ねぇ、いいでしょ？　お兄様カッコイイから連れていくと皆喜ぶし、あたしは自慢出来るし、一石二鳥なんだもの」
「今日はそのバッグを自慢しに行くんだろうが」
「そうよ。でも、お兄様も連れていきたいの！」
「お前の取り巻きにも、見た目がいいのはいるだろうが」
「ダメよ！　その辺のイケメンを連れていたって、あたしが目立たないでしょ！」
「俺と一緒でも、お前は目立たねぇだろう」
「違うわよぉ。お兄様が目立つからあたしも目立つんじゃない。とにかく、春樹さんから了解を取り付けたんだから、パーティーに出てもらいます！」
　なんでこいつに、こんな命令されなきゃいけねぇんだよ。納得いかねぇな。
「ほらほら、煙草を吸ってたなら、今日の業務は終わったんでしょ！　早く準備してよ！」
「ったく、やりたい放題だな、多香子」
「お兄様だって、やりたい放題してるじゃない。あたしだって本家の娘だもの、しちゃいけないことはないでしょ！」
　グループ会長とその妹を一緒にするなよ。そりゃお前だって、一

般人と比べたらかなり優遇される立場だが。
「ねぇいいでしょ！　もしかしたら、お兄様好みのスゴい美人が来るかもしれないじゃない」
「阿呆、俺好みの女がお前らのチャラチャラしたパーティーにくるか！」
「チャラチャラなんかしてないわよ！　ちゃんとしたパーティーなんだから！　ああんもう！　この前からお兄様、全然優しくない！」
「甘やかし過ぎるのも、大概にしねぇとな。お前には姉貴も爺さんも甘い。俺くらいは厳しくしねぇとマズイだろうが」
「もういいわよ！　お祖父様に言い付けてやるんだからぁ！」
負け犬の捨て台詞を吐いて、多香子は出て行った。やれやれ、ようやく静かになったぜ。俺は再度煙草を咥えた。
と、いきなり秘書室のドアが開いた。
「隆広様！　どうして多香子様を帰したりするんですか！」
「お前な、ノックくらいしろよ」
「そんなことより、多香子様がご隠居に泣き付いたら事です。冬樹が押さえていますから、今すぐ多香子様と一緒にパーティーに行ってください！」
「ああ？　なんでだ？　俺はこれから『椿』に」
「いいから行って下さい！　『椿』にはパーティーの後に行けばいいでしょう！」
なんか怪しいな。俺が不審げに春樹を見ていると、こいつはさりげなく目を逸らしやがった。
「お前ら、なに企んでんだ？」
「企んでなどいません。多香子様とパーティーに行けばいいのです」
「どうも、お前が多香子に全面協力ってのが、気に入らねぇんだよな。いつもは頭軽いだの尻が軽いだのって、バカにしてるじゃねぇか」
「それは隆広様の誤解です」
よくもまぁ、しれ～っと言い放つもんだな。

「とにかく、藤野咲弥子の件でご隠居は気落ちしておいでです。ここで多香子様にあることないこと吹き込まれると、後々面倒なことにもなりかねないと思いますが？」
ふん、そりゃ一理あるな。
「分かった、一時間だけ付き合ってやるよ」
溜め息混じりで言ってやると、またしてもノックなしで秘書室のドアが開いた。
「やったー！　さすがは春樹さん！　有能よね！」
「阿呆！　お前が下らねぇ脅しを掛けるからだろうが！」
「なによ、お祖父様に告げ口されて困るようなことをしてる、お兄様が悪いんじゃない！　大体、藤野咲弥子って誰よ？」
春樹の野郎、いっそクビにしてやろうか！　こいつが聞き耳立ててるのを知ってるくせに、口を滑らせるんじゃねぇよ。
「お前にゃ関係ねぇ」
「むぅ、いいもん！　冬樹さんから聞き出すから！　冬樹さ～ん、藤野咲弥子って誰ぇ？」
多香子め、大声で叫びながら、ＰＣルームに駆けて行きやがった。
「ったく、お前も多香子に甘いぞ」
「ですが、隆広様も納得されたじゃないですか」
「多香子の言うことを、爺さんが鵜呑みにするとも思えねぇがな。まぁ、万が一ってこともあり得る」
「その万が一に備えるのが、大切なのではありませんか！」
「だからってお前、俺のスケジュールを簡単に多香子の教えるなよ」
「お身内の方ですし、その、多香子様には……」
なんだ、言いにくそうに目を逸らしやがって。まさかこいつ、多香子に惚れてんのか？
言及すると、えらい勢いで否定された。曰く、多香子みてぇな顔も体もロリっぽいのはタイプじゃないそうだ。
「なんだ、弱味でも握られたか？」
「……」

無言は肯定の意味だな。全く、多香子なんかに弱味を握られるなよ、情けねぇな。
「まぁ、そういうことに関しちゃ頭が働くからな、多香子は」
「隆広様もお気を付け下さい」
「誰に向かって言ってる」
「藤野咲弥子のこともありますし」
「ああ。お前が口を滑らさなきゃ、あいつが知ることもなかったがな」
「……」
今更青褪めるなよ、本気で気付いていなかったのか。普段は隙を見せないくせに、どうでもいい場面でたまに大ポカをやらかすんだよな、こいつは。
「名前が知られるくらいは、どうってことねぇが」
「申し訳ありません」
春樹の口から謝罪の言葉か、初めて聞いた気がするぞ。思わずじっくりこいつの顔を見ちまった。
「な、なんですか？　隆広様」
「いや、珍しいものを見たからな」
「珍しいもの、ですか？」
よく分かってない表情で首を傾げる。見た目が美形の冬樹や里久や直人と違って、こいつがやると気色悪いな。しかし、こいつがそのことを分かってねぇとは、驚きだ。
「お前が謝罪するなんて、珍しいだろ」
「それは……私も人間ですから、たまにはそういうこともあると思いますが」
「お前がそうやって謙虚なのが、珍しいって言ってんだよ」
こいつとここで、このまま会話していてもしょうがねぇ。俺が腰を上げると、春樹が隣りの小部屋からパーティー用のタキシードを取ってきた。
「冗談だろ。あいつが出るようなパーティーに、そんなもん着て行

けるか！　つか着替える必要あるかよ？」
「今日の煙草の匂いが染み付いていると思われますので」
とことん嫌煙家だな。面倒臭ぇが仕方ねぇ。その後『椿』に行くことを考えれば、着替えておいた方が良さそうだ。
結局自分で選ぶことにした。春樹はどうも、俺とセンスが合わねぇんだよな。
「多香子に付き合ったら、そのまま『椿』に行くぞ。迎えは里久に来させる」
「分かりました。我々は定時まではここにいますので」
「ああ、じゃあな。おい、多香子行くぞ」
秘書室へ出てＰＣ室に顔を出すと、パソコンの前の椅子に座った冬樹の首に抱き付くようにして、多香子は何か話していた。
「おい、多香子、行かねぇのか？」
「あ、行く行く！　じゃあね、冬樹さん。またね」
愛想よく笑って俺に向かってくる多香子の背後で、冬樹は辟易した顔で肩を揉む仕草をした。まぁ、こいつにまとわり付かれたら、まともな神経ならそうなるだろうな。冬樹に向けて手を挙げて合図すると、苦笑しながら頭を下げた。
「なに？　お兄様」
「お前には関係ねぇ。さっさと行くぞ」
「あん、変なとこ触んないでよ」
細い肩を抱くようにして促すと、心底嫌そうな顔で俺の手から逃れた。
「なんだお前、男に肩を抱かれたことねぇのか」
「やだ、男にそんなことされるなんて、気持ち悪い！」
２５歳にもなって、こんな反応する女は初めて見たな。咲弥子は……まぁ、職業柄慣れてるか。
「ふん、じゃあどうすんだよ」
「これでいいでしょ！」
言いながら、俺の右腕に自分の両腕を絡めてきた。だが、背がち

と足りねぇな。俺の腕に釣り下がってるように見えるぞ。
「お前、もっとヒールの高い靴はけよ」
「むぅ、これでも7センチのはいてるのよ」
「せめて10センチのだな。そうすりゃ、もう少し格好がつくぜ」
「もう、あたしがこれでいいんだからいいでしょ！　早く行こう。遅くなっちゃう」
俺を引っ張るようにしてエレベーターに乗る。地下駐車場で、ここに常駐してるコルベットを見て目を輝かせた。
「コルベット！　あたしの好きな車よ！」
そんなことを言って、嬉々として乗り込む。普通は男にエスコートさせるもんだが、自分で勝手に乗るとは変な奴だ。
駐車場を出てからパーティー会場を訊くと、そこそこに有名なクラブだった。俺でも知ってるところだが、やっぱりチャラけたパーティーじゃねぇか。
「チャラくないってば！」
「会場がクラブだろう。チャラいじゃねぇか」
「もう！　お兄様が出るような、ちょーセレブリティなパーティーと一緒にしないでよ。今度やる東京コレクションのプロモーターが主催なの。有名ブランドの社長やデザイナーも来るのよ。チャラくないでしょ！」
ふん、そこに俺を連れて行くってことは、何かあるな。春樹もやけに乗り気だったし、こいつら何企んでるんだか。
「お前もそろそろ、そういうパーティーに出ろよ。よく爺さんが何も言わねぇな」
「お祖父様はそんなこと言わないもの。うるさいのはお兄様だけよ！」
「見合いの話も来てんじゃねぇのか？」
「そんなのありません！　お祖父様は、あたしがいいと思う相手を連れてくればいいって言ってるもの」
そんなこと自慢気に言うなよ。本当に孫娘には甘いな。そんなこ

と言ってたって、いざ連れてきた男が気に入らなきゃ、絶対に許さねぇんだろうが。まぁ、昔は周りが心配するくらいチャラ男と付き合っていた姉貴が、お堅い大学教授と結婚した前例があるから、逆に安心してるのかもしれねぇが。

「お兄様だって、その藤野咲弥子のこと、お祖父様に話したの？」

「当然だろ。お前とは違う」

とはいえ、咲弥子の素性を知ったらどうなるか分からねぇけどな。

こいつに知れたら絶対爺さんにバラされるからな。冬樹が咲弥子は俺の新しい恋人ってことだけ伝えたらしい。多香子がそれを信じてるのが救いだな。

11

クラブにも駐車場があるのか。会場に着くと、俺のコルベットと比べても見劣りしねぇ高級車ばっかり停まっていた。ふん、それなりの連中が来てるってことか。

多少は期待したが、中身はやっぱりチャラけた連中ばっかりだった。モデルのパーティーだから、こんなものか。都内では有名らしい、広々としたクラブを貸し切ってのパーティー。クラブ独特の薄暗い照明の下、ダンスミュージックが掛かっている。

酒飲んだり軽く踊ったり話したり。俺から見ると、チャラい男女のチャラいパーティーだ。俺が出席させられるパーティーとは違って気楽っちゃ気楽だが、やっぱり俺には時間の無駄にしかならねぇな。

俺の腕にぶら下がる様に腕を絡めていた多香子が、誰かを見付けたのか俺を引っ張っていく。若い連中ばかりのクラブに、明らかに年上と分かる目立つ熟女がいた。シンプルな黒いロングドレスに、総ジルコンのネックレスが煌めいている。年齢に見合ったコーディネイトは、センスがいい。

このパーティーを主催したプロモーターらしい。その女は、俺が来たことでえらく感動していた。

「まさか東海林グループの会長に来て頂けるとは！　よい宣伝になりますわ」

「すごいでしょ！　あたしが頼んだら来てくれたのよ」

よく言うぜ。こいつが外でどういう面をしているか、これで分かっちまったな。もう二度とこいつの誘いには乗らねぇ！

「まぁそうなの。ありがとう多香子さん、感謝するわ」

「ホント！？　じゃあ今度の東京コレクション、あたしをトップにしてね。あと、いくつかトリにもしてほしいわ」

なんつうことを無邪気にねだってるんだ、こいつは。一緒にいて

恥ずかしいぞ、俺は。
女プロモーターは、顔を引きつらせて即答を避けた。「考慮しておきます」とだけ言ったのは、賢明だな。
「妹の我が儘を聞く必要はありません。特別扱いなど、多香子には10年早いですよ。どうぞ、その他大勢と一緒に扱ってやって下さい」
「お兄様！」
「あの、ですが……」
なに尻込みしてんだ。歳の割りに瑞々しい肌艶のプロモーターの顔が、安堵した表情を一瞬見せたのを、俺が見逃すはずねぇだろう。
「遠慮する必要はありません。礼儀を知らない多香子が、ファッションモデルとして働いていること自体、奇跡のようなものですから」
「お兄様、酷いわ」
「本当のことだろう。挨拶の一つも出来ないで、一端のモデルと思うな」
「……」
むくれてそっぽを向く多香子の頭を右手で押さえて、無理矢理頭を下げさせた。
「ほら、よろしくお願いします、だろう」
「……よ、よろしくお願いします」
プロモーターの女は、呆気に取られた顔で多香子を見ている。こいつ、今まで頭を下げたことねぇのか。全くをもって俺は恥ずかしいぞ。
「もういいでしょ、お兄様のいじわる！」
右手から力を抜いてやると、弾かれたように顔を上げる。捨てセリフを吐いて、多香子は一人で奥へと走って逃れていった。今度、真嶋翁に言っとかねぇとな。あれじゃ、多香子の将来が不安だ。
溜め息をついてプロモーターに視線を向けると、まだ呆けた顔をしている。
「我が儘な妹で、いつもご迷惑を掛けているのでしょう」

「あ、は、い、いえ」
正気に戻ったプロモーターは、そんな煮え切らない返事をしている。俺の手前、正直に肯定することは出来ねぇのか。気にする必要はねぇんだがな。
女の背後に、声を掛けたそうな若い男が来たのが見えた。俺はその場を離れて、多香子を探す。途中、アパレル業界やプロダクションやらのお偉方に見付かっちまったが、プライベートだと言って挨拶もそこそこに追い払った。それにしても、見目のいいモデルたちで溢れかえるフロアに、むさいおっさんが複数いると目立つな。
多香子はすぐに見付かった。背が小さくて人影に埋もれていても、妹の姿は見間違えようもねぇ。一緒にいるのは、モデル仲間らしい。みんな同じメイクに同じ髪型、おまけに顔まで高校生みてぇな童顔だ。多少の顔立ちはそれぞれ違うが、パッと見はみんな同じ顔に見える。
そのモデル仲間たちに、今日手に入れたガーレットのバッグを見せ付けている。みんな羨望の眼差しだ。全く、見境なく自慢しやがって、あれでよく敵を作らねぇもんだぜ。
何か話していた多香子が顔を上げて、周囲を見回した。その視線が俺で止まる。そして俺を指差して、隣りにいるモデルらしい女に何かを告げる。その女は、目を輝かせながら俺に近付いてきた。
やれやれ。まぁ、しょうがねぇな。普段出るパーティーじゃ、静かに立ってることも出来ねぇ。それに比べりゃ、ここはまだ暇な方だ。
典型的な日本人顔に、まっきんきんにブリーチした長い髪。いや、ありゃウィッグか？　緩いウェーブが掛かった髪で、顔の輪郭が隠されている。今時の童顔モデルは、大抵こんなスタイルだよな。
はっきり言って誰が誰か区別がつかねぇ。こいつは誰だ？　頭ん中に何人か名前が挙がってるが、分からねぇ。
白い肌にピンクの頬。メイクと分かっちゃいるが、ガチで顔が赤くなっても、これなら分からねぇな。……なんつうアホなことを考

えてんだ、俺は。
そいつが目の前に立った。多香子とどっこいどっこいの背丈だな。普通モデルっつったら、俺くらい背が高ぇだろ。やっぱ日本のファッション業界はよく分からねぇ。
「あ、あの、こんばんは、初めまして。あたし理沙っていいます」
「初めまして、東海林隆広です。可愛い方ですね、お会い出来て光栄です」
上目遣いで俺を見上げるそいつの右手を取り上げて、さりげなくキスをしてやる。理沙か、多香子と同期のモデルだったな。メディアじゃ多香子と仲がいいと言われてる。
「今後の活躍を見ていますよ。頑張って下さい、理沙さん」
夢見心地の顔で惚けてる女に、極上の笑みを浮かべて言ってやった。普段から人気モデルとしてチヤホヤされている女でも、俺クラスの人間と接する機会はそう多くねぇからな。このくらいしておけば、腰砕けになるか惚けて妄想するかのどちらかだ。後は放っておいてもいいから、俺は楽なんだな。
この女も何か妄想を始めたような顔をしたんで、さりげなくその場を離れた。
多香子は相変わらずバッグの自慢に余念がねぇ。モデル仲間からチヤホヤ褒められて、有頂天になっているようだな。
まだ約束の一時間に満たねぇが、義理は果たせただろ。あの輪に近付くと、帰れるものも帰れなくなる。壁際に寄って多香子の携帯にメールを送り、パーティー会場を抜けるつもりだったんだが。
「こんばんは、東海林隆広様」
背後からフランス語で声を掛けられた。しかも聞いたことのねぇ女の声だ。外人なんかいたか？
振り向いてその女を見た瞬間、そいつが誰か分かったぜ。実際に会ったことはねぇが、つい最近写真で見た女だ。
フランス語を話しているのは、他に聞かれたくねぇからか。しょうがねぇから俺も付き合ってやる。周りの連中は自分たちのことし

か頭にねぇようだが、まぁ用心するにこしたことはねぇはな。
「こんばんは、初めまして。まさかこのような場所でお会いするとは、思いませんでしたよ。高嶺美菜さん」
「初めまして、まさか私の名前をご存知とは思いませんでしたわ。写真だけでお断りされるなんて、人生初の屈辱でしたから」
自信に満ち溢れたその微笑みは、先日見合い写真で見た顔そのものだった。
天然の茶髪に、日本人離れした欧米型の面立ち。多香子とその他モデルたちには、整形でもしねぇ限り真似出来ねぇ顔だ。さすがにクォーターだけあるな。咲弥子は両親共に日本人なのに、小夜に化けるとこの女以上の美貌になるのは化粧の威力か。別にスッピンの咲弥子でもいいが。
多香子には逆立ちしても着れねぇ、シンプルでシックなカクテルドレスに身を包み、耳と首元に輝くアクセサリーはサファイアか。どう控え目に見ても、多香子の方が年下にしか見えねぇな。
だが、いつここに来たんだ？
「あなたのような方でも、こんなパーティーに参加されるんですね」
「今夜は特別です。あなたの妹さん、多香子さんが今夜あなたをここに連れて来て下さるとおっしゃったので、お言葉に甘えました」
ふん、多香子が言ってた『俺好みの美人』てのは、こいつのことだったのか。多香子は俺をここに連れてくるためなら、何でもよかったんだろう。だから春樹にこのことをリークしたんだな。それで奴をその気にさせた。そこまでして高嶺とパイプを作りてぇのか、あいつは。怒りを通り越して呆れちまったぜ。
それにしても、高嶺美菜が多香子と知り合いなんて、聞いてねぇぞ。
「失礼ですが、多香子とはどういう関係です？」
「以前、父の会社の事業でＰＲモデルをして下さったことがあったのです。二年前でしたかしら？　その時に少しお話しましたの。でも、あなたのことを知ったのは、祖父がお見合いの話を持ってきた

時ですわ。写真だけでしたが、一目で私の夫に相応しい方だと感じました。祖父もあなたなら文句はないと、言ってましたわ」
言外に、自分たちが気に入ったのに断るとは何事かと、憤っているのが分かった。そう言われてもな。多分、咲弥子に出会ってなきゃ、俺はこいつとの見合いを承知していただろう。見た目といい、話といい、見事なまでに以前の俺好みの女だ。爺さんの目は、まだ狂っちゃいねぇな。
だが、断っておいて正解だったぜ。こうまで東海林を見下しているとはな。
「でも、ここでこうしてお会い出来てよかったです。写真で拝見するより、ずっと素敵な方ですね」
「ありがとうございます。あなたこそ、写真から抜け出たようにお美しいですよ」
一瞬、女の口元がひきつったのが見えた。まぁ、今の意味が分からねぇほど、頭が空っぽって訳じゃねぇらしいな。
「よいドレスを着ていらっしゃいますね。あなたの美貌を引き立てている。ご自分でお選びになったのですか？」
「当然ですわ。私の美しさは私自身がよく知っておりますもの。隆広さんも素敵なスーツをお召しになっていらっしゃいますね。オーダーメイドなんて、流石ですわ」
「大したことはありませんよ、普段着ですから」
俺にとっちゃ仕事で着るスーツだからな。本当のことを言ったまでだが、高嶺美菜は侮辱されたと思ったようだ。うっすら頬を赤く染めて、ハンドバッグを持つ両手が僅かに震えているのが見える。
さて、どう相手をするか。しかし考える間もなく、聞き慣れた甲高い声が聞こえた。
「あっ！　美菜ちゃん」
横から多香子の声がして、俺の右腕に体重が掛かる。高嶺美菜は即座に張り付かせた笑顔を、多香子に向けた。
「ねぇ、約束通りお兄様を連れてきたでしょう？」

「ええ、とても感謝しておりますわ。多香子さんに頼んでよかったです」
「えへへ、こういうことなら御安い御用よ。いつでも言ってね」
「ええ、ありがとうございます」
多香子め、高嶺美菜の外面に騙されやがって。こいつはお前のことを格下に見てやがるんだぞ。と言ったところで、多香子には分からねぇだろうが。人の表面しか見られねぇこいつじゃ、太刀打ち出来ねぇな。
ふん、東海林も甘く見られたもんだぜ。
業界だけのことで見れば、ウチと高嶺建設はライバル関係にあるが、高嶺会長と爺さん自身は昔馴染みで懇意な間柄だ。それを自分も同じと考える辺りは、相当甘やかされて育ってきているな。まぁ、多香子も似たようなもんだが。
「私、隆広さんを諦めませんから。必ず私の夫にしてみせますわ」
「意気込むのは結構ですが、人の心は思い通りにはいかないものですよ」
「私を目の前にしても、お断りなさるんですね。あなたのような殿方は、初めてです」
「それは、良い人生経験をなさいましたね。世の男性全てが、あなたにかしずく訳ではありませんよ」
今度はあからさまに顔をひきつらせた。皮肉が理解出来るのはいいが、自分より上の立場の人間が存在することも理解出来ねぇと、この世界じゃやってけねぇぞ。
まぁ、高嶺家より上の立場ってのも、そうそうある訳じゃねぇが。それにしても、自分ちと東海林を同等に扱うとはな。
「私、ちょっと失礼します」
「ええ、どうぞ」
悔し紛れか、何か考えがあるのか、高嶺美菜は唇を引き結んで、その場を立ち去った。
その後ろ姿を眺めて、多香子が不服そうな顔で俺を見上げる。

「お兄様、何を話してたの？　全然分かんなかった」
「語学くらい勉強しろよ」
「むっ、英語はちゃんと出来るわよ！」
「今のはフランス語だ。じゃあな、俺は帰るぜ」
「え、もう！？　約束の一時間まで、あと１０分あるのに」
その俺を放っぽって、バッグの自慢をしまくってたじゃねぇか。
これ以上用はねぇだろ。
「義理は果たしたろ。それにこれから予定がある」
「分かったわよ！　藤野咲弥子に会いに行くんでしょ！　恋人さんとの時間を割いちゃって、悪かったわね！」
「真嶋翁に電話して、誰かこっちに来させるから、その車で帰れよ。間違っても、パーティーで知り合った男の車なんかに乗るんじゃねぇぞ」
「分かってます！」
口を尖らせてそっぽを向く多香子を一瞥して、クラブから出た。夜の秋風が涼しいな。咥えた煙草に火を点け、パーティーでのストレスを吐き出した。
行きは多香子を乗せてきたコルベットのところで、真嶋翁に連絡を入れる。多香子は今日のパーティー会場をちゃんと真嶋翁に知らせていた。迎えを寄越すように伝えると、既に手配済みだという。流石だな。
携帯には里久からもメールが入っていた。咲弥子は無事に『椿』へ送ったが、思い詰めた様子だったとある。
ふん、やっぱりすぐに『椿』へ向かった方がいいようだな。
「隆広さん」
携帯灰皿に吸殻を捨てた俺の背後から、またしても高嶺美菜の声が掛かる。とっくに帰ったと思ってたぜ。
「高嶺美菜さん、まだいらしたんですね」
振り向くと、何か企んでるらしい顔だ。
「お帰りでしたら、私を送って下さいます？」

「高嶺のお嬢様が、送り迎えもなくパーティーに出席するとは思えませんが？」
「車は返しました。祖父にあなたに送って頂くと連絡しましたら、とても喜んでいましたわ」
全く、よく回る頭だな。高嶺会長を出せば、俺が従うと思ってるのか。爺さんはちゃんと見合いの話を断ってくれたのに、このままだと高嶺の爺さんに誤解されて、要らんことになりかねねぇな。
「俺があなたを送らなければいけない義理はありませんが？」
「あら、隆広さんは紳士だと伺っていますわ。夜中に女の子をこんなところに放り出して、自分だけ帰るなんて非情なことはなさいませんでしょう？」
「ご自分を人質にとは、随分味な真似をしますね」
意識せずに嘲笑がもれた。よくもまぁ、こんな下らねぇことを思い付くもんだ。それが気に入らなかったのか、屈辱にまみれた顔で俺を睨み上げてきた。
「送って下さらないなら、今夜のことを祖父に報告しますわ。東海林隆広さんは非道にも、私を一人夜道に残して車で帰られたと」
俺は呆れて物も言えなかったが、高嶺美菜はそのことを都合よく解釈したようだ。勝ち誇ったような表情になって、コルベットの助手席側に立つ。
「ドアを開けて下さいます？」
断ってもよかったが、何を企んでいるのか探った方がよさそうだな。
ロックを解いてドアを開けた俺の手に、艶やかな笑みを浮かべた高嶺美菜の細い手が重なる。少し気になる触れ方だ。男と触れることに抵抗感はないと察した。
「ありがとうございます」
「家はどちらになりますか？」
運転席についた俺の問いに、意気揚々と場所を告げる。そこは俺のマンションより、ちとグレードは高いところだった。立地にしろ

セキュリティにしろ家賃にしろ、セレブ御用達のようなマンションだ。まぁ、俺のねぐらがそこじゃなくて、よかったけどな。

12

高嶺美菜のマンションは、ここから３０分は掛かる。その上『椿』とは方向が逆ときてる。遠回りになっちまうが、しょうがねぇな。じき９時になるが、まぁ送った後でも飛ばせば１０時前には『椿』に着けるだろう。

俺が運転している間、高嶺美菜は訊かれもしねぇのに自分の身上を話していた。

典型的なお嬢様育ちだな。高校までずっと私立の女子校で過ごし、外の大学に入ってからマンションで一人暮らし。ただし、子供の時から面倒を見てくれたばあやが、一緒に住んでいるという。それは一人暮らしとは言わねぇが、俺は口を挟まずに聞いていた。

高層じゃねぇが、やたらと豪華な外観のマンションだ。エントランスの前に車を停めると、シフトレバーに置いていた右腕に、高嶺美菜の両手が添えられた。

「送って下さってありがとうございます。お礼にお茶を差し上げたいわ。寄っていって下さいます？」

それまでの自信満々な笑みに、女の色気をない交ぜにしている。両手は震えてもいねぇし、断られるとは考えてもいねぇ目だ。こんなに自然に俺を誘うとは、ちょっと驚いたな。

高嶺の爺さんは、可愛い孫娘に下手な虫に寄り付かれたくないと思っているらしいが、実家を出た四年間にお嬢様は男遊びを覚えたらしい。

「高嶺建設のお嬢様が、そんな風に男を招き入れてはいけませんよ」

「あら、あなたなら祖父は怒ったりしませんわ。それに、お茶を差し上げるだけですもの」

熱っぽい視線で俺を見上げ、更に右手で俺の頬に触れた。その触り方は、これで断られた経験がないことを伺わせる。

俺がサイドブレーキを掛け、わざと顔を近付けてやると、艶然と

した笑みを深くする。目を閉じて唇をすぼめたところで確信を持ったぜ。
唇同士が触れる寸前で、高嶺美菜の唇に右手を当てた。ギョッとした顔は、なかなか面白かったな。
「高嶺美菜さんは清楚なお嬢様だと伺っていましたが、とんだあばずれのようですね」
「あ、あばずれですって！？　よくもそんな侮辱をおっしゃるわね！」
「では男好きと言い直しましょうか。こうやって、今まで何人の男を招き入れたんです？」
ずばり言ってやると、ギクリと体を硬直させる。正直といえば聞こえはいいが、こんなに素直に反応されると却って興醒めだな。
「高嶺会長は、あなたが処女だと信じて疑わないようですが、いつまでも隠しおおせるものではありませんよ」
「失礼なことをおっしゃらないで」
「表現がストレート過ぎましたか？　ですが、本当のことでしょう」
「……」
絶句して見開くその目は、何故分かるのかと問い掛けている。
全く、今までこれに引っ掛かっていた男共は阿呆だな。それとも、分かっていて騙された振りをしていたのか。
カクテルドレスから見て取れる体つきは、なかなかのプロポーションだ。お嬢様の体を味わってみたい男は、そりゃ多いだろうな。遊び人なら尚更だ。
「男を甘く見てはいけませんよ。俺は別に男遊びを否定はしませんが、誘う相手は見極めた方がいい。タチの悪いのが引っ掛かると、後悔するのはあなたですよ。今後、男遊びをするなら、それをしっかり念頭に置くことです」
俺の手に添えたままになっていた女の手を、軽く振り解く。俺にしちゃ優しくやってる方だ。高嶺美菜は呆けた顔で俺を見上げている。

「今夜はなかなか面白かったですよ。ですがこれきりです。俺を誘惑するのは、もう終わりにしなさい」
「な、何故？　だって、こんなに親切に諭してくれた殿方は、あなたが初めてよ」
　お嬢様ってのは、みんなこんななのか？　俺の姉妹とは随分違うな。親身になってくれる友人の一人もいねぇのか。
「あなたが男遊びをしていると、高嶺会長に知られたくはないでしょう。今夜のことは見逃してあげます。が、今後も懲りずに俺を誘ったり、夫になれと言うのなら、容赦はしません。高嶺会長だけでなく、企業そのものにも影響は出ますよ。よく、お考えなさい」
　シートベルトを外して運転席から降りようとすると、腕を掴まれた。その感触に、何故か必死さを感じる。
「ま、待って！　もう男を誘ったりしないわ。だから、私との結婚を承諾して。お祖父様は、私とあなたが結婚するのを待ち望んでいるの。東海林のお爺様も同じよ。私たちが結婚するのが、両家にとって最良なの。だから」
「俺の話を聞いていなかったのですか？　今夜、あなたが俺を部屋に誘ったことはなかったことにして差し上げると言ったんです。その意味が分かりませんか？」
　子供に言うように噛み砕いて言ってやると、さすがにバカにされたと分かったらしい。綺麗な顔を赤く染めて憤慨した。
「随分と私を見下しておいでなのね。私は高」
「この際ですから、はっきり言いましょう。確かにうちの爺様は、高嶺会長とは懇意です。更に手を組みたがってもいます。それは企業戦略的な思惑があるからです。表面的な装いに惑わされていると、笑われるのはあなたですよ」
　人が親切に教えてやったのに、高嶺美菜は憮然としている。高嶺会長はこういうことを教えなかったのか、可愛い孫娘なのに。
「それでも私は、あなたを夫にしたいんです！」
「お付き合いもすっ飛ばして夫ですか。随分と性急な話ですね」

別にからかうつもりじゃなかったが、あまりの必死さについ笑っちまった。
「なにを笑うの！？」
「いえ、失礼しました。なにか急がなければいけない事情でもおありですか？」
何気ない問いだったのに、高嶺美菜の顔面が蒼白になる。なんでこう何でもかんでも顔に出るのかね、このお嬢様は。
「そんな風に顔色を変えたら、何かあると肯定しているようなものですよ」
「あ、あなたが変なことを言うからです」
「まさかと思いますが、妊娠されているんですか？」
男遊びをしているとはいえ、避妊くらいはしっかりやっていると思ってたぜ。が、高嶺美菜は今度こそ、この世の終わりのような顔をしやがった。驚いたね、自分の立場を全く分かってねぇのか、このお嬢様は。
「俺を夫にと、そこまで拘るのは、相手の男と俺の血液型が同じなんですね」
「……」
「避妊するように言わなかったのですか」
「だって、毎日基礎体温測っていたし、安全日だったから。それに、他の殿方はちゃんとコンドームを付けて下さっていました。それなのに……」
なるほどな。基礎体温測ってると、妊娠がすぐ分かるってのは本当の話だったか。
つか、スキンも付けねぇ男と、なんでセックスなんかするのかねぇ。そういう男だって、見抜けなかったのか。一体今まで何人とセックスしてきたんだよ。お嬢様が危険な遊びをしてやがる。
しかし俺も舐められたもんだな。誰の子か分からねぇ腹ん中の子供の父親になれってのか。呆れていると、俺から顔を逸らして事情をポツポツ話し始めた。

「中絶をするには、男性の合意が必要でしょう。あなたが婚約して下されば」
「俺との婚前交渉で出来たことにして、降ろしてしまおうと思ったんですか」
「今夜、部屋に来てくだされば……」
全く、何を企んでいるのかと思えば。俺も軽く見られたもんだな。
「相手の男は、何と言ってるんです？」
「子供が出来たって言ったら、連絡が取れなくなってしまって」
声を詰まらせて涙をポロポロこぼしている。咲弥子の涙には、信じられねぇくらい心を動かされたのに、この女の涙を見ても何の感慨も起きなかった。むしろ怒りを感じたぜ。
泣くくらいなら、ろくでもねぇ男とセックスなんかするんじゃねぇ！　……と、喉まで出掛かって何とか堪えた。
「あなたに産むつもりはないんですね？」
バッグから出したレースのハンカチで目を押さえながら、何度も首を縦に振る。
「なら、高嶺会長やお父上に正直に相談しなさい。きっと秘密裏に、腕のいい産婦人科医で中絶手術の手配をしてくれるでしょう」
「そんなことしたら、私は」
「まぁ、叱られるでしょうね」
言った途端に泣きわめかれた。可愛い孫娘だ、勘当まではしねぇだろうが、一人暮らしはもう出来ねぇだろうな。つか、俺との間に出来た子だなんて高嶺の爺さんが聞いたら、絶対中絶なんて選択肢はねぇだろうよ。とっとと準備を始めて結婚させられるのがオチだ。
「何とかなりませんか？」
「何ともしようがありません。正直に話すのが得策です。もしあなたがお話されないのであれば、俺が有効活用させて頂きますよ」
「有効活用？」
おうむ返しにポカンと訊いてくるとは、こいつは本当に何にも分かってねぇんだな。

「高嶺会長を揺さぶるいいネタですからね」
「揺さぶるって……」
「分からないのですか？　あなたのそれは、立派なスキャンダルなんですよ。高嶺家にとっては、何としても揉み消したいネタでしょう。あなたもそれが分かるから、自力で何とかしようとしたんじゃないんですか？」
「……」
「3日、猶予をあげましょう。その間にご自分でお話なさい。3日過ぎてもあなたが何の動きもしなければ、俺が動きますよ」
俺は車を降り、助手席側に回った。ドアを開けてやると、呆然とした顔で高嶺美菜が降りる。
「言っておきますが、俺は本来こんなに優しくはないですよ」
「あの、赤ちゃんのことは抜きにしても、私との縁談はダメですか？」
「残念ですが、俺にはもう決めている女性がいますので、あなたが入る余地はないんです」
「それは、もしかして小夜っていうホステスのことですか？」
ふん、知っていたか。まぁ冬樹は心配するくらいネットで噂になってるなら、誰が知っていてもおかしくねぇか。多分、高嶺の爺さんにも俺が小夜の客になったという噂は、耳に届いてるんだろうな。
「そうです」
「ホステスなんかに、私は負けたんですか」
「少なくとも彼女は、妊娠という愚かな真似はしませんよ」
若干の嫌味も込めて揶揄すると、あからさまに傷付いた顔を向ける。だが、何も言うことなくマンションへと入っていった。
やれやれ、これでやっと『椿』へ行けるぜ。スーツの内ポケットから煙草を取り出し、一本吸う。美味いな。腕時計を見ると、既に10時を回っていた。全く、多香子に付き合うとろくなことにならねぇな。
瞬く間に吸いきって、二本目を咥える。明日にでも、今のネタを

春樹に教えてやろう。少しは懲りて、高嶺とパイプを作ろうなんて考えは、引っ込めるだろう。多分。

そうだ。多香子と共謀して高嶺美菜と会わせるよう仕組んだ、そのペナルティは与えねぇとな。

ふむ、今考えてもしょうがねぇか。先ずは『椿』に行かねぇと。咲弥子の奴、先走ってなきゃいいんだが。

１２（後書き）

次回から咲弥子視点になります。

1（前書き）

咲弥子視点

1

昨日は散々だった。隆広と出会ったあのバーで迷惑を掛けちゃったと思って、お詫びに飲みに行ったらそこで元凶と会っちゃうし。

その上、あたしが就職出来ない理由を聞かせてくれるっていう話につられて、あいつのオフィスについてっちゃって。そこでお店で着るドレスを押し付けられて、あいつの秘書がいるのに誘いに乗っちゃって、キスとペッティングに酔っちゃったりしたのよね。

ああ……思い出しても腹が立つ！

しかも、就職したかったらお店をやめろなんて、アホか！　ママがあたしの就職を、妨害する訳ないじゃない。いい加減なことを言って、あたしを秘書にしたいんだ。なんて野郎よ！　絶対に信じないんだから！

でも……帰りに部屋まで送ってきた吉永里久の言葉が、ずっと頭に残ってる。

「隆広様は信頼のおける方です。単にあなたがほしいだけではなく、あなたのことを一番に考えて下さっているのだと、僕は思います。たとえ女性が相手でも、黙って殴られる方でもありません。それだけあなたに本気だということを、忘れないで下さい」

あんな綺麗な顔した男、初めて間近で見たよ。ああいう人に真顔で語られたら、つい信じちゃいそうになる。

ホントに昨日はビックリしたな。あいつがまさか、あたしの平手打ちを避けずにひっ叩かれるなんてさ。思いっ切り殴っちゃったよ。なんか悪いことしちゃったな。

いやいや、あたしがそう思うことを見越して、わざと殴られたのかも。……そんなこと思い付くような奴じゃないか。プライド高いしね。

ママが、いちいち次はどこの会社に受けるのか訊いてきたのは、あたしのことを本当に親身に考えてくれているんだと信じてた。で

も、高級クラブのママがバイトホステスにそこまで心を砕くのは、よくよく考えればちょっとおかしいのかも、とは思う。もしかしたら、本当にあたしを就職させたくないのかも。……いやいや、あいつの言葉を信じちゃダメ！

今日だってこれからバイトだよ。ちゃんと行かなきゃ、お給料はもらえないんだから。あいつの話を信じちゃいないけど、ママに会ったらどんな顔をしたらいいか分からない。いつも通りに振る舞える自信がなかった。

ベッドの上で、壁に寄り掛かって膝を抱えた。

昼間、都心からちょっと外れた、でも郊外ってほどでもない場所にある、小さな印刷会社に履歴書を出しに行った。もう職種とかそんなの関係なしに、小さい会社に片っ端から行ってみることにした。元々、そんなに大きな会社に入ろうなんて思ってもいなかったし。

履歴書を出すだけなのに、何故かそのまま面接みたいになっちゃって。その会社には一人だけっていう、優しそうな中年の部長さんが相手だったから、感触はいいかなって思ったのに。その場で断られてしまった。

今までは郵送か電話で断られていたから訊けなかったけど、こんなチャンスはないと思って、どうしてあたしは駄目なのか訊いてみた。優しいというか気弱そうな部長さんの表情が、とっても恐縮って感じの顔になって、「君を雇うことは出来ないんだ」って言われちゃった。

これが相手が隆広だったら、もっと強く突っ込んで訊けたけど、あのおじさんの顔を見ていたら、あたしが何か悪いことしてるみたいに思えてきて、何にも言えなくなっちゃったんだよね。なんかもう、本格的に落ち込む。

まさか、本当にママが裏で手を回してるの？　そんなこと信じたくないし、信じられないけど。履歴書を出しに行った先で、初対面の部長さんにあんな風に言われたら、嫌でも勘繰っちゃうよ。

ふと顔を上げると、昨夜吉永里久が丁寧にハンガーに掛けていっ

た、3着のドレスが目に入った。タンスに掛けてある、このアパートには似つかわしくないゴージャスなドレス。貧相な部屋の中で、そこだけ異彩を放っていた。

もしこのままどこにも就職出来なかったら……。

奨学金の返済は、多分卒業までには終わると思うけど、生活するのにお金は必要だもん。このままホステスを続けることになるのかな。でも、もし本当にママがあたしを就職させたくないって思っているなら……それを知っていて続けるなんて、出来ないよ。

そうしたら、もう隆広の秘書になるしか道がなさそう。東海林グループ会長の秘書なんて、確実にお給料はいいだろうし、あたしなんか普通じゃ絶対に雇ってもらえないところだけど。隆広のっていうのがどうしても引っ掛かる。

男ばっかりってのは、まぁ百歩譲っていいとしても、隆広は絶対やらしくちょっかい出してくるよ。あたしもセックスは嫌いじゃないから、きっと流されて受け入れちゃう。あいつ上手いもんね。

ハッ！　なに考えてんのよ、これじゃ欲求不満な女じゃないの！

膝を抱えたまま、頭をブンブン振って、変な考えを追い出す。

はぁ、あいつと出会う前に戻りたいよ。なんであの時あのバーで会っちゃったのさ。っていうか、いくら就職が決まんないからって、泥酔して男を誘うなんて、普段のあたしじゃ絶対しないのに！

気が付くと、いつの間にかバイトに行く時間が迫っていた。このまま悶々としていてもしょうがない。お金を稼ぎに行かなきゃ。

沈んだ気持ちでシャワーを浴びて、バスローブのままドレスの前に立った。この3着の中から着ていけって？　嫌だけどしょうがないよね。

あいつがお店に来て以来、あたしをヘルプに付かせるお客さんが増えた。指名はさすがにバイトなんで、あんまり増えないようにママがしてくれてる。その気の遣いようは、他のバイトのホステスから睨まれちゃうくらい。もしかして、あたしが大学を卒業するまで待ってるのかな。大学を卒業出来ても、就職が決まっていなかった

ら……まさかママは、それを狙っているとか？　ダメだ、悪い方向にばっかり考えが行っちゃってる。あいつのせいだ。

でも、隆広があたしの客になったって、噂が流れているっていう話は本当だと思う。あたしを指名しようとするお客さんが増えたし、お店の中で妙に注目を浴びてる感じになることが多くなった。それも興味津々な、お世辞にも気分がいいとはいえない視線。

それにこの前、お客さんから哂われているような気がして、落ち着かない時があった。あの時は、自前のスーツを着てたんだよね。ちょっと派手な蛍光色のツーピースで、見るからにお水な女のスーツ。あの笑いが何なのか、ずっと分からなくて嫌だったけど、昨日隆広の話を聞いて納得した。あたしの、あいつの言うところの安物の服を笑ったんだよね、きっと。それが、あたしを通して隆広を笑ったんだとしたら、由々しき問題だわ。

あたしのせいで、東海林グループの評価や株価が下がったなんて、言われたくないもの。だから、この無駄に豪華なドレスを、着なきゃいけないんだ。はぁ。

ガックリ肩を落として、3着のドレスを見た。薔薇のオーガンジーのドレスと豪華刺繍のチャイナドレスとシックなイブニングドレス。抵抗なく着られるのはチャイナドレスかなぁ。刺繍は派手だけど、胸元はかっちりガードされてるし、裾を捌く必要なさそう。

アクセサリーのイヤリングは、中華風の飾りにくっついてるこのキラキラした石、多分ルビーだよね。そこらの宝飾店で見るちっちゃいのなんかじゃなくて、結構大粒な紅い石。それがこんなたくさん付いててさぁ、耳が重たくなるんじゃないの？　っていうか、絶対落っことしちゃうじゃん！

下着まで揃えてあるよ。どこまで周到な奴なんだ！

着てみるとサイズはピッタリ。腰周りはキツくもなければダブついてもいない。丈も長過ぎず短過ぎず。こうやって今まで女を落として来たんだな。あいつに惚れていてこんなプレゼントされたら、女ならもう有頂天だよね。あたしは迷惑だけど。

今日は髪型もドレスに合わせるのがいいかな。髪飾りが一緒に入ってたもんね。中華風というと、お団子を2つ作って頭の左右に乗せるやつか。初めての髪型だよ、上手く出来るかな。

鏡の前で髪と格闘すること15分。何とか、形になったよ。いわゆる中国娘みたいな髪型。それに、ドレスにくっ付いていた髪飾りを付けた。イヤリングに合わせたのか、ルビーがついた簪。紅い石を繋いでるこの鎖は、プラチナだよね。ホントに無駄にお金が掛かってるよ。

赤地のチャイナドレスに施されてる、豪華な金糸の刺繍は鳳凰。ハンガーに掛かってる時は、あまりよく分からなかった柄が、着てみると浮き上がるように見えてくる。こう、翼を広げたようなデザインで、メチャクチャ目立つんですけど。しかも長袖でロングだから、全身赤と金だらけ。

鏡の前に立つと、なんちゅう存在感だろうね。どうしよう、こんなの着て行ったら、今までの比でなく半端なく嫌がらせされるよ。しかも靴がこれまた、高いヒールでさぁ。中国服なら布みたいな靴じゃないのか！　ってツッコミしたくなる。

こんなんだったら、薔薇のオーガンジーかイブニングドレスの方が、まだよかった！　なんちゅうもんを贈り付けるんだ、あいつは！

いやいや、あいつがいないところで、一人文句を言っててもしょうがない。

うん、無駄なことしてても時間が勿体無いや。早く出ないと、タクシーを掴まえられなくなる。今までは電車で通ってたけど、こんな派手派手なドレス着て電車に乗る勇気は、あたしにゃないよ。

こんなドレス着ちゃったら、安物の鞄は持てないね。ちょっと考えてから、隆広がくれた白いバッグを持っていくことにした。赤と金のドレスには色が合わないかもしれないけど、このドレスのお値

段に見合う鞄といったらこれしかない。
でも、持ってみると別に変じゃなかった。赤と金の服の中に白い鞄が、とても馴染んで見える。これで行くか。
準備を整えて、玄関で靴をはいたところで、ドアの外から呼び鈴が鳴った。
このタイミングで？　こんなチャイナドレス着ているのを見られちゃうなんて、やだな。このアパートには不釣合いだよ。
迷っていると、また鳴った。しょうがない、笑われてもいいや、と覚悟を決めてドアを開けた。
なんでこいつがここにいるんだろう？　唖然と口を開けて、そいつを見上げちゃったよ。
「こんばんは、藤野咲弥子、さん。隆広様の命令で、『椿』まで送りに来ました」
「はぁ、どうもご苦労様です。っていうか、タクシーを掴まえるからいいよ？」
「そういう訳にはいきません。そんなチャイナドレスで街中を歩いたら、どこぞのコスプレーヤーかと思われますよ」
それは隆広のせいでしょ！　言わない代わりに吉永里久を睨んでやった。全然効果なかったけど。
「それで絡まれたらどうするんですか？　大人しく送られた方がいいと思いますが？」
「……分かったよ、一緒に行けばいいんでしょ。でも、お店の目の前に車を停めるなんてこと、しないでよ！」
「……分かりました」
ホントに分かってんのかな。妙な間があったよ？　どうもあいつの秘書って、あいつと同類のような気がするんだよね。
玄関を出てドアに鍵を掛けたら、先に歩くよう促された。レディファーストを気取ってるのかと思っていたら、「素っ転ばれて巻き込まれるのはご免です」だって。なんて失礼な奴だ！
こんなところで素っ転んでいたら、お店で歩くなんて出来ないよ。

階段だって軽やかに降りてやるわい。そう意気込んでいたのに。
「エレベーターはこっちですよ」
「分かってるよ！」
くそぉ、なんでこう人の出鼻を挫くのさ！　プリプリしながら狭いエレベーターに二人で乗ったら、呆れた目で見下ろされた。
「なによ？」
「もっと愛想よく笑えばいいのに。せっかく美人に化けてるんだから」
「化け……せめて、美人になってるって言ってよ」
「化粧の威力って凄いんだな」
「それって嫌味？　あんたは素でも綺麗だからいいだろうけどね、そんな人間そんなにゴロゴロいないよ」
こいつが女装でもしてお店に出たら、それこそジェラスの嵐だろうね。男だって思われないんじゃない？　それくらい綺麗だもん。多分メイクなんか必要ないよ。
心の中でそう言ってやっていたら、溜め息をつかれた。読心術でも会得してんのかと慌てちゃったよ。口から出てきたのは、別のことでちょっと安心した。
「隆広様の前でも、いつもそんななのか？」
「なによ文句ある？」
「いや、よく隆広様が許してるなと思って。それだけあんたに」
「だあぁぁ！　言うな！！」
どうせ、それだけあたしに惚れてるとか、言うつもりだったんでしょ！　聞きたくないから、大声で遮ってやった。
昨日と随分態度が違うじゃん。昨日はあなたとか言ってたのに、今日はあんた呼ばわりかい。まぁ、敬語なんか使われるよりマシだけどさ。こいつの方があたしより年上でしょ。
古いエレベーターが、ガッタンと音を立てて1階に着いた。アパートの前に停まっている見るからに高級車は、こいつが乗ってきたやつだよね。吉永里久が、当たり前のようにドアを開けてくれる。

あああもう、一生こういうことに慣れたくはないわ。

2

お店の前に車を停めないでって言ったのに！　吉永里久は、やっぱり隆広と同類だった！

「どうしてもっと、前か先で停まってくれないのよ！」

「ちゃんとあんたを送り届けるように、命令されているからな。いくら銀座でもそんな格好でいれば、何が起こるか分からないだろ」

だからってさぁ、ホントにこんなお店の真ん前なんて。しかも、こんな美形にエスコートされて車を降りるところを、同僚のお姉様方に見られちゃった。うう、あの目が怖いよ。

やだなぁ。最近ホントに風当たりがきつくて、あたしなんか眼中になかったはずの、売上げナンバー1のお姉様にまで睨まれるようになっちゃったし。

今までは、何となくママが守ってくれてるところもあったのに。もしかして、本当にあたしを専属のホステスにしようと思っているのかな。だから、そういうことも自分で処理出来るようにしろってことなの？

「ねぇ、あんたさぁ、ママのこと何か聞いてる？」

「あんたの就職を妨害してるって話なら、知ってるぞ。あんたを『椿』のホステスとして買ってるってことだろ。いいことなんじゃないか？」

「あたしは、何だか裏切られた気分。お母さんみたいに思っていたのに」

あいつの秘書にこんな弱気なとこを見せちゃったよ。しまったなぁって、地味に落ち込んでいたら妙に実感のこもった言葉が返ってきた。

「僕は血が繋がっていても、親だと思ったことは一度もなかった。他人なら尚更じゃないのか」

「なにそれ、どういうこと？」

この前の隆広の言葉からは、あたしの中のママを汚された感じがしたけど、こいつの言葉は違う響きに聞こえた。変なの。
吉永里久は、どうしてだか失敗したっていう表情で、ちょっと横を向いた。やっぱりこいつ、綺麗な顔してるなぁ。隆広はイケメンだけど、こいつは美形だね。こんな男が存在してるってのが不思議なくらいだよ。
「僕は実の親からネグレクトされて、施設でも虐待されてホームレスってたところを、隆広様に拾われたんだよ。あんたも施設育ちで自分は不幸って思ってるかもしれないけど、僕に言わせればあんたは恵まれてる」
「あたしは別に自分が不幸だなんて思ってないよ。でも、隆広よりはあんたから聞いた方が、なんかずっと信用出来るね。ママは、やっぱりあたしを就職させたくないんだ」
「だから、昨日から隆広様がそう言ってたろ。信用しろよ」
そう言われて、分かったと言うのも何だか癪だ。黙って吉永里久を見上げていたら、溜め息をつかれたけど。
「後から隆広様が来る。こんなに一人の女に執心してるあの人は、初めて見たよ。秘書になるなら、僕は心からって訳じゃないけど、歓迎はする」
「や、別に秘書になるなんて言ってないし、決めてもないし」
「真っ当な職業に就きたいんなら、一番の近道じゃないか」
「そりゃ、そうだけどさ」
そんなこと、言われなくたって分かってるわい！　でも……。
「ママが、本当にあたしを本物のホステスにしたいんなら、辞めないといけないよね」
「そもそも、就職する時には辞めるじゃないか」
「分かってるわよ！　それとこれとは違うの、気持ちが！」
全くもう、こういうところは隆広と同じだ！　男ってみんなこうなの？　昔の彼氏の言動を思い出そうとして、やめた。あんまいい思い出ないもん。

それよりも、こいつと隆広の言ってることが真実なのかどうか、ちゃんとママに確かめなくちゃ。
背後から吉永里久の視線と、周囲から同僚たちの視線に晒されながら、お店に入る。ふかふかの絨毯に、フロントの棚からは生花のいい香りがした。白薔薇はママの好きな花だよね。
黒服のボーイたちが準備をしてる中、真っ直ぐにフロアを突っ切って、控え室に向かった。途中、フロアの奥にいるママが見えたけど、心の準備もしてないし、どうやって確かめるかも考えてない。今日はとにかく、ママが本当はどう思っているのかを、ちゃんと見極めることにしよう。
「ちょっと、小夜」
控え室に入ったところで、早速お姉様方に呼び止められた。とってもご機嫌斜めな声。無視したかったのに、見事にぐるりと周りを囲まれちゃった。これじゃあ逃げることも出来ない。
「なんでしょうか？」
「今日はまた、随分と豪華な衣装じゃない。あのイケメンの会長さんからもらったの？」
「それしかありませんから」
隆広がここに来てから、こうして絡まれるのはこれで2回目。この前は、あいつが来た日の翌日だった。みんな行動が早いよ。あんまり口答えするのもよくない気がするけど、気取ってるだの偉そうだのと誹られるよりはマシだった。
「しかも凄い美形に送ってもらっちゃって。いいわねぇ、どうやってあんなセレブと知り合ったのかしら？」
「たまたまバーで会っただけです」
タイムマシンがあって過去が変えられるなら、あいつと出会う前にひとっ飛びしていきたいよ。本当に。
「いったっ！」
「素敵なイヤリングね。あたしに頂戴よ」
いきなり耳をむしり取られるような勢いで、イヤリングを取られ

た。これがピアスだったらと思うと、ゾッとしたよ。
「いいわね、あたしにも片方頂戴。こんなの欲しかったのよねぇ」
さっきよりも強く、ルビーのイヤリングをむしり取られる。欲しいならあげるから、さっさと解放してよ。隆広ってさぁ、こういうホステスの内情、全然分かってないよね。あたしがこんな着けてたら、こうなるってちょっと考えれば分かることなのに。まぁ、着けてきたあたしも悪いのかもしれないけどさ。
痛む耳を押さえて、ずっとうつむいていた。目を合わせたら、それこそ生意気だの何だのって、うるさく罵倒されるからね。これで辞めていったホステスも、たくさん見てきたし。
「じゃあ、あたしたちはこの簪をもらうわ」
だったら、そっと抜いてくれればいいのに。ついでに綺麗にお団子にした髪を、グシャグシャにしていく。全くもう、どうしてこんな陰険なことしか出来ないんだろ、女って。
万が一のことを考えて、バッグの中にブラシと赤いリボンは持ってきている。お店が開くまでには、直せるだろうなと思っていたら、今度は抱えるように持っていたバッグが奪われた。
「あっ、ちょっ！」
「まぁ、ガーレットのバッグなんか持っちゃって。あんたにはこんな白くて綺麗でお高いバッグは似合わないわよ」
床に中身をばら撒かれて、いくつものピンヒールが白いバッグを踏ん付けて行く。今時、小学生だってやらないよ、こんなイジメ。
高級バッグを足蹴に出来て満足したのか、お姉様たちは笑いながら解散していった。やっと解放されたよ。煌びやかなホステスのこういう裏の顔を、お店のお客さんたちに見せてあげたいよね。
お財布やら携帯やらメイクポーチやら、散らばった中身をバッグの中にしまった。あたしと同じバイトのホステスたちが、遠巻きに見ているのが分かる。同情するような視線だけど、絶対にあたしに声を掛けたりしない。そんなことしたら、明日からは自分が絡まれるからね。

足蹴にされたバッグを手にした時は、ちょっとだけ惨めに感じた。あたしが足蹴にされたような、そんな気分になって。隆広がくれたものだけど、バッグに罪はないもんね。ふん、負けるもんか。

奥の化粧台に向かおうと足を踏み出したところで、４つの手に背中を思いっ切り押された。

「いだっ！」

しまったと思った時には、バランスを崩して無様にうつ伏せで落ちていた。肘と膝を床に打ち付けちゃって、しばらくの間しびれて動けなかったよ。

「あらあら、大丈夫？　着慣れないドレスには、気を付けなくちゃ」

「……っ」

いい大人がさぁ、つまんないことするよね。やれやれ、と思って立ち上がろうとしたら、足首に激痛が走った。それこそ、うずくまっちゃうくらいの痛さ。ヤバイよ、これ。まともに歩けないかもしれない。

どうにも立てなくて、腫れ上がった右の足首をずっと押さえてうずくまっていたら、軽く肩を叩かれた。また意地悪なお姉様か、とシンデレラな気分で顔を上げると、あたしと同じバイトの子だった。

「あの、大丈夫？　これ……」

「あ、ありがと」

冷たいおしぼりを持って来てくれていた。それを広げて、熱を持ってる足首に当てた。うう、気持ちいいというより痛いよ。涙が出てきそう。

「あの、ごめんね。何にも出来なくて」

「あはは、いいよそんなの。それより早く離れた方がいいよ。あんたも目を付けられたら、ヤバイでしょ」

その子のサッと青褪めた顔を見て、さっきのはよっぽど酷いものに映ったんだと、他人事のように思っちゃった。

さてと、ずっとこのままでいる訳にもいかないよね。髪も直さなきゃいけないし。痛いけど、我慢して何とか立ち上がった。

うう、とてもまともに歩けない。とりあえずヒールを脱いで、裸足でびっこを引きながら近くの化粧台に辿り着いた。どうしよう、これじゃあヒールをはけないよ。うーん、ペディキュアしてるし、裸足でも変じゃないかな。お店の絨毯はフカフカでとっても柔らかいし。

ちょっと温んだおしぼりを、足首に巻いたままで椅子に座って、乱れた髪をほどいてお団子を作り直す。さっき格闘したお陰でコツを掴んだからか、すぐに綺麗に直せた。取られた簪の代わりに紅いリボンで括ると、さっきよりもぐっと中国娘っぽくなった。

問題はやっぱり足だね。こんなに腫れ上がってたらヒールなんてはけないし、とてもじゃないけど痛くて歩けないし、やっぱり素足でいるか。変に思われるかもしれないけど、まぁ、そこまで見る人もいないでしょ。これだけ衣装がゴージャスだから、そっちに視線が行くもんね。

「小夜ちゃん」

うおっ、ママがあたしの背後から近付いてくる。あたしは振り向くことが出来ず、鏡越しにママと目を合わせた。やっぱりちょっと気まずいな。

ママは心配そうにあたしを見てる。こうしていると、隆広や吉永里久の言うことは、やっぱり嘘だったんじゃないかって、思っちゃう。そうだよ、あれが真実だって決まった訳じゃない。

「もうじき開店よ。出られる？」

「あ、はい」

「そんな足でヒールがはけるの？」

「えっと、今日は裸足で。紅いペディキュアしてるので、そんなに変じゃないかなって思うので。歩くのは、まぁ何とか」

「そう、頼もしいわね。それじゃ、今日はヘルプには付かなくてもいいから、ご指名のお客様だけお相手して差し上げて。それまではここで休んでいていいわ」

「はい、ありがとうございます」

一昨日まで何ともなかったママとの会話なのに、今は心臓が口から飛び出そうなほど緊張してる。耳元で心臓が鳴ってるみたい。

ママが残っていたホステスたちを促してフロアに出て行く。一人残された控え室で、鏡の中のあたしを見つめていると、ちょっとだけ目に涙が浮かんだ。すぐにティッシュで拭き取る。

「ホステスはお金と生活のため、でも一生の仕事にはしたくない。あたしはＯＬになりたい。だから、ママとはちゃんと話さなきゃいけない。もしそれでママに嫌われたとしても、あたしは耐えられる？」

鏡の中のあたしは、現実のあたしと同じ様に首を傾げて、同じ言葉を発していた。答えなんか、あるはずないよね。あたしが決めるしかないんだもん。

3

痛い足を引きずらないように注意してフロアに出たあたしに、意地悪お姉様方はちょっと驚いた顔をしていた。

ママが指名が入るまで控え室で休ませてくれた。その間ずっと氷を当てていたから、足首の腫れが少し引いて何とか靴をはくことが出来た。痛みは殆ど変わらなくてちょっと足元がぐらつくから、転ばないように気を付けないと。

さすがにさっきあれだけ痛めつけたからか、お姉様方も足を引っ掛けるなんてセコイ真似はしてこなくてホッとしたよ。

ご指名してくれたお客さんは、いつもの社長さんだった。よかった、少しは気が楽だもん。

社長さんは、あたしが隣りに座る前から唖然と口を開けていた。この前の桜色のドレスの時だって、こんな顔はしてなかった。それだけこのチャイナドレスは目立つってことだよね。全くもう、あの俺様御曹司め！

「こんばんは、社長さん」

「小夜ちゃん、今夜は一段と綺麗だね」

おお、さすが還暦を越えたオジサマだ。目立つドレス姿も、言葉を変えればそういうことか。言うことが大人だよ。あいつに見習わせたいわ！

「ありがとうございます」

「あの東海林隆広が小夜のバックについたという噂は、本当らしいね」

まさか、いきなりそういう話題になるとは思わなかったよ。どう返したらいいか、咄嗟に迷って曖昧に笑うしか出来なかった。

社長さんに水割りを作って差し上げることで、なんとか誤魔化した。

「小夜ちゃんはそういうプレゼントは、受け取らないと思っていた

よ」
　いや、受け取らさせられたんです。反論したいけど、それによってこの会話の展開やら、この社長さんのあたしや隆広の見方が変わるとしたら、簡単に受け答え出来なかった。
　といって、黙っている訳にもいかないんだけど、どうやって話を逸らしたらいいのか。
　くそぉ、こんなプレゼント、欲しくてもらった訳じゃないわい！
　心の中であいつを罵倒するしか方法がない。しかも、足が更に痛くなってきたよ、どうしよう。
　あたしが黙っちゃったのを怪訝に思ったのか、社長さんが顔を覗き込んできた。
「小夜ちゃん？」
「あ、すみません。ちょっと考え事をしてしまって」
　ニッコリ笑って社長さんにお詫びした。社長さんがこの笑顔に騙されてくれたとは思わないけど、何も言わずに話題を変えてくれた。やっぱり対応が大人だ。
　あたしは生まれた時から父親の顔を知らないから、お父さんがいたらこんな感じかなぁと思うことはある。別に、お客さんの中にお父さんがいたらいい、なんて思ったことはないけどさ。逆にちょっと複雑な気分になるしね。
　それからはいつもの話題になって、ホッとしつつ楽しく過ごせた。ホステスが楽しく過ごしちゃいけないのかもしれないけど、あたしのお客さんてみんな変に言い寄ってきたりしないんだよね。
　お姉様方はお客さんからしつこくアフターに誘われたり、足や腕を触られているから、あたしに対する嫌がらせって隆広に気に入られたってことだけじゃないのかも。
　なんかもう、今まで目に付かなかった色んなことが見えるようになっちゃって、ここで働くのが嫌になっちゃうじゃない！　やっぱり隆広がここに来たのが、そもそもの原因じゃないか。あいつめ、やっぱり疫病神だ！

それに、さっき吉永里久が後から隆広が来るなんて言ってたけど、全然来ないじゃん！　１０時を回って社長さんも帰っちゃったし。まぁ、お陰で控え室で少し休ませてもらえてるけど。

お姉様方はみんなフロアに出払ってるから、一人なのがホッとする。右足首には氷を入れたビニール袋を巻いている。社長さんのお相手をしている間に、かなり痛んできたから、この冷たさが気持ちいいよ。

明日は病院に行かないと。これじゃあ履歴書を出しにも行けないよ。鏡の前で頬杖ついて溜め息をついていたら、ママが顔を出した。珍しいな、普段はフロアに出っ放しだし、休む時はママ専用の控え室があるのに。

「小夜ちゃん、ちょっといいかしら？」

「あ、はい」

ママがあたしの隣の椅子に座った。今日は百合をあしらったオーガンジーの漆黒のドレス姿。黒百合ってのも、ママに似合ってカッコイイよね。銀座の高級クラブのママは、大抵着物を着るからウチのママはちょっと珍しい人みたい。アップにした髪には、煌くダイヤモンドのフレンチコーム。熟女の魅力ムンムンで素敵だなぁ。このママがあたしを裏切ってるなんて、思いたくない。やっぱりあれは嘘だよ。

「小夜ちゃん、なかなか就職が決まらないでしょ」

ドキッとした。いつもの会話でも就職の話は出てくるけど、今日はなんだか雰囲気が違う。

「あ、はい……」

「どうかしら、卒業してもしばらくこの仕事を続けてみない？　ホステスをしていてＯＬになった人も、過去にはいるのよ。もしかしたら小夜ちゃんを気に入って、雇って下さるお客様もいらっしゃるかもしれないわ」

「それは……考えたことがなかった訳じゃないですけど」

「今は不況でしょ。この業界も年々厳しくなっているわ。まして昼

間の仕事なんて、派遣にもなれるか分からない状況よ。社員なんて本当に大変。だから、もう少しこの仕事を続けてみるのも、一つの選択だと思うのよ。昔はホステスなんて、『椿』のような高級クラブでも白い目で見られる時代だったけど、今はそんなことはないわ。一つの職業として認められているのだから」

そんな話をされると何も言えなくなっちゃう。不況なのは分かっているし、正社員が難しいのも分かっているけど、あたしはこのバイトを仕事にしたくはない。自分でも不思議なくらいその想いが強くて、どうしても嫌だ。

「ママ、どうして今日そんな話をするんですか？」

「小夜ちゃんがこうして休んでいるなんて、滅多にないでしょ。だからよ」

「あの……訊きたいことがあるんですけど、いいですか？」

「もちろんよ、何かしら？」

笑顔で快諾してくれるママに、こんなことを訊くのは本当は嫌だったけど、やっぱり確かめなきゃいけない。こんなチャンスは、もう巡ってこないかもしれないし。

「ママがあたしの就職を妨害しているって、訊いたんですけど……嘘ですよね？」

「まぁ、私が小夜ちゃんの希望を阻むわけがないじゃない。一体誰から聞いたの？　そんな話」

「東海林隆広です」

間髪入れずに答えたら、一瞬だけママの口元が引きつるのが見えた。それはほんの一瞬で、すぐに戸惑うような微笑みを浮かべた。あたしには普通の反応だと思ったけど、よく判断は出来なかった。

「何故、彼がそんな話をするのかしら？　小夜ちゃんを指名したのは彼よ。それはつまり、東海林グループの会長が『椿』のお客様になったということ。それなのに小夜ちゃんの就職のことを、彼がどうしてそんなに気にするのかしら？」

「分かりません。あたしのことを秘書にしたいと思っているみたい

ですけど」
「あら、そんなことをしたら、もう小夜ちゃんとはここでお酒が飲めないのよ？」
　気のせいかな、ママの顔がだんだん強張っているように見える。まさか、本当にあたしを専属のホステスにしようと思っていたとか？
　あたしは何故か、気持ちがどんどん落ち着いてきていて、物凄く冷静に今の状況を感じていた。
「彼はお酒は一人で飲むのが好きみたいですよ」
「なら、何故この前ここに来て、あなたを指名したのかしら？」
「さぁ、あたしにもはっきりしたことは教えてくれませんでした」
「……」
　ママは黙って思案顔でうつむいた。何を考えているんだろう？
　あたしも黙ってママの言葉を待った。すぐに「そんなことあるわけないじゃない」って笑ってくれなかったことで、あいつの言ったことが本当だったんだと分かってしまった。哀しかったけど、不思議と泣きたい気持ちはなかった。ただ、ああやっぱりあたしの想いは裏切られてたんだなぁって、妙に冷静に思ったんだよね。
　しばらく待って、ママが顔を上げた。溜め息をついて、あたしをじっと見つめてくる。
「小夜ちゃん、小夜ちゃんをここでクビにしたらどうする？」
「え！？　そ、それは困ります」
「そうよね。今の話は聞かなかったことにしてあげるから、東海林隆広が言ったことは全部忘れなさい。私が小夜ちゃんの就職を妨害しているなんて、デタラメな話は」
「本当に、出鱈目なんですか？」
「あら、小夜ちゃんは私と東海林隆広、どちらを信じるの？　もちろん私よね？」
「……」
　こんなママは初めて見る。物凄く冷たく突き放されているように感じるのは、気のせいじゃないよね。あたしは驚愕と戸惑いで、声

が出せなかった。
「小夜ちゃん、どうなのかしら？」
「あたしは……ママのこと信じたいです。でも、だったらどうして、さっき最初に訊いた時に、そんなの嘘だって笑い飛ばしてくれなかったんですか？」
「娘のように可愛がっていた小夜ちゃんの口から、信じられない問いを聞かされたからよ。驚いちゃったわ、裏切られたかと思ったもの」
ドキッとした。あたしが考えたことと同じだ。ママから見たら、あたしが裏切っているように感じるのか。本当にママはあたしの就職を妨害していないの？　もう訳がわかんなくなってきた。
ママに見据えられて、あたしは体と気持ちが縮まる思いだった。どうしよう、どうしたらいいんだろう。
その時、控え室のドアがノックされて、黒服の統括が顔を出した。正直ホッとしたよ。
「ママ、よろしいですか？　東海林隆広様がご来店されました」
「あら、よかったわね小夜ちゃん。大事なお客様が来て下さったわよ」
あたしは来てほしくなかったよ。なんでこんな状況の時に来ちゃうのさ！　まぁ、この状況から逃れられたのはよかったけど。
温んだ氷を外してヒールをはき、ママに背中を押されるようにして控え室を出た。
「じゃあ、頑張ってね小夜ちゃん。東海林隆広は、『椿』にとって大切なお客様なのよ」
「……はい」
沈んだ気分で返事をして、統括に案内されるままＶＩＰルームに入った。
その中では、この前と同じ様に東海林隆広が広いソファに座って、ふんぞり返っていた。うわぁ、この前よりももっと存在感のある服で来ちゃって。なんだろ、どこか行ってたのかね。まぁ、あたしに

ゃ関係ないけどさ。
「よお、似合うじゃねぇか。そのチャイナドレス」
「どうも」
もう笑顔でこいつを迎えるなんて、出来ないよ。ＶＩＰルームでよかった。フロアだったら、無理矢理に笑顔を作らなきゃいけなかったもん。
いつも以上に愛想のない隣に腰を下ろしたあたしを見て、隆広は何故か溜め息をついて、更に舌打ちまでした。
「なによ、失礼ね！」
「そりゃこっちのセリフだ。お前、それが客を迎えたホステスの顔かよ」
「いいでしょ、嘘吐きのあんた相手には、これで十分よ！」
「ああ？　どういうこった。お前っ」
煙草を取り出していた手を止めて、あたしを睨むように見た。
「まさか、あの女にお前の就職を妨害してることを、バカ正直に訊いたんじゃねぇだろうな？」
「なによ、いいじゃない！　あたしにとっては重大なことなんだから！」
プイッと横を向いて言い放ってやったら、盛大な溜め息が聞こえた。チラッと見てみたら、額に手を当てて首を横に振っていた。まるで頭を抱えたように見える。思わずクスッと笑っちゃった。
「笑い事じゃねぇぞ。ったく、先走ってなきゃいいと思っていれば、早速やりやがって」
「あんたにとってはそうかもしれないけどね！　昨日からずっと、あんたに言われたことを考えて、悶々としていたんだから。こんなモヤモヤした気持ちを抱えたまんまで、ママと一緒に働けるわけないじゃない！」
「もっと早く来るつもりだったんだよ。厄介な女に捉まって、遅くなっちまったんだ」
「へぇ女！　だったらその女と一緒にいればよかったじゃない」

本気でムカついた。あたしのことをほしいとか言っておきながら、他の女と付き合ってんじゃないの。こんな奴の言うこと信じたあたしがバカだった！　ママ、ごめんなさい！
心の中でママに謝っていたら、隆広があたしを見た。なに、なんでそんなに睨まれなきゃいけないのよ。
「な、なによ？」
「俺はお前がいいっつったろ。お前以外の女はいらねぇんだよ。何回言ったら分かるんだ？」
「だって、女と一緒だったんでしょ。来るのも遅かったし、その女とよろしくやってたんじゃないの！？」
やだ、なんでこんなこと言うんだろ。別に、こいつが誰といたってあたしには関係ないじゃん！　隆広が意地悪く突っ込んでくるよ。
そう思っていたのに、機嫌悪そうに自分で煙草に火を点けている。
「ったく、憶測で人を追及すんじゃねぇよ」
「な、なによ。あんたが言わせたんじゃない」
「俺はお前がほしいって前から言ってるぞ。それをなんで、他の女となんて思うんだよ」
「だって……」
くそぉ、なんであたしが言葉に詰まらなきゃいけないのよ！
「じゃあ、なんで遅くなったのか言いなさいよ！」
「妹にパーティーのエスコートを無理矢理やらされて、その現場で見合い未遂女が待ち構えていたんだよ。その女がマンションに送れと脅迫してきたんで、送ってやった。お嬢様のくせに俺を部屋に誘いやがったから、化けの皮を剥がして来たのさ。納得したか」
忌々しそうに煙草を噛んで話す感じでは、言い訳っぽくは聞こえなかった。っていうか、このあたしの立場、まるで彼氏の浮気を問い詰める彼女じゃないの。冗談じゃないわ！
言い繕ってる感じじゃないのは、ちょっとホッとしたけどさ。じゃない！　なにホッとしてんのよ！
「その見合い未遂女ってなによ？」

「爺さんが進めようとしていた見合いだ。お前と会う前なら承知してただろうが、ばっさり断ってやった」
「なによ、それ。あたしなんか放っぽって、お見合いすればいいじゃない」
「お前以外ほしくねぇのに、見合いなんかしたって意味ねぇだろ」
「……」
冗談かと思った。でも目がマジだ。お見合いって言ったら結婚相手ってことでしょ。それをあたしがいるから断ったってことは……ははは っ、まさかねぇ。うん、やっぱり冗談だよ。こいつはマジな顔して嘘が言える奴なんだから。

4

なんか変な間が出来ちゃった。隆広がお見合いを断ったなんて言うから。

「酒が飲みてぇ」

唐突にボソッと言うから、ちょっとビックリした。そんなボヤく様に言わなくたっていいじゃん。

何を注文するか訊いたら、またしても「ここで一番高い酒」だって。せめて銘柄を言ってくれればいいのに。まぁ、やることが出来てホッとしたけどね。

安堵のあまり勢い立ち上がっちゃって、激痛が足首に走った。しまった、すっかり忘れてたよ。声を堪えることも出来ず、ソファに体が沈んだ。

「どうした？　咲弥子」

「な、なんでもない」

とは言ったものの、身を屈めて足首を押さえた。思いっ切り体重が乗ったから、今までの比じゃないくらい痛い。

「見せてみろ」

「あ、ちょっ、いだっ！」

押さえていた右足を持ち上げられて、またしても激痛。うう、痛いよぉ。泣きそう。

「こんなに腫れ上がって、よくこんな靴はいてられるな」

「だ、だって、あんたが、セットで贈り付けて、いっ、触んないでよぉ」

「うるせぇ、黙って大人しくしてろ」

ヒールを脱がされて、熱を持った右足首を持ち上げられた。痛みで瞑っていた瞼をちょっと開けると、チャイナドレスのスリットがはしたなく広がっていた。その先にはあたしの足首を、すくい上げるように持った隆広。ぎゃー、中身が丸見えじゃないの！

「ちょっ、足、下ろしてよ！　いだぁ！　触んなってば！」
なんで痛いところを、そんなに触るのよ。
「ぎゃあ！　押すな、伸ばすな、曲げるな、いだいぃ！」
「んな大声上げるほど痛ぇなら、店に出るんじゃねぇよ。ふん、派手に捻挫したな」
「あんたのせいよ！　離してってば、バカ！　ぎゃあ！」
こいつ、痛いところのツボをわざと押しやがった。ソファの上で思いっ切り仰け反って悶えちゃった。こんな場面見られたら、絶対誤解されるよ！
「このドエス男ぉ！　離してってば！」
「ったく、他の客の前でもお前はこんなかよ」
「そんなわけないでしょ！　あんたじゃなきゃ、こんなことしないわよ！」
ようやく足が下ろされた。それもソファの上に。それから、ちょっと体が浮き上がるような感覚。なんじゃい？　と思って涙目を開けたら、隆広がソファから立ち上がっていた。体が浮いたように感じたのは、そのせいか。あの浮き上がり具合は、相当体重は重そうだよね。まぁ、あの体つきは結構鍛えてそうだし。ホテルで最初に抱かれた時の、隆広の裸体を思い出した。
ハッ！　こんな時に、なんてものを思い出してんのよ！！
自分を叱咤してる内に、隆広は壁のインターホンを取っていた。よく聞き取れないけど、タオルと氷と酒っていう言葉は分かった。
「ちょっと、あたしが仕事してないみたいに聞こえちゃうじゃない！」
戻ってきた隆広に抗議したら、あたしの右足を持ち上げて腰が密着するほどの傍に座った。あたしの足は隆広の太股の上を通過してるんですけど。左足は床に落としたままだから、かなり大股開いてる。スリットから両足がむき出しになっちゃって、ちょっと恥ずかしいな。
「お前は立てねぇだろ。今日はこのまま送ってやるから、大人しく

してろ」
「お、送るって、だってあたしの上がる時間は１１時っ」
いつの間にか背中に腕が回っていて、胸が隆広に密着状態になっていた。この展開はマズイと思った時には、眼前に隆広の顔が迫っていた。
お店の中でディープキスなんて、なに考えてんのよ！　力いっぱい隆広の胸を押したのに、全然ビクともしない。こんなところ黒服に見られたら、どうしてくれんの！？
「んぅふっ、んっ」
口腔を舐め尽されて舌が絡んできたところで、ノックの音が聞こえた。その一瞬後に唇が解放される。あたしは咄嗟に隆広の肩に額を押し付けて、ドアの方角から顔を隠した。二人の格好がどう見られようと、こんな惚けた顔を見られるのだけは避けたかった。
顔を背けてるあたしの耳に、黒服がテーブルに物を乗せる音が聞こえてきた。隆広は当然のようにお礼を言ってる。外面はいいんだな、こいつ。
「なんで顔を背けてんだよ？」
黒服が出て行ってから、隆広が意地悪く訊いてきた。
「あんたがキスなんかするからよ！」
「ああ、お前に会ったらすぐにしたかったからな」
「はあ？　なに、その欲求不満」
「厄介な女に付き合わされてきたんだ。そのくらいいいだろうが」
なによ、全然理屈が通ってないじゃない。八つ当たりとか不満解消にキスされたんじゃ、たまったもんじゃないわよ！
その罵倒は声にはならなかった。隆広が広げたタオルに氷を置き始めたから、何をしてるのかと、つい見入っちゃったよ。
「なにしてんの？」
「このままじゃ痛ぇだろ」
「は？　あっ」
テーブルに広げた氷を置いたタオルの上に、あたしの右足首を持

って行った。
「うわ、冷たっ！」
「我慢しろ、こうしてた方が治りは早い」
そう言って、器用にタオルの端で足首を巻いて固定した。驚いた。氷とタオルなんて、何に使うのかと思っていたら、このためだったのか。思わず隆広を凝視しちゃったよ。
「なんだ？」
「や、だって、こうしてくれるなら、先に言ってくれればいいのに」
「言ったってお前は聞きゃしねぇだろ」
う、まぁ、それは、ママのこともあるから、こいつの言うことなんか聞く気もなかったけどさ。
何でもお見通しされてるなんて、ムカつくなぁ。
「まぁ、酒飲んで機嫌を直せ」
「それはあんたでしょ！」
言いながらボトルを取ろうとしたら、先に隆広が持ち上げてしまった。
「ちょっと、あたしの仕事！」
「今日はいい。そのまま休んでろ」
そんなこと言われたってさぁ。唖然としている間に、隆広が綺麗な琥珀色のお酒を、ブランデーグラスに注いじゃった。
この前のブランデーはヘネシーのリシャールだったけど、今日はロール・ド・マーテル。お店でも一日に一本出るか出ないかの、超高価なお酒だよ。あたしはこの前に続いて、お店で見るのも初めて。お安い通販でも２０万くらいするから、ビックリだよね。ここだとやっぱり１００万はするか。
いかにも金持ち用のお酒だよね。こいつにピッタリだわ。
隆広からグラスを渡される。東海林グループ会長が給仕するなんてね。きっと誰に言っても信じてもらえないだろうなぁ。
ぼやっとそんなことを思いながら、隆広とグラスを鳴らしてコニャックの香りを嗅いだ。この前のリシャールより芳醇な香りがする。

こういうお酒の味わい方って、ここで隆広と飲むくらいしかないなぁ。
「美味いな」
「うん、美味しい」
もっと飲みたくて、くーっと飲み干したら「咲弥子は一杯だけだ」なんて言われてしまった。
「な、なんでよ！？」
「お前、酒に酔ってセックスすると途中で眠っちまうんだよ。前回はえらい目にあったからな、予防だ」
「うぐっ、あの時のことは、ちゃんと謝ったじゃない。それに、今日はそんなに酔うほど飲まないわよ！」
「大体、あれだけ足を腫らして酒なんか飲んだら、後が大変だぞ」
「……」
くそぉ、正論過ぎて何も言えない。確かに、こんな強いお酒を体に入れたら、もっと痛んでくるよ。さっきも少し飲んじゃったからなぁ。っていうか、さっきどさくさに紛れて変なこと言ってた。このままあたしをお持ち帰りして、セックスするつもりかい！
「っていうかさ、そもそも足がこうなった原因は、あんたにあるんだからね」
「俺が？　どういうこった？　そういやお前、イヤリングと簪はどうした？　確かドレスに合わせてルビーのがあったはずだ」
ぎゃっ！　墓穴掘りってこのこと！？　お姉様方の嫌がらせを、言わない訳にいかなくなっちゃった。
自分だけマーテルを飲んだ隆広が、あたしを見て「言え」と無言の強迫をしてくる。これって仕事用の顔なのかな。ちょっと、どころでなく怖いんですけど。その怖さに耐えかねて、しょうがなく今日起きたことを全部話した。
「ふん、あのホステス共のイヤリングと髪飾り、どっかで見たことあると思ってたが、咲弥子から奪ったのか。まるで強盗だな」
「見たの？」

「ここに入る時に、フロアはざっと見てる。誰が来てるか、一応把握しておかねぇとな」
なんか、やっぱり隆広って凄いの？　一瞬でお客さんの顔を把握するなんて、そうそう出来ないと思うよ。
「あの、どうするの？」
「あ？　どうもしねぇよ。取り返してもいいが、そのままにしておいた方が、後々役立ちそうだからな。それよりお前のことだ」
「あたしの？　なによ？」
「お前の就職内定を妨害してるのが『椿』のママだと、俺が言ったのをしゃべっちまったんだろ。あの女に」
う、そういえば、さっきはそのことで険悪になってたんだった。でも、あたしは間違ったことはしてない。
「言ったでしょ。あたしにとってはお母さんみたいな人なの。あんな話を聞かされたら、気になるじゃない。嘘かどうか訊いただけだよ」
「それで、認めたか？　あの女は」
「そんな訳ないでしょ。嘘だって、ちゃんと言ってたわよ」
「本当か？」
間髪入れずに、胡乱気に訊いてくる。どういう調べ方したのか知らないけど、ママがあたしを裏切るはずはないのよ。さっきはちょっとそう思っちゃったけど、やっぱり違うって信じたい。
「ママは、あたしの就職を妨害してるなんて話は、デタラメだって言ってたわよ」
「ふん、あの女ならそう言うだろうな」
三杯目のマーテルを空けて、グラスをテーブルに落いた隆広は、その手で顎を押さえて呟いた。
不敵な笑みを浮かべた横顔に、思わず惚れちゃいそうになる。こいつのこういう顔って、妙にカッコイイんだよね。引きずられちゃダメって思うのに、目が離せなくなる。
「昨日お前に話してから、こんな事態になることもある程度予想し

ちゃいたが、ちと早急過ぎるな。計画を少し早めた方がいいかもしれねぇ」
「計画？」
なんだろ、あたしが聞いててもいい話かいな？
オウム返しに呟いたあたしに向いた隆広の顔は、それまで見たどの表情とも違っていた。有無を言わせない眼光に身がすくむ思いだった。
「咲弥子、早い内にここを辞めろ。そうだな、今月中に」
「……」
なに言ってんの！？　今月中って言ったら、あと2週間しかないじゃない！！
さっきまでならすぐにそう言い返せたのに、今の隆広にはそれを言わせない雰囲気があった。ちょっと、冗談でなく怖いんですけど。
「あ、ど、どうして？」
「お前が巻き込まれるのを防ぐためだ。とにかく、今は何も訊かずに言うことを聞け」
「やだっ！」
「お前なぁ」
自分でも子供っぽいと思う言い方だったけど、こいつの言うことに従うなんて絶対やだっ！
隆広は呆れた顔であたしを見てる。でも、これだけは絶対譲らないんだから。
「言うことを聞かせたかったら、ちゃんと納得出来る話をしなさいよ。ママがあたしの就職を妨害してるなら、その証拠を見せなさいよね！」
う、またさっきの怖い目で睨まれた。でも、今度は負けるもんか！
しばらく無言で睨み合っていた。だんだん居た堪れなくなってくる。でもここで負けるのは悔しいから、我慢する。
更に時間が経って、隆広がふいに視線を逸らした。ホッと緊張が解けて、体から一気に力が抜けたよ。

「ちっ、しょうがねぇな。だが、知っちまったらここのバイトはすぐに辞めさせるぞ」
「なっ！？　そんなの横暴よ！」
「お前が存外、口が軽いのが分かったからな。あの女の傍に置いておけるか！」
「あんたが納得出来ないことばっかり言うからでしょ！　あたしを納得させられたら、あんたの言うことを聞いてやるわよ！」
　ちょっと軽はずみだったかな、言っちゃってから後悔した。こいつなら証拠の捏造くらい簡単に出来そうだし、あたしにそれの真偽を判断出来るとは思えなかった。でも、言っちゃったからには、せめてこいつから証拠を出させなきゃ。
「ふん、言ったな。お前を嫌というほど納得させてやる。あの女を呼んで来い」
「は！？　ちょっと、いきなりそれ？」
　今ここでママに問い質そうっての？　こいつの頭は大丈夫かと、ちょっと心配しちゃったよ。
「勘違いすんなよ。お前を早退させるのに、公然としねぇとマズイだろ」
「なっ、早退？　なんでよ！？」
「こんなところで話せると思うか？　ここはあの女の城だぜ。それに書類なんかで見せたって、お前は納得しねぇだろ」
　確かにまぁ、そうだけど。さっきそれを考えたばっかりだし。くそぉ、こいつって本当に何でもお見通しなんだ。怖いくらいだよ。
「分かった」
　渋々言うと、隆広が自分からインターホンに近付いた。
「ちょっと、あたしがやるわよ」
「いいから座ってろ。お前じゃ何を言ってあの女を呼び出すか、知れたもんじゃねぇ」
　慌てて立ち上がろとしたあたしに向かって、そんなことを言う。あたしだって常識は持ってるわよ。そんなバカ正直にママを呼んだ

りしないわよ！　もう、本当にムカつく！
　ママはすぐにＶＩＰルームに入ってきた。珍しいな、お酒を飲んでるみたい。ママが一緒に飲むようなお客さんが来てたのか。
「東海林様、なにかお話があるとか？」
「ああ、これからすぐに小夜を連れて帰る。いいな？」
「まぁ、もちろんですわ。クラブ通いをなさらない東海林隆広様が、ウチの小夜を気に入って頂けるなんて、こんな喜ばしいことはございませんもの」
　ママは澄ました笑顔を浮かべているけど、それが愛想笑いじゃないのがあたしには分かった。ママはもしかして、あたしがいることで隆広をお店に繋げられると思っているのかな。だから、今日はあんなことを言ったの？　今まであんな話はしなかったのに。
　そう思うと、ちょっとだけ自分が傷付いているのに気が付いた。ママにとってはお店が一番なのは、当たり前なのに。
「小夜、鞄を取って来い」
「あ、え？」
　いきなり声を掛けられて、すぐに反応が出来なかった。ママが微笑みながら首を傾げて、隆広は呆れたような顔であたしを見ている。
「ママと少し話しがある。お前は出られる準備をして、ここに戻って来い。足が痛いだろうが、少し我慢しろ」
「え、あ、はい」
　隆広がママと話。気になる！　でもあたしは大人しく従うことにした。何となく、あたしの見たくないママを見せられる気がして。
　氷を巻いていたタオルを取って、ヒールをはいて立ってみると、そんなに痛くなかった。直接氷を当てて、物凄く冷たくしていたから、ちょっと麻痺しているのかな。
　ＶＩＰルームから出てると、フロアにいたお姉様方も同僚のホステスもお客さんも、そこにいた全員の視線があたしに注がれた。ビックリして固まっちゃったよ。すぐにいつものお店の雰囲気に戻ったけど。

やっぱりママが入ってあたしが出てくるってのは、注目を集めるよね。
痛い足を引きずって控え室に入ると、バッグの位置が変わっているのに気付いた。化粧台の前で中身を出して確かめる。別に何も取られてないみたい。
でも、これを持ってフロアに出たら、今度は何事かってまた見られちゃうと思う。うーん……まぁ、嫌がらせされるにしても、今日以上に酷いことはないでしょ。人生前向きに考えなくちゃね！
バッグを持ったあたしがフロアに出ると、案の定またしても注目が集まったけど、ニッコリ愛想よく笑ってまたＶＩＰルームに入った。お姉様の一人が唇を噛んでいるのが横目に見えた。笑ったのは、ちょっと不味かったな。後悔しても遅いけどさ。
ＶＩＰルームは、こっちはこっちでまた、別の剣呑な雰囲気が。なんでこんな火花散ってるような空気がするの？
よくよく見ると、火花を散らせているのはママの方なんだけど。隆広は涼しい顔であたしを見て「来たか」なんて言ってる。
そしてあたしに近付いて来ると、いきなりお姫様抱っこをした。ギャー！
「何すんのよ！　離して、下ろして！」
「うるせぇ、大人しくしてろ。投げ捨てるぞ」
うぐっ。こんなところで投げられたら、足を捻挫するくらいじゃ済まないよ。隆広の声にちょっと本気度が混じって聞こえた。こいつ本当にやる気だ。
しょうがなく、隆広の腕の中で大人しくバッグを抱えた。うう、このままフロアに出ようっての？　メチャクチャ目立つじゃないの！　せめてバッグで顔を隠そう。
「じゃあな、小夜はもらって行くぞ」
なによそのセリフ。バッグの隙間から隆広を見上げたら、予想に反して真剣な顔だったから驚いた。
もし今のが本気で言ってたんだとしたら、もしかしてあたしここ

を辞めさせられる？　冗談じゃない！
暴れようとしたあたしの気配に気付いたのか、隆広がこっちを見下ろした。うう、その怖い目はちょっと、マジで勘弁。冷や汗が出て、体が硬直しちゃった。
隆広はこれ幸いと、ドアに向かった歩き始める。ママが慌てて来て、ドアを開けた。
フロアに出た途端、周囲が一斉にざわめいた。バッグで顔を隠していても、それがはっきり分かったよ。なんかもう、怖くてお店に来られません！
体に感じる隆広の歩調は、乱れることなく悠然と進んでいるみたい。こういう注目の浴び方も、慣れたもんなんだ、こいつには。あたしを巻き込まないでよね！
「ありがとうございました。どうぞ、今後とも『椿』をご贔屓に……」
背後でそんなママの声が聞こえる。少し冷えた外気を感じて、あたしはバッグを下げた。いつも見るのより少し早い、夜の銀座の風景だった。ちょっと目線が違いますが。

5

通りに出てからすぐ、いきなりあたしの真上で、隆広が呟いた。
「あ、ヤベッ」
とても東海林グループ会長の言葉とは思えません。こいつ、もうちょっとセレブらしい言葉遣いすればいいのに。
「なによ？」
「里久がまだ来てねぇ。しょうがねぇな、少し待つか」
「ちょっ、この格好で！？」
通りを歩いて行く人たちの目線が痛いんですけど。抱く方も抱かれる方もこんな目立つ格好じゃ、銀座でも注目を浴びるわね。せめてどこかに避難してほしい。
「ちょっと待ってろ」
そう言って、あたしを肩に担ぐ。いきなり視線がぐるりと回って、歩道の地面が目の前に迫った。
「ぎゃあ！　なんて担ぎ方してんのよ！」
「うるせぇ、少しは大人しくしてろよ。ズリ落とすぞ」
くそぉ、いちいちそんな脅しをかけるなんて、失礼な奴だ！
体を捻って見上げていると、空いた手で携帯をいじっている。吉永里久に連絡を取るつもりか。早くしてよね！
「うわっ！」
またしても突然体が起き上がって、今度は隆広の左肩に腰を乗せる形になった。う、目線がメチャクチャ高い。周りを行く人々が、唖然とあたしを見上げているよ。
ただでさえ赤と金で派手な服なのに、こんな背高状態は更に目立っている。
「ちょっと下ろしてよ！」
「この方が片手が空いて楽なんだよ。里久はもうすぐそこだ。少しの間我慢しろ」

楽って……あたしの体重、まんま肩に乗っかってんじゃないの？
そう思ってたら、やっぱりすぐに音を上げた。
「お前、重い」
「失礼ね！　あんたが好きでやったんでしょ。責任とって吉永里久が着くまで、このままでいなさいよ！」
「断る。肩が折れるぜ」
「ぎゃあっ！」
隆広が肩の位置をずらして、あたしの体が滑り落ちる。慌てて隆広の頭にしがみついたよ。足が地面に着く前にこいつの左腕が腰に回って、落ちるのは止まったけどさ。
「これの方がいいな。お前の顔も見られる」
「ああそうですか！　やる前にちゃんと言ってよね！」
全くもう、こっちは生きた心地がしなかったんだから！　バッグを落としちゃったじゃない。
それに気付いた隆広が、右腕を伸ばしてバッグを取ってくれる。背の高さは普通に戻ったけど、やっぱりこういうチャイナドレスって目立つわよね。衆目は一向に引いていかない。立ち止まって見られないだけ、まだマシと思うことにしよう。
黙ったままというのは、あたしの心情的にキツイ。なにか当たり障りの無い話題で、気持ちを逸らすことにした。
「あのさぁ、さっきバッグを取りに行ったら、置いた位置が変わってたんだよね。特に何も取られてないから、心配ないと思うけど」
本当はそんなに心配してなかった。ただ話題的にいいかなと思っただけで。そうしたら、隆広が顔色を変えて「本当か？」なんて訊くから、ビックリしたよ。
「少しの間、立てるか？　俺に掴まっていい」
「あ、うん」
なんだろ、急に。地面に足が着いて、隆広の肩に掴まった。右足を上げるようにしているから、結構楽に立っていられる。
「バッグ開けるぞ」

「あ、うん」
こいつに贈られたガーレットのバッグを開いて、何やらゴソゴソ物色してる。別に見られて恥ずかしい物は入ってないけど、やっぱりこういうのってちょっとやだな。
隆広が取り出したのは携帯電話。この前スマートフォンに機種変更したものだった。何をするつもりなのか見ていると、いきなり後ろのカバーを外し始めた。
「ちょっと人の携帯、何するのよ！」
「いいから、黙って見てろ」
「壊したら弁償してよね！」
「壊すはずねぇだろ。もっと性能のいいやつを買ってやる」
「いらないってば！」
カバーをバッグに入れて、今度は電池パックを外す。更にＩＣチップまで取り出した。それを取られたら、携帯が使えないじゃない！
「それ！」
「ふん、特に異常はないようだがな、預っておくぞ」
なにい！？
思わず睨み付けると、隆広は唖然とあたしを見てから、くっくっくっと笑い始めた。よっぽど凄い顔で睨んだみたいだ。でも、そんなことされたら当然でしょ！
「明日には返す。必要なら俺の携帯を貸してやるよ」
そう言って、最新式の折りたたみ携帯を取り出して、あたしの目の前に差し出す。
「え、でも、あんたが不便でしょ」
「俺は仕事用のがある。それは秘書たちと連絡を取るだけに使ってんだ。覗き見リダイヤル禁止を守れるなら、使っていい」
「ん、じゃあ、遠慮なく」
あたしがそう言うと、その携帯をあたしのバッグに入れてから、外したチップをあたしのスマフォにセットする。せっかく外したのにどうするのかと思っていたら、それを自分のスーツのポケットに

入れた。まぁ、あんなちっちゃいチップ、どこに行くか分かんないもんね。
　引き続きバッグを物色し始めた。理由があってやってるってのは分かるけど、やっぱり気持ちのいいものじゃないな。
「まだ何かあるの？　っていうか、そのチップとスマフォどうするのよ？」
「スマートフォンってのは、パソコンと同じだ。ウィルスに犯されたソフトを、知らずに起動すればたちまち感染する」
「知ってるよ、そのくらい」
「アプリケーションをダウンロードしない限り、先ず余計なソフトを入れることは不可能だ。だが、チップに細工をすれば話は簡単だろ」
「え、そういうこと出来るもんなの？」
「やって出来ねぇことはねぇだろ。ＩＣチップは普通携帯に入れっ放しだから盲点だしな。冬樹の受け売りだが」
　初めて聞く名前が出てきた。
「冬樹って誰よ？」
「俺の秘書の一人。ＩＴオタクなんだよ」
　オタクぅ？　美形の吉永里久といい、こいつの秘書ってどういう連中よ？
「で、今度は何を探してるわけ？」
「これが怪しいな」
　取り出したそれは、あたしがいつも持ち歩いている小さなぬいぐるみだった。ストラップみたいに鎖がついてんだけど、大きすぎて携帯にはとても付けられないし、バッグに付けるのもなんだか子供っぽいから、中に入れて持ち歩いてるんだよね。ホワイトライオンの子供で、チョー可愛いのだ。
　そのライオンちゃんの背中に、あろうことかこいつは指を突っ込んだ。
「ちょっと何すんのよ！！」

「大声で喚くな。耳が痛ぇ」
「痛くて当然でしょ！　離しなさいよ！」
わざと耳元で言ってやると、顔をしかめながらもホワイトライオンを離そうとしない。もう、無理矢理奪い返してやる！
あたしが手を伸ばしたところで、ライオンちゃんの背中から何かが出てきた。細い線が出てる小さい機械みたいなもの。
「え、なによ、それ？」
「やっぱりあったな。盗聴器だ」
「とうむがっ」
思わず声を上げようとしたら、ライオンちゃんで口を塞がれた。あたしのホワイトライオンで、なんてことしてんのよ！
「静かにしろ」
意外に真剣な顔で言われて、仕方なくコクコクと首を振った。
取り出したその機械を、隆広は自分のスーツのポケットにしまった。でも、なんであたしのライオンちゃんから盗聴器なんて出てくるのよ！
「なんで、そんなもの？」
「ふん、お前が余計なことを言ったから、向こうが不安になって仕掛けたんじゃねぇのか？」
「向こうって……」
隆広が黙って指差した方を見る。そこにあるのはあたしのバイト先のお店、高級クラブ『椿』。
まさか、ママがあたしを盗聴するはずないじゃない。笑い飛ばそうとして、顔が硬直しちゃっているのに気付いた。急にゾクッと寒気がして、隆広の体にしがみつく。
あたしがＶＩＰルームに入っている間は知らないけど、多分お店のホステスたちは控え室に入ってない。もし仕掛けるとしたら黒服たち？　まさか本当にママが？　やだ、怖くなってきちゃった。
体が震えるのが止められないでいると、隆広の腕が背中に回って抱きしめられた。その温かさにホッとする。

ちょうどその時、あたしたちの横に見たことのある車が停まった。降りてきたのは吉永里久だ。
「隆広様、遅くなりました」
「里久」
駆け寄ってきた吉永里久は、隆広からさっきの盗聴器を黙って渡されると、こっちも黙ってうなずいてスーツのポケットに入れた。
あたしは再び隆広に抱きかかえられて、ガードレールを跨いで車に乗せられる。もう文句を言う気力もなかった。だって、あたしのバッグの中から盗聴器なんて。
後部座席に隆広と並んで座る。運転席に着いた吉永里久は、ダッシュボックスの中からアルミホイルを取り出して、一度クシャクシャにしてからさっき受け取った盗聴器をそれで包んだ。
「もう声を出していいぞ」
「えっと、今のアルミってなんで？」
「アルミは電波を遮断する。ああして機械を包み込んじまえば、使えねぇからな」
ふうん。まぁあたしにとっては、車にアルミを積んでいることからして、驚きだけど。こういうのが日常茶飯事ってわけか、こいつらにとっては。
「どちらに行きますか？」
「俺のマンションだ」
「ちょっと！？　あたし帰る！」
「帰さねぇよ。昨日も出来なかったし、今日は厄介な女に絡まれてフラストレーション溜まってるんだ」
それはあんたの都合でしょ！
そう言う前に、車は既に発進している。こいつに誘われたら、逃げられないから嫌だって言ってんのに！
狭い車の中で何とか距離を取ろうとしたけど、まぁ無理だよね。右腕を取られて、思いっ切り引き寄せられた。そのまま隆広の胸に抱き込まれて、顔を両手で挟まれた。

「ちょっと、ここ車のなんっ」
こいつ、本当に欲求不満なんじゃないの？
キスで唇が塞がれて、すぐに舌が入ってきた。まぁ、あたしも嫌いじゃないけどさ。これがあるから隆広のところで秘書するの、躊躇しちゃうんだよね。
とか思いつつ、あたしも隆広の頭掴まえて、思いっ切り舌を絡めてやる。だって、こいつやっぱり上手いもん。
お互い鼻息荒くしてキスを貪る。息が苦しくなると唇を離して、でも舌は絡んだまま。隆広の手が、チャイナドレスの上から胸を揉み上げてくる。
「あっ、はっ、やめっんぅ」
あたしが離れようとするタイミングで、また唇が塞がれる。あたしも隆広のスーツのボタンを外して、シャツの上から体を撫で回した。やっぱりいい体してるな。
「はぁ、おい、あんまり、煽るなよ」
「んっ、なによ、そっちだって、わあぁっ！」
「おわっ！」
突然急ブレーキが掛かった。ドアに頭がゴチッとぶつかって、更に隆広の体がまともに圧し掛かってくる。
「お、重いぃっ」
「悪ぃ」
すぐに退いてくれたけど、一瞬息が止まったよ。隆広があたしを引き上げて、座席に座らせてくれた。
「あ、や、ありがと」
「大丈夫か？　おい里久、お前またやりやがたったな！？」
隣に座り直した隆広が、運転席の吉永里久に向かって怒鳴る。
「なに、今のわざとなの？」
「ああ。ったく、こいつ俺とお前がここでイチャつくのが、気に入らねぇんだ」
なによそれ。吉永里久の顔を斜め後ろから眺めると、すごい仏頂

面だった。でも美形って得だね。仏頂面でも見惚れるくらい綺麗なんだもん。
「隆広様が悪いんです。僕はちゃんと言ったじゃないですか！」
言ってることは子供みたいだけど。
「これからマンションに送り届けるんですから、部屋に着いてから存分にやって下さいよ」
「……」
今度は隆広が仏頂面でそっぽを向いた。
「まぁ、正論だよね」
「うるせぇ」
それからは、さすがに隆広もちょっかいを出してこないで、こいつのマンションとやらに着くまで大人しく座っていた。

隆広の部屋は、都内でも有名な超高層マンションの最上階だった。やっぱり東海林グループ会長ってのは、住んでるところも違うね。
地下の駐車場に着いて車を降りてから、ずっとお姫様抱っこされ続け、お陰でエレベーターに乗った途端に、またキスされてしまった。抱っこされながらのキスって、あんまり好きじゃないんだよね。疲れるから。
お金持ち御用達マンションらしく、指紋認証で開錠して玄関に入る。「明日お前の指紋を登録しねぇとな」なんて言ってるけど、あたしは別に必要ないんじゃないの？
しかしまぁ、無駄に広い玄関だねぇ。抱き上げてるあたしの靴も脱がせてくれて、広くて長い廊下を歩いて直行したのは、やっぱり寝室かい！　ダブルベッドがあるのに、まだまだスペースに余裕があるよ。どんだけ広いんだ！
「わっ、ふかふか」
ベッドに向かって体を投げ出されて、一瞬衝撃を覚悟したんだけ

ど、予想以上にベッドは柔らかかった。
隆広を見ると、スーツのジャケットとベストを脱いで、ネクタイを緩めていた。
「え、もう？」
「なんだよ、お前だってヤリてぇだろ」
そう言われて「うん」と言える女はいないよ。どんなにしたいと思っていてもね。
見るからに高級品のカフリンクスとかタイピンを、乱暴にむしり取るなんて勿体無い。こいつにとっちゃ安物みたいなもんなんだろうなぁ。
なんてボケッと見ていたら、シャツのボタンを半分まで外すと、ベッドの上に乗っかってきた。
「ねぇ、本当にママがあたしを騙してる証拠を見せてくれるの？」
「なんだよ、まだ信じてねぇのか？」
「いいから、保証してよ！」
「明日だ。お前に反論出来ねぇもん見せてやる」
「じゃあ、いいよ」
言った途端、ベッドに背中押し付けられて唇を塞がれていた。舌が入ってくるのはもうお馴染みだけど、何だか性急過ぎるよ。こいつ、本当にやりたかったんだなぁ。

5（後書き）

次回以降は、週一くらいの更新になると思います。

6

あたしの上で呼吸を整えた隆広が、横に寝転がった。首を曲げてそっちを見ると、向こうもあたしを見ていた。満足そうな顔で。
「なによ、そんなによかった？」
「お前はどうなんだよ？」
うぐ……それを言わせるわけ？　まぁ、言ってもいいけど、言わせられるのはちょっと悔しい。
「俺はよかったぜ。お前の中は気持ちい」
あたしは体を起こして、勝手に話してる隆広を黙らせるように、キスをした。
「これでいいでしょ、きゃっんぅ」
いきなり後頭部を押さえ込まれて、もう一度キスをしていた。今度は少し激しく、濃厚に。
キスから解放されて、隆広を見下ろした。この角度から見るのって、初めてだなぁ。いい男は、どんな角度から見てもいい男だ。下から伸びてきた大きな手が、散々暴れた解けた長いあたしの髪の毛をすいていく。
「シャワー浴びようぜ」
「え、一緒に？」
「当然だろ」
えー、やだな。絶対にちょっかい出してくるでしょ。とか思っていたら、声を上げて笑われた。
「そんな嫌そうな顔すんなよ。とりあえず満足したから、今日はもういい」
「ホントに？」
「お前が煽らなきゃな」
「しないわよ！」
いそいそと隆広から離れて、ベッドを降りた。足を付くと、そう

いえば右足を痛めていたことを思い出した。
「大丈夫か？」
「え？　うん、まぁちょっと痛むけど、うわっ」
またしてもお姫様抱っこされた！　しかも二人とも裸だから、なんかこう肌触りが違って恥ずかしい。
お互いかなり汗を掻いたから、触れている肌がしっとりしてる。ううわぁ、お互い裸でお姫様抱っこなんて初めてだよ。比べる訳じゃないけど、隆広は今まで付き合ってきた男とは、やることが全然違う。御曹司ってみんなこうなの？
「ちょっと、降ろしてよ」
「いいだろ、この方が早い」
「そりゃそうかもしれないけど」
あたしの文句は聞き流されて、寝室を出た。あたしを抱えているのに、器用にドアを開けるね。
寝室の外は、大きなガラス窓がある部屋だった。壁一面がガラスになっているらしくて、おお、夜景が見えるよ。最上階だから、カーテンなんかいらないのか。
外からの灯りは皆無で、ほとんど真っ暗な中を隆広は迷うことなく歩いていく。自分ちだから、どこになにがあるかくらいは分かるのか。なんて思っていたら、「この辺だな」なんて声が聞こえて、体を降ろされた。この感触、ソファ？
パッと灯りが点いて、あたしはソファの背もたれのところに腰を下ろしていました。慌てて座るところに降りたよ。クッションやソファの肌触りはその辺の安物とは違って、肌がむき出しなのに全然チクチクしない。
隆広は、離れた壁のところにいた。そこにスイッチがあったのか。明るくなった室内を見回して、唖然とした。なに、この無駄に広い空間。この半分もなくたっていいんじゃないの？
「あんた、こんなところに一人で住んでるの？」
「ああ、気に入ったなら、お前も住めよ」

「ばっ！　天下の東海林グループ会長が、なに言ってんのよ！」
あたしなんか住まわせたら、それこそマスコミが煩いでしょ！
隆広に向かって怒鳴ってから、すぐに視線を逸らした。スッポンポンで近付いてくるから、目のやり場に困る。その、黒々としたそこがね。あたしはちゃんと、胸と股間は隠してます。
「俺は本気だぜ」
隆広は意外に真剣な顔で、あたしは何も言えなくなった。まさかさっきのお見合いを断った理由を、本当にする訳じゃないよね。
あたしの傍に立つと、今度は手を引いて立ち上がらせた。普通に歩かせてくれるのかと思っていたら、またしても抱っこされたよ。
「だから降ろしてってば！」
「お前、本当にセックスの時しか素直じゃねぇな」
「あんたがいちいち反抗したくなるようなことをするからでしょ！降ろしてよ！」
隆広の腕の中で暴れたら、膝の裏をかかえていた手に、太股をいやらしく撫でられた。さっきの余韻がまだ残ってるせいで、体がビクッと反応しちゃう。意地悪そうな隆広の顔。
「シャワー浴びるぞ」
「だから、一人ずつ入ろうってば！」
「阿呆、女といるのに一人で浴びても面白くねぇだろ」
この俺様エロ男め！
そのまま勝手に移動されて、バスルームらしき部屋に連れていかれた。
たまげたよ。凄い広いんだもん。ホテルのスウィートルーム顔負けね。普段からこういう家にいれば、あんなスウィートルームは、大して広いと思わないか。
宣言通り、隆広はバスルームでは襲ってこなかった。本当に満足

したのかね。
あたしが髪を洗ってる間は、お風呂に入ったりしていて、なにが面白いのかニヤニヤ笑ってた。お風呂は２４時間いつでも入れるんだって、金持ちはやっぱり違うね。
ドレスは寝室に脱ぎっ放しだし、そもそも後は寝るだけなのにシャワーの後でドレスを着るなんて……って思っていたら、バスローブを貸してくれた。でかいな。胸とか開き過ぎて丸見えだし、裾は膝を通り越してる。
女物のはないのか訊いたら、「女を泊めたことはねぇ」だって。意外だ。そういえばコンドームもここにはないって言ってたし、変なところで誠実なんだな、こいつ。
ハッ！　ってことは、あのお見合い云々は、ホントの本気ってこと！？
いやいや、やっぱり冗談でしょ。いくら何でも、自分の立場を分かってないってことはないだろうし。絶対にスキンを付けてセックスするのだって、妊娠を回避するためのものでしょ？　欲望よりも優先するんだから、そんなアホなことは考えてないって。
「きゃっ！」
またしてもお姫差様っこされた。なんでこいつ、こんなに抱き上げるのが好きなのよ。
「やだ、降ろしてってば！」
「黙ってろ。足が痛ぇだろ」
それは意外な言葉で面食らっちゃったよ。
「え！？　あんたが抱き上げる理由ってそれ？」
「他になにがあるってんだ？　ちょっと触ったくらいで、痛い痛いと喚いていたじゃねぇか」
そりゃそうだけどさ。こいつの優しくしてくれるポイントって、予測不可能だよ。そのままリビングに入って、夜景の見えるソファに座らされた。
「ちょっと待ってろ」

そう言って、寝室とは別の部屋に入っていく。こげ茶色のバスローブ姿ってのが、実にカッコイイんだよね。見た目だけは、本当に満点の奴なのになぁ。
あたしはソファから身を乗り出して、ガラス窓の向こうを見た。下の方にビルの灯りや家の灯りが小さく見える。もう深夜なのに、まだ結構灯りが点いてるね。こんな高みから見下ろしていたら、人間そのものも見下ろすようになるのかな。
すぐに戻ってきた隆広は、手に救急箱を持っていた。桐の箱に緑の十字が描かれた、レトロな外観だ。
「なにそれ」
「実家から持って来ていた。新しいのを使うからいらねぇってんで、もらってきた」
「ふうん、まぁレトロだもんね。それでなにするわけ？　いだっ！」
ボケッと尋ねていたら、いきなり右足を引っ張られた。痛いよ！
「ちょっと、なにすんのよ！」
「湿布、このままじゃ痛ぇだろ。明日は出掛けるしな」
「へ？　出掛けるってどこへ？」
「『椿』のママがなにをやってるのか、その証拠を見せてやるんだよ」
隆広が右の足首に湿布を貼って、包帯を軽く巻いていく。器用な奴だね。でも、そのお答えにはちょっと驚いたよ。
「出掛けるってどこに？　あたし着替えがないよ」
「あのドレスでいいだろ。いてっ」
あんまりなことを言うから、頭を叩いてやった。顔をしかめて、あたしが叩いたところをさすってる。ちょっと強く叩き過ぎたかな。でも、あんなドレスで街中を歩くなんて、とんでもないことを言うんだから、当然の報いよ！
「ったく、俺の頭を叩く奴は、お前だけだぜ。叩くのを許すのも、お前だけだがな」
「なによ、その俺様論理。今のはかわせる距離じゃなかったでしょ」

「そういう意味じゃねぇよ。分からねぇなら、別にいい」
むぅ、そう言われると、腹が立つ。あたしがバカみたいに聞こえるじゃないの！
「じゃあ、どういう意味よ？」
「その内分かるさ。もう寝るぞ」
「ちょっと、ちゃんと教えなさいよ！」
喚くあたしを、またお姫様抱っこで寝室に連れて行く。だから、少しは歩くことをさせてほしいっての！
ベッドに座らされると、当然のようにバスローブの紐が解かれた。
「な、なにすんの！？」
「俺は寝る時は、何も着ねぇんだ。だからお前も脱いで寝ろ」
「なっ……」
開いた口が塞がらなかった。そんなことを強要するなんて、俺様を通り越して我が儘御曹司じゃないの。
唖然と隆広を見ていたら、ベッドの反対側に回ってバスローブを脱ぎ捨てた。ベッドに上がってからあたしのバスローブも、背後から器用に脱がせて、そのまま抱き込まれた。
「ぎゃー、なにすんのよ！」
「うるせぇから、口閉じて大人しく寝ろ」
「こ、このままで！？」
「何もしねぇよ」
そのまま後ろから抱きつかれた格好で、ベッドに横にさせられ、布団が被せられた。すごくいい肌触り。空気みたいに軽いのに、しっかり温かいよ。
隆広に、何もしないって言われても、全然信用出来ないんだけどね。何かされるんじゃないかとビクビクしていたら、その内に背後から寝息が聞こえてきた。
本当に寝ちゃったんだ。なんか拍子抜け。
この状況はちょっと納得出来ないけど、今日はお店のお姉様方に苛められたり、こいつと思いっ切りセックスしちゃったからか、妙

に体がだるくて瞼が重くなってきた。
でも……せっかくウトウトしていたのに、こいつの息が首筋やら耳元やらに吹き掛けられて、その度に体が震えちゃった。睡魔が襲ってきてもなかなか寝付けなくて、物凄く困った。

7

うん……なんか、チャイムの音がする。何回も何回も鳴っていて、正直うるさい。顔に日差しが当ってるから、もう朝だよね。誰よ、こんな朝っぱらから。

目をこすりながら、むっくり起き上がって、唖然とした。寝不足で惚けてた頭が、きれいさっぱり覚醒したよ。

なに、この広い部屋！　まるで隆広と初めて会った時の再現だわ！　頭を抱えながら周囲を見渡したら、やっぱり同じベッドで隆広が眠っていた。えっと、昨夜はどうしたんだっけ？

あ……思い出した。隆広にお店を早引けさせられて、こいつのマンションに来てセックスしちゃったんだ。シャワーを浴びた後、素っ裸にされて後ろから抱かれながら寝たんだよね。

一応、体を確かめてみる。うん、何もされてないみたい。それにしても、自分が裸で寝るから他人にもそれを強要するって、どうなのよ？　今まで付き合ってきた女の子たちにも、そんな風にしていたわけ？

ベッドの上で膝を抱えて、隆広の寝顔を眺めた。

体はうつ伏せで、顔はあたしの方を向けている。枕にファサファサした髪の毛が広がっているし、眠っている顔も何だか別人みたいで、いつもと全然印象が違う。

こいつにキスされると、拒否出来ないんだよね。やたらと上手いから気持ちよくなってきて、ついつい流されちゃう。

あたし、隆広のこと好きなのかなぁ？　今までの男は好きとか嫌いとか、あんまり気にせずに付き合ってきたような気がする。こんな風に悩んだことないもん。あんまり優しい男もいなかったしね。

隆広のホテルで目覚めた日から、指折り数えてみる。まだ四日しか経ってないじゃん！　それであたし以外いらないって言う隆広の気が知れないよ。普通の奴ならまだしも、東海林グループの会長な

んだから、もちっと自分の言動に責任持てっての。
俺様なのに変なところで紳士で、たまに最っ低なことをする奴。それで面白がってる節があるから、サド気質だよね。今まで付き合ってた女の子って、こいつのどういうところに惚れてたんだろ。
そっと腕を伸ばして、眠っている隆広の黒いサラサラの髪を触っていたら、ドアの開く音がした。
「隆広様、おはようござ」
スーツを着た男が開いたドアノブを手にしたまま、あたしを見て固まっている。あたしは裸。
「ぎゃーっ！！」
「な、なんだ！？」
あたしのスンゴイ叫び声に飛び起きた隆広が、入ってきたスーツの男が顔を見合わせた。スーツ男の顔は真っ赤だった。だって、バッチリあたしの裸見たでしょ！
「隆広様……」
「おう、洋行。早ぇな」
洋行って、確か秘書の一人だよね。こいつ、毎朝秘書に起こしてもらってんのか！
布団を引っ張って、とりあえず体を隠したあたしと、秘書の目が合う。
「し、失礼しました」
派手な音を立ててドアが閉まった。隆広は頭をかきながら溜め息をついている。
「えっと、今の秘書だよね？」
「ああ、俺の身の回りの世話も仕事だからな」
うわぁやっぱり。秘書に世話を焼いてもらわないと、起きることも出来ないなんて、こいつはやっぱりお坊ちゃんだ。
「なに考えてんだ？」
「別に。秘書に朝起こしてもらってるんだなぁって思っただけ」
「ふん、言ってろ。お前、飯作れるか？」

いきなりなにを聞くんだ、こいつは？
「はあ？　なに言ってんのよ。一人暮らし始めて何年経つと思ってんの？　ご飯作れなきゃ死んじゃうでしょ！」
「ならいいな。洋行にお前の服を買って来させるから、咲弥子が朝飯を作れ」
買うなんてお金が勿体無いって思ったけど、こいつにとっちゃ大したお金じゃないんだな。
あたしが絶句していると、隆広は煙草に手を伸ばした。外国の煙草みたいで、銘柄は知らないものだった。それを一本咥えて、ダンヒルのライターで火を点けた。美味しそうに紫煙を吐き出してから、咥え煙草であたしを見る。
「あのドレスは着たくねぇんだろ。だったら服を買うしかねぇじゃねぇか」
「じゃあ、あんまり高くないのにしてよ。っていうかさ、こんな時間にブティックなんて開いてないでしょ。あ、２４時間スーパーとか？」
「阿呆。んなとこで服なんか買うか。店の奴を叩き起こすんだよ」
な、なんてことするのよ。そんなことしてまで新しい服なんかいらないってばさ。とりあえずあのドレスを着てあたしのアパートに行って、着替えてくればいいでしょ。
そう提案したのに、こいつは全然聞いてくれなかった。
どうしたらこの金持ちボンボンの考えを改められるのか悩んでいると、ドアをノックする音が聞こえた。
慌てて布団を引っ張り直して、今度は体全部を隠した。さっきはホントにちょっと隠しただけだったんだもん。あたしがそうしたのを確認してから、隆広が声を掛けてくれる。たまにこういう面を見せるから、あたしは迷っちゃうんだ！
「入れ」
「失礼します。隆広様、ちょっとよろしいですか？」
「なんだよ」

秘書の手招きに、吸っていた煙草を灰皿で揉み消して、隆広はベッドを降りていった。う、やっぱりスッポンポンだ。こういうの秘書はどう思ってんのかね。
洋行を見ると、なんだか怒っているような呆れているような、そんな表情。それを見て隆広は、ベッドに脱ぎ捨ててあったバスローブを羽織っていった。
むむ、あいつに行動を改めさせるなんて、この秘書は出来る奴なのか？
隆広が出て行ってドアが閉まった途端、向こうから大きな声が響いた。
「藤野咲弥子をマンションに泊めるなんて、なに考えてんですか！！」
おお、凄い。上司を怒鳴れるなんて、なかなかやるじゃん。
「玄関に靴があったろ。なんで気付かねぇんだよ」
「うっかり見落としていました。しかし、泊まらせるならそうと連絡して下さいよ」
「そういうお前だって、黙ってコンドームを買って、寝室に置いておいたじゃねぇか」
「まさかの時もあり得るかと思っただけです。まさか本当に、買ってその日に使われるとは、思ってもいませんでしたが」
だよねぇ。でも、助かりました。
「それよりな、お前咲弥子の服を買って来い」
「はあ？　着替えを持ってこなかったんですか、彼女は」
「『椿』から直接ここに連れて来たんだよ。俺が贈ったドレスは着たくねぇらしい」
「まぁ、そうでしょうね。彼女の気持ちは分かります」
おお、庶民感覚の人が隆広の傍にいたよ。ちょっと安心。
ハッ！　なんで安心なんかしてんのよ！？　あたしは隆広の秘書になんかならないから、別に庶民感覚の人がいようがいまいが、関係ないでしょ！

ブンブン首を振って変な考えを追い出していたら、またドアの外から声が聞こえた。
「服は何でもいいんですか？」
「ああ、とりあえず外に出て行くのに問題なけりゃ、いいんじゃねぇか」
なんちゅう大雑把な。まぁでも、シャツとジーパンとかで十分よ、あたしは！
「サイズは分かりますか？」
「上から８５、６２、８９だ」
「……なんでそんなことを知っているんですか？」
「そりゃ、実物の下着を見たからな」
へ？　下着？　あっ！　ホテルでの「実物があったから」ってセリフは、そういうこと。なんだ、そうだよね。さすがに触っただけでサイズが分かるなんて、あり得ないよね。
「とりあえず、近くのジャスコに行って来ます」
おお、やっぱり庶民感覚を持っている！　そこでいいですよ。下着は昨日のでもいいんで、シャツとズボンがあれば！
「なに！？　咲弥子にあんな安物の既製品を着せるのか！？」
がくっ。ええい、負けるな洋行。ジャスコでいいのよ、いいんだからね！
「隆広様の選ばれる服ですと、彼女はなかなか着ないと思いますが。それに、車で往復３０分くらいですから、すぐに帰って来られます」
「……ちっ、しょうがねぇな」
おお、隆広が折れた！　この秘書凄い！　思わず拍手しちゃったよ。
「あっ」
拍手してる間に、隆広が寝室に入ってきた。あたしを見て、不本意そうな顔をしている。
「咲弥子、随分嬉しそうだな」
「そりゃあね、あんたの周りに庶民感覚をちゃんと持った人がいれ

くれて、よかったわよ」
「ふん、その代わり朝飯作れよ」
「分かったわよ、それくらいはしてあげる」
ベッドのすぐ下に、昨夜隆広に借りたバスローブが落ちてるのを見付けて、それを着込んだ。やっぱりでかいな。ベッドを降りると、右足首に包帯が巻かれている。そういえば、湿布してくれたんだっけ。
床に足を付いてみると、あまり痛みはなかった。
「足の具合はどうだ？」
「あ、うん。そんなに痛くないよ。ありがと」
「俺は風呂に入ってくる」
自分だけかい！
「ちょっと、女の子にご飯作らせるくせに、先にシャワーを浴びさせてくれないわけ？」
「ちっ、しょうがねぇな。早く入って来いよ」
なんだ、その言い方は！　やっぱりこいつは最低な奴だ！
反論しても疲れるだけだから、さっさと寝室を出た。

勝手にボディシャンプーとタオルを拝借して、バスローブを羽織って寝室に戻ると、隆広はベッドに腰掛けて、つまんなさそうな顔で煙草を吸っていた。
「出たよ。先に使わせてくれて、ありがとね」
一応、お礼は言っておく。隆広は呆れたような顔で、まだ半分しか吸ってない煙草を灰皿で揉み消した。朝起きた時に1本吸っていたはずが、灰皿にはもう5本も吸殻がある。どんだけヘビースモーカーなんだって。
「ふん、俺より先に入らせろなんて言う女は、お前が初めてだぜ」
「あ、そう。でもご飯を作らなきゃいけないんだから、先に入らせ

てくれるのは当然じゃないの？」
　要するに、これはご奉仕だもんね。そう言ってやったら、えらく驚いていた。
「なんでそんなに驚くの？」
「いや、大抵の女は、俺に飯を作りたがっていたからな。お前はそうは思わねぇんだ」
「なんであたしがあんたに、無償でご飯を作ってあげなきゃいけないのよ！　今日のは洋行が着替えを買って来てくれるから、その代わりでしょ！　大体、作ってもらって当たり前っていう、その精神がお坊ちゃまなのよ！」
　お坊ちゃまと言ったら、あからまに不本意そうな顔をした。なによ、その通りじゃないの。
　全くもう、ムカつく。あたし、こんな奴が好きになったの？　絶対そんなことないない！　セックスが上手いから、一時的にそう思ってるだけよ！
「じゃあね、先にシャワーを使わせてくれてありがとう。さっさと入ってきたら？」
「ちっ、可愛くねぇ言い方だな」
「だから、あんたに可愛いと思われたってしょうがないってば！きゃっ」
　ベッドから立ち上がった隆広に、いきなり肩を掴まれてドアに背中を押し付けられた。
「ちょっと、なにすっんぅ」
　だから、なんでキスするのよ！　すぐに解放されたけどさ。眼前に迫ったその顔は、ちょっと怒っているみたいだ。
「俺はお前がほしいって、何度も言ってんだろ。本気でお前以外の女はいらねぇんだよ。だから、もちっと可愛くしやがれ」
「やだっ！　可愛くしてほしかったら、ちゃんとそういう風に扱いなさいよ！」
「ふん、言ったな。じゃあ、お前を可愛くしてやる」

「は？　うわっ、ちょっとなにすんのよ！」
またしてもお姫様抱っこされて、連れて行かれたのはベッドの上だった。
着ていたバスローブの紐を引き抜かれて、前を肌蹴られる。あたしがギョッとして前を合わせる暇もなく、ベッドに押し倒された。
「ちょっと、朝っぱらからなにすんのよ！」
「お前はセックスしてりゃ、可愛いからな」
「なっ！？　やだっ、ちょっと、まっあんっ」
無防備に晒されていた胸の先端を舐められて、つい甘い声が上がっちゃった。くそぉ、こいつ、やっぱり最低！
「さっさと上から退かなきゃ、また股間を蹴り上げてやる！」
怒鳴りながら片膝を上げたら、隆広は電光石火の如く飛び退いた。いやぁ、その素早さといったらすごいね。これからは、こうやって脅してやろう。
「ったく、なんてことを言いやがる！」
「ふんだ、逃げておいて言うセリフじゃないでしょ！」
「逃げてねぇ！　安全を確保しただけだ」
それが逃げてるんじゃないの。負け惜しみ言っちゃって。まぁ、これ以上言っても不毛なだけだしね。あたしだって、素足でそのムキだしのところを蹴り上げるなんて、やだよ。
体を起こして、肌蹴られたバスローブを直した。手の平を上に向けて差し出したら、大人しくバスローブの紐を渡してくれた。
「大体さぁ、ご飯食べたいんでしょ。だったら、それを邪魔するようなこと、しないでよ。それと、もう少し自制心持ったら？」
「うるせぇ」
それなりに痛い言葉だったのか、隆広はむくれた表情で寝室を出て行った。これで30歳なんだから、男って子供みたいだよね。
うーむ、今まであいつと付き合っていた女たちは、こういう子供っぽいところが気に入ってたのか？　分からん。
あたしは……まぁ、面白いなとは思うけど。でも、こいつと付き

合ったら色々疲れそう。セックスもそうだけど、何かっちゃこうして言い合うんだもん。
そういうところが気に入られているとか？　やだやだ、変なことは考えずに、ご飯を作ろう。あたしだってお腹空いたよ。
無駄に広いリビングを抜けていくと、キッチンらしきスペースに出た。リビングとの境には、ちゃんとダイニングルームもあって、標準的なサイズのテーブルと椅子が４脚置いてあった。
うん、大きさは標準だけどね、その物はしっかりアンティークなテーブルと椅子だったよ。まぁ、大体予想はしていたから、もう驚きもしないけどさ。
ダイニングルームとキッチンの間には、物が置けるカウンターがある。これは便利だわ。
キッチンに入ると、とっても綺麗に整頓されているのに、ちょっと感動した。まるで雑誌に紹介されるモデルキッチンみたい。しかもＩＨクッキングヒーターだ。初めて見たよ。あたし使えるかな？
冷蔵庫を開けてみると、作り置きされた料理がいくつか入っていた。あの洋行という人が作ったんだな。どれどれ。
むむ、結構本格的な料理だ。かぼちゃの煮つけにレンコンの煮付けがある。きんぴらごぼうにひじき、おお、にこごりまであるよ。あの人すごいな。この仕事の他に、ちゃんと秘書の仕事もしてるんでしょ。あいつの秘書って、結構優秀なのが多いのかも。吉永里久は、隆広と同類だけど。
他に食材を探すと、卵、ハム、レタス、きゅうり、トマト、セロリ、キャベツ、などなど。冷蔵庫以外にも、じゃがいもやさつまいも、上げたらキリがないほど十分に揃ってる。
肉や魚はさすがに数が少ないけど、手羽元と鮭の切り身があった。
ふむ。ということは、作り置きの煮物を出して、出汁入りの厚焼き玉子に、レタスのおひたし、さつまいものお味噌汁と焼き鮭でいいか。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5333w/

Love Mode

2011年9月26日15時04分発行